

川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成元年九月二十五日 印刷
平成元年十月一日発行(毎月一日発行)
創刊大正十三年 通巻七四九号



日川協加盟

No. 749

平成元年度 二賞発表

十月号

俱会一処の川柳塔 建立募金のご案内

初代川柳二百年忌と麻生路郎二十五回忌の年に当り、このたび総本山金剛峯寺高野山大霊園に川柳塔社同人物故者のための川柳塔と、「川柳は人間陶冶の詩である」の路郎語録を刻んだ石標を建立する運びとなりました。墓域は匿名同人の寄贈により確保できましたので、川柳塔と石標の建立ならびに開眼式などの基金を左記のとおり募集いたします。

「俱会一会」の聖域への意義深い趣旨に、同人諸氏のご賛同と絶大なるご支援をお願いいたします。

一、募金目標額 二百萬円

一、一口 五千円（何口でも可）

一、完成予定 平成元年十一月

☆送金は現金封筒、小為替、振替用紙等で川柳塔社
会計室（高杉鬼遊方）へ

〒581 八尾市中田二一三〇二

振替口座 大阪 81-3333-68番

川柳塔社

平成元年度 大阪文化祭

第41回 川柳大会

と き 平成元年11月4日（土）

午前11時開場 午後1時締切
午後2時から披露および表彰

と ころ 大阪府中小企業文化会館

地下鉄「谷町9丁目」⑤番出口・谷町筋南へ7分東入ル
地下鉄「四天王寺前」下車・谷町筋北へ7分東入ル
近鉄「上本町」下車・南西へ10分

兼 題

「肌」 神前 朋義 選
「煉瓦」 田中 正坊 選

「時計」 住田英比古 選

「潤」 高橋 白兔 選

「最近のニュースから」 柏原幻四郎 選

席 題 当日 2題発表

出 句 兼・席題とも2句（出席者に限る）

会 費 一、〇〇〇円（作品集代含む）

主 催 大阪府・大阪市

大阪府・市教育委員会

協 賛 日本川柳協会

川柳塔

西尾 栞

絆を以て此処に愉しく眠る

平成元年秋

川柳塔社代表 西尾 栞書

ということに意見が一致して、去る九月十日、世話人が高野山に行つて、手続きをすませた。

続いて会計の方から発言があり、すでに二口、三口、四口と申込みのあることを発表され、万雷の拍手となった。

帰宅して女房に、今夜の出来事を話すと、早く川柳を上手になつて、同人にしてみらいたい、その塔の中へ入れてもらわんと淋しいわね。もう遅いかしら……日暮れて道遠き感の言葉で、我が家の夜の十時は賑やかだった。

先月号で宿題になつていた、慰霊碑か供養塔かについての相談が、九月一日の常任理事会で決定した。色々と意見が続出したが、結局、あっさり「川柳塔」と正面に刻むことにして、石標の表は、

柳聖 麻生路郎 語録

川柳は人間陶冶の詩である

寝転べば畳一帖ふさぐのみ 路郎

そして、その裏に、

川柳塔社同人は死して

尚柳号で呼びあい

永遠に川柳を語り合う

路郎語録高野の奥の蟬時雨 栞

川柳塔の下千万の虫の秋 〃

熱燭や高野の塔に雪しきり 〃

春の風川柳塔にふれてみる 〃

お願い、一日も早くご喜捨の程を。

座右の句

おたやんは大阪弁で喋りそつ

(薰風)

私の句

飲みすぎて環状線を二度廻り

神保拓生

川柳塔 十月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

川柳塔	西尾 栞	(1)
パラノイア症候群	野村太茂津	(2)
川柳塔(同人吟)	西尾 栞	(4)
自選集	東野 大八	(30)
■川柳太平記(137)	川柳の群像 福井天弓	(34)
■連載 柳籠裏三編研究(一丁)	黒川紫香選	(36)
水煙抄	野田素身郎	(38)
平成元年度路郎賞・川柳塔賞決まる	林 荒介	(63)
秀句鑑賞	同人吟	(33)
水煙抄	橋高薰風選	(60)
愛染帖		

パラノイア症候群

野村 太茂津

『もともと日本国は、他の国に負けないぐ
 らいの、貴重なユーモアを蔵していた国で
 あったのだが、いつ頃からか、ユーモアは顧
 みられず、馬鹿にされ、文学の領域におい
 てもクソ真面目な眉に皺をよせた、そして苦惱
 を一身に背負ったような疎外文学、孤独文学、
 虚無文学が横行し、ユーモアもまた人間を冷
 笑し、嘲笑するもののみが立派という風潮が
 流行しはじめた』(遠藤周作)

まだ世間に夜の闇の恐怖(ホラー)があつ
 た時代、怪談にも神秘的な、超自然的な中
 も、なにかしかの文学的・芸術的遺産のよ
 うなものがあった。

つれづれなるままに、ある句集を開いて
 みた。この発行者は、ぬけぬけと「読み応え
 のある内容と確信している」と述べている。
 その上に、「良い作品とは個性的で楽しい。誰
 にでも分る作品の多くは感銘が薄くてつま
 らない」と、正直に誰にでも分らん句を並べ
 ている。作者ご本人も分かっているのかど
 うか、韻を無視した「上六・中八・下八」など
 の破調の句はザラである。

■女性コーナー 茴香の花……………	小出智子選……………	(64)
「窓」……………	松川杜的選……………	(68)
一路集「結ぶ」……………	稲葉冬葉選……………	(68)
「時計」……………	田口虹汀選……………	(69)
初歩教室「味覚」……………	阿萬萬的……………	(70)
■ずいそう 懐しの立川文庫……………	望月六郎……………	(66)
西日本川柳大会に参加して……………	八木千代・林瑞枝……………	(72)
本社九月句会……………		(74)
川村好郎50句……………		(78)
各地柳壇(佳句地10選/牛尾緑良)……………		(80)
柳界展望……………		(90)
■十月各地句会案内……………		(93)
■編集後記 阿萬萬的・高杉鬼遊・田中正坊……………		(95)

座右の句

遠き人を北斗の杓で掬わんか

私の句

人形でおれない笛の音が続く

(薰風)

舟渡杏花



それらの作品中の言葉を掴みあげてみよう。楯山、遊女、仮面、捨て墓、呪術、こぼれ闇、哭きたい海、死ぬほど単調、素枯れの魚、寒いあくび、のけぞる猫、がにまた牛、卒塔婆、死、柩……E.T.C

これらの作品が「個性的で楽しい」「らしいが、「個性的とは「ひとりよがり」ではなく、良質な詩性精神に叶う」と自賛し、「ひとりよがり」している。矛盾だからである。

この句集に寄せている作品の評言にも、無責任な煽りや自分が川柳作家の第一人者だというような思いが見えて、選者の批判にまで及んでいる。

『川柳大会は続くが、年功序列のみの選者が当然のように並んでいる。作品を持たないものが他人の作品を評価する等思いがりではない。実力作家でない選者がこの先も続くなら川柳は益々絶望的と言わねばならない。殊に川柳指導者が良い指導を、選者が良い作品の選出を心掛けるために基本を見極めて欲しい……』。

正に言いたい放題、野良犬の遠吠え、八つ当たり支離滅裂で、この人の作品どおりである。『つまらぬことがつまらぬと思うのは正直だが、利巧ではない。馴れて器用になると心は貧しくなる』と述懐しているところを見ると反省もしているようだから救いはある。川柳は詩である。詩は川柳ではない。

川柳塔

西尾 栞選

奈良県 田中 紀美代

猫の手も借りたい時に犬のえさ
絵ごころで干物の姿選っている
胸の中マグマぶくぶく太り出し
童心のままて亭主の夏休み
アドバイスむっとするほど鋭い娘
ふるさとが育てた温い友ばかり

平田市 久家 代仕男

間借りして女系家族にもてている
雑草で育ちおもねること知らず
浪費癖いつも蛇口が漏れている
天高し死にたいなどと思うなよ
稽山で問えばどなたも失語症
山羊髭のおじさんが居る水車小屋

岡山市 嘉数 兆代賀

風は駅 紙風船をとばそうか
子の貨車を闇の深さへ突き放す
風の噂へいっぽんの葦ゆらぐ

あきらめた日から茶漬けが音をたて
萩のみち泣いて訣れた風に逢う
そして秋 余生いくばく等おもつ

松原市 谷垣史好

ハンモック頼りないのが人生か
あの頃はひと息で風船がふくらんだ
舌下錠まだ使わずに済んでるが
親と娘としめしのつかぬ長電話
芋虫の恋をだあれも気がつかず
小生と書いてしつくりする手紙

西宮市 西口 いわゑ

空っぽの頭で金魚眺めてる
空の青みんな嘘だと言う如し
午前二時月下美人のひとり言
さるすべり亡父の病を思い出し
缶ビール並べ車窓の詩人たり
積乱雲天女の墨絵かも知れぬ

弘前市 波多野 五楽庵

鳳仙花昔少女の爪を染め

駄菓子屋に私の過去が売つてある

灰皿があつた不思議な女部屋

ニッコリと笑つて帰るのが詐欺師

窮鳥へ小銭ばかりを見せてやる

葬儀屋が帰ると風は秋になる

松江市 恒松町 紅

幾種もの煎じ薬を生き甲斐に

山門を高級車で出る略僧衣

一徹も頑固さもない弱い父

銃舩舩も縫せていくさの物語

機械音ばかりで職人氣質落ち

丁シャツの衿根性の汗がない

松江市 舟木 与根一

台所から浮動票うごき出す

男から均等法を申し出る

また女性強くしている消費税

脱農も軌道にのらぬ指の節

農政の行き着くところ草の丈

亡母の齡近づきははの墓洗う

兵庫県 遠山 可住

シヤッターのポーズへ馴れてる美人

蜘蛛の巣よすまぬが祭り近くなる

フルムーン女房が腕を組みに来る

老眼鏡いま落ち着かな負けになる

豆腐屋も酒屋も近し老いやすし
子育てが済んだら猫を可愛がり

八尾市 高杉 鬼遊

消費税おれが払うとレジに立ち

坂に住む人が見下す港町

人妻の恋も浮世のおつきあい

嫁はんに殺されるほど悪くない

人のお金を預かつている生きてる

死にたいと思う日はなし赤まんま

米子市 林 荒介

鍋の蓋長い手紙を読んでいる

昼の月 昨日のことは忘れよう

五線譜のあいだに鳩を遊ばせる

炎天の雲と泳いでいるアゲハ

せせらぎを今も涉っているほとけ

旅人の肩のあたりに月のぼる

米子市 小西 雄々

糖衣錠礼儀わきまえ溶けていく

幸せも写して欲しい水たまり

未来図を見つめあせらぬ蝸牛

スタートへ自制うながす句読点

ほどほどの妥協で夫婦独楽まわる

オバタリアンの闊歩を責めるのはよそづ

倉敷市 小野 克枝

今日からは患者やさしくなりましょう

ひと休みせよと冷たいレントゲン

娘と同じ背丈ナースの掌が温い
憎しみの果てを無心の瞳が救う
母逝くを知らずにバラは赤く咲く
千の音千べん鳴らせ吾が命

高槻市 辻 白浜子

ワープロを打てる息子に頼りきる
コーヒーへ誘うてひと肌ぬぐ話
住所だけ知りたい名刺貰うとく
赴任地は善人だけという訛り
すぐ敵に回る火種を抱いている
伴奏が悪いと音痴に思われる

桜井市 岩本 雀踊子

「おい」で通じる妻の愛だろう
噂にも敵が七人いる男
父なりに生きてる私の市民税
火消壺古い女で生きた母
梅干を干して母の味にする
台本になかった科白にある本音

和歌山市 西山 幸

天高し嘘のつけない日が続く
秋風へ自己主張する肩パット
曼珠沙華の朱をかなしいなと思っ
高望みしないひとりの焼なすび
扉を閉めて神様の瞳を通れよう
裏目裏目に出る骰子を振っている

豊中市 田中正坊

身を立てて名はまだ上げず太郎冠者
わが娘ながらも母はたくましき
秋風が吹けば詩人になるつもり

韓国の旅

石塔の影優美なり仏国寺 (慶州)

大陵苑国花ムグンハ今盛り

美姫の舞絢爛として都の夜(ソウル)

一期一会風の絆をだきしめる
もういちどチャンスくださいお月さん
鉛筆をにぎったまんま眠りこむ
三度目はきっちりお断りをする
打ち明けていっそう孤独深くなり
冷房をさかしすぎ焼き鍋かこむ

松原市

佐藤 藤子

転居通知タイミングよくかもめる
夾竹桃不倫の恋に燃えている
童心に還り朝顔の数を読む
手押車此処のお内もお年寄り
百点はやれぬが妻の夏帽子
蟬しぐれ尼僧に綴るものがあり

京都市

松川 杜的

老兵に懺悔を迫る雲の峰
マドンナに委せて男眠れそう
秋風の中で動いたのだ仏
かくし味ほどの情にすがりつく

藤井寺市

吉岡 美房

求人の欄にも載らぬ齡となり

江戸っ子は蕎麦ばかり食う時代劇

大阪市

西出楓楽

ペーコンをカリカリに焼く朝の章

ごはんにもパンにも飽いた何としよう

まなうらに湖を持つ画学生

夏のグルメにこだわっている冷奴

頭の中でときどき起きる土砂崩れ

チリひとつない町並で親しめぬ

下関市

石川侃流洞

背の子へ引かすと当りそうな簞

納骨堂はテーブ住職趣味多忙

勧農帳先祖の汗を衣魚荒らす

カルチャーへ夢あり土を捏ねている

堺市

中川滋雀

辞書にないコトバがひとり歩きする

どんぐりの背比べ外野がうるさすぎ

掃除機に吸わす愚痴ならあり余り

腕立て伏せ誰も見てないかたつむり

妻の目が急にやさしい三りんば

奈良市

宮口笛生

洗濯機男を馬鹿にして回り

独りになると男は弱いなと思う

すぐ裸になれる男の夏がある

盆の墓草芒々の墓もある

宿題へ三日になった夏休み

堺市

高橋千万子

サングラスの男へ夕立たたきつけ

じいちゃんに財産があり後妻が来

言うまでは触れず離婚の友と居る

炎天の海へ人間蟻になり

日々多忙静かな秋が来るかしら

倉吉市

奥谷弘朗

朗らかな男に明日の顔がある

お金では買えぬ善意の友を持ち

寝たきりへ嫁アンテナになってあげ

女房の何と不思議な記憶力

肝心な時に丹精ものを言う

京都市

都倉求芽

天才がまた迷惑をまき散らし

文明文化でのひらみんな柔い

都合のいい時が善人の出番です

道ついて浜は都会の子にとられ

電話二時間それでも家事は回ってる

豊中市

安藤寿美子

十二人家族並んで食事する

送り火を焚いて座敷が広くなる

不整脈かぞえているうち寝てしまふ

出来すぎた返事をうのみに出来ぬ

八尾市

宮西弥生

一杯の朝のコーヒで鬼になる
旅に出て大きな自分に脱皮する

風化した石に歌人は生きつづけ

お地藏さんに秋がきました彼岸花

浴衣の襟合わせて気付く小さい秋

笠岡市 松本忠三

親戚に医者と坊主が居りますの

度外視にされてあなたはまだ居たの

傷つけず言わずもがなで引きあげる

拍手喝采なんの事だかわからない

手に汗を握る他人の事ながら

伊丹市 櫻谷寿馬

砂浜に人生と書く皺の指

湯上りの息子へ母の眼が惑い

絵心を試されている応接間

床の間のダルマに弱気見抜かれる

女でもよかった大臣あり党首あり

名古屋市 越村枯梢

そう言えば去年の出合いもおぼろ月

裸婦像に見惚れて妻に突つかれる

たった一度好きだと言っただけのこと

お蔭さまで膨みました小銭入れ

プロ野球に熱中 俺はそんなにも馬鹿か

奈良市 天正千梢

血を流す覚悟はとづくに出来てます

関係ないのに含み資産の事にふれ

一步前進と肝に銘じて恥をかき
変りないのが最高だと分りかけ

本筋へ茶々入れられたが納得し

夢の中あなたのコピー抱いてます

絵心がほしい瀧江の川下り

釘ぬきの届かぬ位置で策を練る

闇市もきやはんも昔の物語

突っ張ってみても泣いてる影法師

神戸市 山口美穂

少し惚けた老母の笑顔が愛らしい

夢の中へ亡父が帰った盂蘭盆会

朝シャンのすがすがしさよ蟬しぐれ

小さい肩書そんな肩書き重い朝

百八十度考え変えて楽になり

松山市 谷信夫

孫の手が一番孝行してくれる

森のお祭きのこがみんな踊ってる

外出は付添さんの紐つきで

自転車にまだ乗れそうな気はするが

天井ととりとめのない独り言

西条市 片上明水

一年前写真が嘘のようなガン

この土地が僕のふるさと蚊に喰われ

先々と聴くから先が言えなくて

義理という用事が箱にすぐ溜り

乗換えた席もやっぱり陽が当り

仙台市 川村映輝

地球破壊フロンもハロンも消えてゆけ

今までの発言邪魔になる野党

政権をよこせ寄越されても困る

生活保護うけて消費税に反対し

裏方が好きで表には立たず

倉敷市 稲田豊作

うれし泣き一度させてと母が言う

貧乏と四つに組んだ長相撲

宥さねば私に笑顔房らない

いいバイトあるから講義休んでる

年寄りを取越し苦勞で暇つぶす

兵庫県 辻文平

ささやきを妻を忘れた顔で聞く

花言葉などは知らない花が好き

嘘でいい嘘のまんまで眠りたや

逢うた夜のコケシが返す火の言葉

ブローチを派手に女が武装する

羽曳野市 塩満敏

国民に政治教えた消費税

野党圧勝日米安保浮上する

ノーモアヒロシマ婿殿代参す

盆休み隣もオシメ干してあり

今日生きた証しに愛の詩を作り

松原市 玉置重人

血圧を理由に逃げることにする

四字熟語 君も私も日本人

三回は同じ話をしてしまう

入道雲よ青春は遙かなり

とれたてのトマトうれしお裾分け

松原市 小池しげお

友達に悪いのがいて街に住み

改心をしない益だつてある

茶碗割る程の喧嘩がまだ出来ぬ

父の釘曲つて打ったことがない

物わかりよくなり白髪ふけてくる

今治市 矢野佳雲

久し振りなどとほひとに聞かす仲

負けぬこつ聞くとあんさん逃げなはれ

掃除機の口癖あんた邪魔ですよ

あみだくじぐらいで闘志湧いてこぬ

赤ん坊の裏も表もない笑顔

宇部市 平田実男

道真もこれは無理だと思ふ絵馬

二回目ケーキカットの手が確か

子に意見され口惜しさと嬉しさと

平成の孫も明治の唄で寝る

たかがネクタイへ農夫の首が凝り

呉市 横田英詩

コーヒーが駄目とは手間な方がある

ご近所に尊宅配するおんな

午前さまの経験がない甘党で
盆正月ぐらい孝行しています
修行僧の懺悔に似たり二日酔い

島根県 西村 早苗

ほとぼりの冷めた噂を持ち続け
また逢おと言うたまんまの夏帽子
鍵っ子が話すとオームよく喋る
プラモデル棚に並べて車好き
小鳥飼う女も佐渡と聞いただけ

島根県 堀江 正朗

美しい記憶波濤のごとき日よ
六根清浄 心の山よ虹のみち
考えてみれば他人ごと僕は闇
音ひとつ右か左かとまどわす
長寿道 酒をやめようかと笑う

島根県 堀江 芳子

暗やみの中で翔んでる夫の勘
兄がいたそんな端正童子さま
罪のない寝顔は苦労たたむ顔
あきらめがついて空腹感じさせ
指先も不満知ってる動きよう

島根県 小砂 白汀

視野狭窄われ人並みに年をとり
けんかするあいても居らぬ秋の暮
山が哭き樹が泣きさけぶ土石流

蟻の巣をつついたような負け戦
本心をさらけ過ぎたと花ざくろ

島根県 錦織 文子

義理果す新幹線の旅づかれ
楽しくて淋しくて独りの日が暮れる
長生きの家系へ此の頃思うこと
母の日へ遠く住む娘の飛行雲
ハンカチの白さへ無心書いてある

和歌山市 堀端 三男

衆目を集めて美人降りた駅
絵日記のたねに終日連れ出され
草野球帽子揃えて参加する
不渡りをくらったようなかもめーる
生きてれば年金少しずつ上がる

和歌山市 福本 英子

向い合せに亡夫の椅子がでんと居る
男手が欲しいと思う芝刈機
古里の臭 夜店のイカ焼屋
片づけて叱られている娘の新居
育児書を片手に汗の離乳食

和歌山市 垂井 千寿子

孟蘭盆会マイカーご先祖乗せて来る
多数決やっぱり母に味方する
肩叩く機械は不服など言わぬ
空白の日記は子育て奮戦記

冷房の部屋で熱帯魚が育ち

和歌山市 松原寿子

女ひとり生命を賭けてみたとても
横糸にもなれずさだめの渦といる
日記帳たしかに昨日が哭いている
しあわせの先の風なら信じよう
的をつく言葉へ溶けてゆく慕情

和歌山市 牛尾緑良

ひとり芝居がつづくベッドをきまして
錠剤は今日を信じておれば良い
結論の無い点滴がつづいてる
陰のないレントゲン写真が私です
ごちそうさまの後の葉が欠かせない

和歌山市 桜井千秀

雌鶏の土搔く辺りから時雨
泣きを消す秋風にある無情
ノンペンダラリ気楽そうだが真似できぬ
抽斗をぶつちやけ昨日捜し出す
コスモスも茂ると窓辺暗くする

和歌山市 福井桂香

損得で量る価値ではたかが知れ
差別して心の湖が波立ちぬ
いいものはいいと認め合う余裕
出目金で百パーセント黒を着る
ワイングラスに遊び心を見透かされ

松江市 柳楽鶴丸

オバタリアン ドライフラワーとも言われ
グルメの旅妻もやみつきになるだろう
町内のクッション役になってやる
夢で描いた裸婦がどうしても描けず
人畜無害と御婦人にひやかされ

米子市 石垣花子

渋滞は旅の予定に入れて無い
ドイツ語で医者がやりとりする予感
趣味の線越えてると見る妻子感
いつもいつも涼しいところは鬼の場所
タデを喰う虫の居ること忘れてた

米子市 林瑞枝

樹下美人ロダンの影と重なりぬ
結論のひとつへ和むバラの棘
雨の日は明るい彩の傘をさす
山脈を背にして秋の縄を縛う
夢を呼ぶニュースに湧いた風の町

米子市 青戸田鶴

さわやかなお早うが行く朝の道
曲り角深いお辞儀をして曲る
オクターブ女性の声がまたあがる
蟬しぐれはかない命など言わぬ
同じ絵の中で踊っている私

米子市 田中亜弥

童心にかえりしきりに花をつむ
花いちりん悲しい席はもういらぬ
秋の約束十の指では足りないぞ
どの鍵も拒否反応をして困る
射程距離で噂流すは止めようぜ

米子市 菅 井 とも子

おじいちゃんへバイトで菓子宅急便
お使いのついでに海水浴をした
生きのびた鳥に木守柿がある

何時かは逝く黄泉の入口見て帰る(加賀の蒲戸)
行く末はどうあれ飯を炊きつづけ

米子市 政 岡 日枝子

柱ぐらい建てたと思うアルバイト
追い風のチャンス逃がす手はないぞ

台所で母は詩人になっている

ワープロに小馬鹿にされております
初恋茫茫年齢はたがいにかぞえまい

米子市 澤 田 千 春

故郷の太鼓郵便受けでなる
はずまない手毬が見てる夏の空

久しぶりに虹を見ました息とめて
手入れた庭石父の顔をする

亡父の杖みがいて心満たされる

唐津市 田 口 虹 汀

猫の蚤とって優雅な暮し振り

器用ではないが蠅なら逃さない
定年で晴耕雨読二食付き
孫の手が欲しい私は独り者
遠花火我が青春の恋に似て

唐津市 久 保 正 敏

匿名にしたペン先の喋りすぎ
玉手箱開けて再会諦める
宿題を子が手伝って夏終る
財テクに長けて貧しい心持つ
後輩の万年青年先に逝く

唐津市 仁 部 四 郎

早朝の間違い電話客のうち
賞罰の欄の白さが保険証
目を奪う速さで女巢を換える
定年に咲いた一花五DK
弔電の順序に異議のある故人

唐津市 浜 本 義 美

橋架けて島にレジャーが攻めてくる
朝市のサザエも匂う宿の下駄
即席ラーメン一個で足りる老い二人
喜びの後からついてゆく悲哀
灯を送り人を送りて村静か

竹原市 小 島 蘭 幸

盆踊り誰もやめようとはしない
一本道で果てる男のロマンだな

君と僕のいくさは終らないように
痛い痛いと妻に聞こえるように言う
夏休みひまわりほどに子が伸びる

竹原市 森井菁居

母手術(三句)

成功を待つ沈黙の控室
病室で母のプランに逆らわず
付き添うて年寄の愚痴聞いてやる
カメレオン手本に強く生きている
盛装の母は昔のもので決め

竹原市 信本博子

とてもおしやれネムで着飾る深い山
秘めやかなネムのうぬぼれ淡い紅
ネムの木におとぎ話を聞いた風
ほのぼのと心を撫でるネムの刷毛
山みどり心許したネムの花

大阪市 河井庸佑

温もりのある忠告と読み切れず
感情を害しただけの嫌な席
末席がいちばんきついことを言う
暴言をはいて孤独をかみしめる
ユニークさ良いと苦しい批評する

大阪市 江城修史

夾竹桃永久に語れよきのこ雲(原燃忌)
負い目ある限り心の喪は明けぬ

どん底に友の情けが生きている
盾となる妻はわが家の命綱
愚痴言わぬ妻は明日へ身構える

大阪市 津守柳伸

水色の恋さわやかなシャボン玉
大発見乳房の下に溜る汗
個人差があつて痛みも中ぐらい
停年が欲しい居職の窓あかり
送り火を焚いて童女に戻る類

大阪市 本間満津子

会者定離幾人の手を握りしか
世の中は損する人もいてまわり
手応えはたしか一矢報いたり
良いみやげ高い敷居を跨がせる
気の置けぬ友も私もうどん好き

大阪市 神夏磯典子

冷房のビル啜うよう百日紅
冷房好き冷房嫌いで夏が逝く
ささやかな幸せ告げる墓参り
新調の喪服眠ったままでよし
政界の渦巻よそに赤とんぼ

大阪市 黒田真砂

世の中の動きにうとい車椅子
炎昼の石けり妥協すると決め
少し苦いコーヒー入れてうつ払う

黙つて一番きつい矢をはなつ
言い難いことをさらつと赤い唇

大阪市 藤田 頂留子

にわか雨さけたパチンコにもふられ
残暑なお老いの部品にこたえませ

不意に来てすがれと神を説く帽子

路地なさけ吹き込む玄関そく茶の間

誘蛾燈じみたネオンにひかされて

大阪市 北 勝美

ふる里に今も生きてた洪団扇

炎天の墓参へ回る墓三つつ

南無阿弥陀線香分け会う六地藏

大き過ぎ知らずにくぐる大鳥居

鬼あざみ愛を囁く黒揚羽

寝屋川市 江口 度

妻の友みな豪邸に住むという

体調のわかる煙草でやめられぬ

夕涼み乱数表をふところに

来たことはないがたしかに見た景色

ライバルに背中の中の傷は見せられぬ

寝屋川市 宮尾 あいき

朝顔が咲いた麗水さんの笑顔

夏ばての私をひまわりが笑う

たまの昼寝にじやまな蟬時雨

こう暑いと長生も楽じやない

露の臺祝いに盆供養後回し

寝屋川市 稲葉 冬葉

生きている限りわずかな好奇心

憩いの家は戦争を語らない

古井戸を埋める話に寄ってこそ

差を付けた筈の空しさは何だろう

フルムーン妻は帽子をほしがるぬ

寝屋川市 岸野 あやめ

もう利かぬ顔とも言えず頼られる

未来図に脳死の私など居ない

子持ち蜘蛛殺してからの蜘蛛嫌い

加茂川の恋は人目を憚らず

駅裏のおでん男の汗の味

寝屋川市 堀江 光子

植木市夜店の端に風があり

周りから顔を寄せあう蛍籠

ママを見て臨時停車の縄電車

通勤の目にポスターの海青し

装うて苦勞の顔は無いロビー

鳥取市 両川 洋々

バイブルの手垢善人かも知れぬ

ステテコで陛下晩酌したかろう

制服を脱ぐと本音がこぼれ落ち

ヒロシマの風よピカドン語り継げ

罪一つ妻には許す胸がある

鳥取県 林 露 杖

浜木綿に滴となりて月の恋
老残のいのちを賭けるなにか欲し
涸渴した詩のう潤す術がない
露天風呂先客一人浮いている
誘われて踏むステップがふと纏れ

鳥取県 松 下 たつみ

石割って生きる雑草にはなれず
思想無い小石の角が丸くなり
美しいものはつきり見えた幸
石垣のチームワークは本物だ
素人の正義が嘘を許さない

鳥取県 土 橋 蛍

蜘蛛の囿にからぬほどの落ちこぼれ
忘れようと特攻基地へ近い旅
ステテコの男が一番頼もしい
ヒマワリの花はまわって善人へ
すこうし瘦せたいと思う恋病

鳥取県 新 家 完 司

なにごとくも無かった顔で帰宅する
蛇口から水が出なくてうろたえる
船の絵の葉書を山のともだちに
バカモノと受話器を置いてからどなる
ゆつたりと騙されようか合歡の花

尼崎市 春 城 武庫坊

大正の口になじまぬ冷やし飴
手抜きした子育て因果の受験生
カルテ書き終え次の言葉を待っている
微笑する医者その裏考える
十月の風生きる力をのせてくる

尼崎市 春 城 年 代

きずい気儘にチャンネル変える盆休み
螺旋階段少し気取って降りてみよ
酒の上のきっかけなどはどうであれ
言い訳はすまい入道雲が湧く
転び癖なんのかわかることがある

尼崎市 奥 山 美智子

まっすぐに心みつめて鏡
独りぼち風が味方してくれ
あれこれと噂の好きな色眼鏡
てのひらに困ったことが一つある
居留守して甘え上手な猫である

岸和田市 福 浦 勝 晴

旅にんさんといかす女将が呼んでくれ
頼りないあしたへつなぐコップ酒
死ぬのにはもつたいないほど上天気
無人駅誰を待つのか赤いバラ
死んだ子の年を数える遠花火

神戸市 仲 どんたく

一瞬に歴史を変えるブルドーザ
盆供養テープの故人のユーモア
喜寿の門まだ落城はせぬつもり
傷あとのチャックを撫でて療養記

西宮市 奥田 みつ子

花の宿 主も花の精に似る
恋の炎は嫉妬心にも火をつける
写経する無の字無の字を丁寧
慌てても残り時間は変えられぬ
男の子振った話を聞く車内

東大阪市 森下 愛論

虫カゴにごちゃごちゃ集め自閉症
人嫌い赤トンボの群という
宿命を知ってか蟬のかましい
来る来ない花をいじめる娘が一人
もう一杯後一杯が酒鬼になる

羽曳野市 榎本 吐来

夕立に一人の午後を覗かれる
男と女になり切れぬまま宵の街
朝鏡眉毛の長さから老いる
浮草に似る六十の宵の靴
盆帰郷わかばマークも列にいる

羽曳野市 田中 隆二

お隣の息子外車を乗り回し
こぼれ萩夏の噂がまだ消えぬ

兩三日もつれた糸が絡み出し
正直な男の船はすぐ沈む
玄関を出てから夫婦もめている

高槻市 川島 諷云児

スタイルが気になりだした青りんご
この指に止まってくれる人も無い
地上げ屋に意地悪される土地も無い
約束の重さに泣いている小指
八人目の敵は身内の中にいる

高槻市 河瀬 芳子

ワイングラスの底にキラキラ光る嘘
だんまりを決めこむ狡い貌の石
相談をして欲しかったとは他人
骨埋める覚悟の街の夕やけよ
まなうらに浮んで消える沼がある

西宮市 門谷 たず子

御恩報尽 寄附で微罪が消せるなら
松明に先祖が通う火の祭り
オバタリアンの意気カルチャーは花ざかり
自転車のまま逝った友の忌蟬しぐれ
いきさつも聞かずに兄が叱られる

高石市 浅野 房子

プラトニックだから吹聴して回る
しきたりに反発をする青いノラ
香水の瓶に残っていた未練

七転八倒見て見ぬ振りの他人様
保育園舌の回らぬ詩人たち

大和高田市 岸本 豊平次

あれこれと気が付きすぎて嫌われる
少年Aこの子も両親共稼ぎ

天気予報はずれそうだと水を遣り

晩酌まで待てぬ電車の缶ビール

お盆来ておばあちゃんが元気づき

宝塚市 丸山 よし津

コマージュの美女の名を言い葉買う
いつも幸せ無いものねだりしない母

長男の嫁でしんどい盆休み

手術あとすぐ見せたがり退院す

秋の夜のワイングラスはよく喋る

富山市 舟渡 杏花

補聴器のずれをなおしたい話

ナポレオンで突く雑兵の泣きどころ

棚に上げたわたしを下す場所がない

奥さんも半信半疑で聞いている

敗北感が一層つる銀の匙

出雲市 吉岡 きみえ

逆撫での風に馴らされてきたわたし

それなりの価値で一円ひろいます

この人となら行きますピアホール

フロントにおんなのような男いる

零の数軽いめまいをおぼえます

八尾市 宮崎 シマ子

隠居所の母雑音を聞いており

井戸端会議妻にもあった正義感

シヨックよね私も膝が痛む齡

お喋りもビールも泡がとぶ実家

嫁きおくれにあらす独身貴族です

倉吉市 野中 御前

わたくしより上手に泳ぐ影法師

朝顔が涼しい色で窓のぞく

お天気がわるくて車間距離をおく

間の抜けた猫でジョークが通じない

むらさきの風がつつんだ安楽死

熊本市 永田 俊子

葱坊主めつたな風には妥協せず

どこか似た顔ばかり残る通夜の席

急いでも挨拶をする蟻と蟻

テニオハを時々違える美人アナ

駅長にまだ残ってた挙手の礼

静岡市 渥美 弧 秀

言訳を秘めてしばらく友と距離

意地通す寡婦を支える素直な子

二次会はもう壁のない同期会

友の死を看取って帰る闇の夜

燃え尽きるまで睦み合おう凡夫婦

静岡市 藺田 猷 杏

つま揚子用がなくなる総入歯
拾骨に何やら故人の噂聞く

山影が此処まで来たで飯にする

暑い風スキャンダル記事めくつてる

同情が嫌いで背中向けている

和歌山県 寺田 裕 美

責任の時効がすぎたゴムバンド

早よ洗わなければ足がぬけられぬ

向い風男の背骨試される

顔のない夫婦垣根を茂らせる

エプロンを脱いで女が立ち向う

岡山県 小林 妻 子

立秋へ芒は秋を忘れてず

呼び馴れぬまま平成も菊月へ

ポケットの中のけじめを迫られる

漫談のように貶して老夫婦

子に送る便りは舞台裏のまま

姫路市 丁坪 サワ子

外孫が大人になって他人めき

きのご雲蕾で散った娘も五十

コウモリが町内攪乱して困る

裏切りへ目を回してる鬼やんま

冷蔵庫の始末で事足る老いの留守

倉敷市 田辺 灸 六

願いまだ届かぬはずだ神無月

住む家があつて遠慮のない裸

晴着縫う明治の気骨鯨尺

蚊帳に寝て孫へ半分団扇風

またひとり川柳塔で友が増え

豊中市 辻川 慶子

嬉しい日悲しい日にも花ありき

脇役をきつちり果すかすみ草

追憶の都わすれの紫に

水中花狂い咲きにはなりませぬ

鍵っ子の絵日記いつも犬がいる

八尾市 鷺見 章

ポリープは杞憂に終る上まむし

三代和洋中華の台所

消防の仕舞うホースも見て帰り

ツアーバス鳴門の渦を寝て渡る

配達に子に乗せて来る夏休み

米子市 茂理 高代

逢うて来て燃える鏡を拭いている

壊れやすい椅子にせつせと釘を打つ

炎天が好きでヒマワリよく回る

鈴つけてやればやさしい猫になる

岡山県 山本 玉恵

正直だけが取柄の妻を連れ

音の無い戦よ今日の蟻地獄

徳利の口から笑いがこぼれ出る
逢いたくてまた指を折る二十日月

境港市 細木 歳 栄

自民党またまた出したフォアボール
貴婦人も三人寄ればオバタリアン
焼酎がワイングラスにしてと言う
方舟に私だけなら乗せると言う

美禰市 安平次 弘 道

遺伝子をいじりシナリオ書き換える
エンピツとの疎遠をなげく肥後守
適材適所バラに脇役勤まらず
マンネリが恐くて竹光を磨く

今治市 越 智 一 水

八月へ戦の涙まだ残り
自適悠々戯れという髭を剃り
笑うにも泣くにも女に線が出来
コンピューター室のとりこで嫁き遅れ

町田市 竹 内 紫 靖

中華料理で祝う七歳七十歳
クール宅配嫁の郷里は海が見え
エスカレーターあんなに肥るのを助け
ワープロでもともと祖父は手紙ずき

柳井市 弘 津 柳 慶

右派と左派市長上手に泳ぎぬけ
妻に目で私の発言制せられ

定退へ晴耕雨読とはいかず
市場籠かかえて園児を出迎えに

和歌山市 若 宮 武 雄

路の臺の名も沁みこんだこの句集
春夏秋冬座右に薫る「路の臺」
ベレー帽似合う貌にはまだなれず
夏草にむしる気力を試される

和歌山市 神 平 狂 虎

男とは深い竹藪抱いている
心が星になるまで鉛筆を削る
こころの奥で魚の跳ねる音がする
山の冷氣は心の冷氣想い川

姫路市 人 見 翠 記

この暑さ萎靡因循の日が暮れる
熱帯夜クーラーの音起きている
緑蔭涼風下の読書極楽で
天が下隠れ家もなし自由党

箕面市 坪 田 紅 葉

尼さんの赤い袱紗に過去の夢
咲きほこるバラの息吹きと向い合う
老いて行くのは自分だとは思わない
スケジュールがくるう夏の子供客

羽咋市 三 宅 ろ 亭

喜寿過ぎてなお鈍刀を抜きたがる
内閣は内閣減反に稔る米

七人の敵に笑うのが混じり
カセットを買って妙に詩吟づく

河内長野市 井上喜醉

縁がない話へ相槌じゃまくさい

どちらでも良いと言われてやりにくい

大詰で念押す余裕の深呼吸

初夏の海熟女へ似合うサン格拉斯

貝塚市 行天千代

あの人に一票入れたし党は嫌

一家族帰った後はまた一人

老人会手押車が二つ三つ

すきやきも一人は淋し夜の膳

大田市 藤田軒太楼

痴呆性書いたハガキがポケットに

裏方の苦勞が表で息を吹き

噛みころす欠伸の裏にある悲哀

わが影に追われる羽目の出来心

出雲市 板垣夢醉

和紙に墨流せば紙が生きてくる

熟柿にはさせてはならぬ嫁がせる

もう後は漬物石にまかせとく

母は子を子は母想う秋の月

鳥取県 川崎秋女

蟬時雨六法全書まだ読めぬ

ボソボソと懺悔にも似る盆の雨

涼しいネ言えはすこし涼しゆなる
八月の雲が動くと思ひ出す

和歌山市 内芝登志代

努力賞上げたい妻の割烹着

昨日の事古いと思うヤング達

知らぬ間にすり持つてる気の弱り

おばあさん仏飯上げるだけの役

羽曳野市 佐野白水

田植機は年に半日だけ働き

熱帯夜明ければうるさい蟬時雨

夏休み親子のブラン噛み合わず

娘が免許取るから車買い替える

守口市 羽原静歩

幼稚園燕も鳩もお友達

神様のユーモア見たり神無月

釣り革に今日のいのちをぶら下げて

定期券俺は天下の素浪人

倉吉市 渡辺菩句

赤ん坊の五指に眼鏡を奪われる

「僕」という女「わたし」という男

蟻一匹の旅を目で追う足で追う

こぼれてる米のひとも拾う習性

寝屋川市 平松かすみ

名曲を聴かせ元気なお腹の子

美しいところになればよく眠れ

姿見へゆつくり回転する女
ばあちゃんの取った受話器でもつれだし

東大阪市 崎山美子

外面の良さが誤解をついまねき
浪人の自問自答の日が続く

ふる里で余生をおくる青写真
たずね犬の貼り紙がある雨の町

大阪府 坂口公子

蠅叩き無用となつて呆けてくる
叩かれて俄然湧いてきた土根性

無冠者意地と誇りとコンプレックスと
知っただけに叩いて買うてきた西瓜

岸和田市 清野こう

み仏になつて恩師の帰る盆
お隣のペットあの世へ発つたとか

孫の事口出しすまい親がおる
おばあちゃん達者で尻が落ち着かず

岸和田市 原 さよ子

十九億の裸婦を見に行く美術館
ばあちゃんも若く見せたく選る帽子

新盆へ師の偉大さを噛みしめる
あこがれのデイズニへ台風ついてくる

岸和田市 古野ひで

寡婦同士手を結び合う風の中
ひとり住む小さい城にも消費税

蟬しぐれ同じリズムに木魚の音
世は平和ドッグフードのコマーシャル

大阪市 吐田公一

定退日妻をいたわる酒を注ぐ
定退で面が外れた父の顔

飽食の舌も最後は母の飯
ケーキ入刀紆余曲折の道となる

島根県 松本文子

翔ぶ子らへ母の祈りの届くまで
女性史をぬりかえ選挙の顛末記

また句会でつかと亡夫が笑つてる
あれからの話をじつと聞いてくれ

島根県 松本はるみ

修羅場などなかったような顔をして
うっかりと総理になった身の不運

ごきぶりを仕止めるだけの腕がある
かくれんぼ見つけてくれぬかもしれぬ

島根県 石田清泉

震えてる筆先ワープロに見透かさ
お手本もコピーで生命奪われる

表紙だけ替えてトップに居座る気
熟れを待つ西瓜鴉に先越され

島根県 北川民子

棲みついた蛙にエサやるほどに閑
まつわられ嬉しき疲れ夏休み

今朝の風まだらに吹いて孫が来る
この首も捨ててはならぬ超音波

和泉市 西岡洛醉

前進前進まだ檜山の遠い旅
漢方に頼る六十路よ秋深し
秋風に載せる童話の夢やさし
ひまわりの勤め帰りよ靴が鳴る

唐津市 浜本ちよ

あちこちの花生け替えて句会待つ(佐志教室)
咲いて散るこの尊さを人に見せ
空想に空想重ね夜叉の面

コスモスは風の負担にしかと堪え

唐津市 山口高明

パチンコに負けて散髪せず帰り
親戚の成金自慢にもならぬ
善人の貌で詐欺師は裏へぬけ
酸欠の街で拾った恋ひとつ

出雲市 園山多賀子

余韻なおふつふつ道後の湯のけむり
旅人の傷は癒さぬきのこ雲
肩バット要らぬ本来怒り肩
視界ゼロ心に触れる音がある(正朗さんの句に惚つ)

竹原市 岩本笑子

他人の振りして長男と歩く
長男よ人生まっすぐではないぞ

平和公園白い心をもってます
ひぐらしもお盆の墓に寄つてくれ

大阪市 井上白峰

口当り褒めたら今日も冷奴
味噌汁の具に刻んでる妻の愛
老いてなお頑固な父の石頭
得手勝手理由をつけて子ら別居

米子市 川上より子

旧民法のルールで客が膳につく
嫂さんと呼ばれる度によい返事
四女の婿ですここが指定席
合歓咲いて遺言どおり播いている

米子市 光井玲子

今もって四角四面の父の絵図
いつからか開き直ったノラである
会者定離想いは遙か雲の峰
ブツツンと頼みの綱が切れて秋

静岡市 永倉僕川

酸欠の金魚の私話を聞き漏らす
惜しまれて逝く花道を考える
失敗が膨らんでゆく知恵袋
朝露を踏む幸せの散歩道

有田市 松井かなめ

薄い姻戚なれなれしくて選挙戦
緋のカンナに忘れてならぬ事がある

夏祭りの金魚一晚の命持ち

いい事だけが想い出される亡母の盆

守口市 結城君子

限りある生命よやめぬ酒たばこ

振りむかぬ女を強いと思わない

この友のどの辺までを信じよう

暴走族丘の童謡消さないで

岡山県 二宗吟平

父母のおかげ八十五まで生き

要所要所旗が迎えて会たのし

黒枠で友は仏の顔になり

それぞれに五枝の主張が頷かれ

姫路市 中塚遊峰

問題の土地野良犬の集合所

柄のとれた鍋は昔を知っている

遠い日の志摩の磯笛耳にあり

伴せが欲しくて軽い靴を撰る

高知県 小澤幸泉

メロドラマ知らぬふりして妻昼寝

平成も遅々とすすまぬ三面鏡

みえぬ目にいのちの道をたしかめる

さわやかな球児がくれた汗と泥

和歌山市 山川克子

その昔泣いて訣れた村の駅

いたずらな神で優劣貧富の差

海が好き空が好きから絵の具皿
味方より敵にステキな奴がいる

和歌山市 木本朱夏

目出し帽かぶるとピストル欲しくなる

恋人は居ますが猫を抱いて寝る

束の間を激しく燃えた一年草

山椒魚のようにばててる熱帯夜

羽曳野市 吉川寿美

傘立てで昨日の悔いが雫にする

夕焼を信じて明日へつなぐ夢

周波数合わぬ夫婦で居る疲れ

一日の長さ短かさ生きてゆく

奈良県 長谷川春蘭

青すだれ客待つ部屋に涼いれて

思い出さぬままの会釈で夏帽子

盆の僧ただだ先をいそがるる

老若のなくてうれしい宿浴衣

藤井寺市 福元みのる

わが子には塾をすすめている教師

結構という曖昧な答えよう

花博に悪の華など咲かせるな

補聴器を金の話の時外す

姫路市 大原葉香

菓子パンを頼張る顔に罪はない

一握の土の情けに街は飢え

咲いて散る花の輪廻に雲流れ
無雑作に団扇一つが置いてある

十和田市 齊藤 嘉

野苺も忘れはしない敗戦日

市長さん遺影で参加するねぶた

地獄沼ガイド不馴れな片えくぼ

紫陽花の秘話を聞きたしかたつむり

河内長野市 植村 喜代

岩湧山こちらも夕立ち待ってます

ふる里がだんだん他人に見えて来る

もやもやをためていたから手術二度

ふる里の浜の暑さを足が知る

米子市 小村 てい子

訣れ人に思い出だぶる胡蝶花の花

よそ見した言い訳ぐらい聞いたげる

ずっこけた穴で余生の灯を点す

敬老の日鳴子おどりが姦しい

岸和田市 芳地 狸村

職安の受付に見る老いの首

戦死した友と出会った戦友会

代理でもいいから出たい花舞台

どん底で母の情を抱いて生き

海南市 三宅 保州

正直な妻出て行けを真にうける

不幸中のさいわいなどという他人

陳腐とはわかっていても好きという
ストレスの色は玉虫色だろうか

茨木市 井上 森生

水玉は水面に浮くのか沈むのか

過去帳が一気に迫る蟬時雨

親離れ子離れ仕切りやり直し

表情が無くて鬼より怖い顔

大阪市 北山 悟郎

無駄な汗少し流して義理果たす

息止めて病いが判るレントゲン

縦割りの仕組み横向くを許さない

泰然と動かない僕妻の汗

岡山県 矢内 寿恵子

忘れよう忘れてならぬ原爆忌

招かざる客よ十月誕生日

七回忌諸行無常の蟬しぐれ

座り直した妻に初手から負けている

黒石市 相馬 一花

健康に自信あるから煙草吸う

襟足も素足も俺を誘惑し

宝くじ外れるように妻祈り

九州も四国も知らぬアメリカも

和歌山市 山田 高夫

泣き面の僕が羅漢の中に居る

流れ星余韻を胸に抱く女

先生と呼ぶと振り向く二三人
こと勿れ主義が善人面をする

鳥取県 江原 とみお

帰省して海原がある母がある

向日葵に覗かれて暮しむき

敵肅によるこんでいる葬儀屋さん

貧乏を僻むな裏は日本海

鳥取県 羽津川 公 乃

鍵っ子は一番星と仲良しだ

海亀の涙月夜の砂が吸う

立秋の空から湧いた赤トンボ

立秋に明鏡止水かみしめる

鳥取県 谷 口 次 男

知りたいが知りたくもないスキャンダル

アラスカで冷凍食品売ったろか

落ちこぼれこんなはずではなかったに

涼しげな顔が曲者ヤサ男

大東市 土 岐 トク子

コスモスの満開ゆれて満ち足りぬ

三段壁自殺名所と聞く恐怖

二泊三日留守して嬉しかったと娘婿

和歌山市 田 中 輝 子

来る人が来て去っていく盆休み

タコを切る罪悪感のない包丁

齡の差を庇い庇われ来た夫婦

鳥取市 小 谷 美つ千
正直な友だちだから泣きにくる
好きだよといつもあなたは無理をいう
ふるさとの大きな森に戯れる

鳥取県 土 橋 はるお

どっこいしよ漢方薬が効いている

姑さんの癖が抜けない台所

三度の飯傾きかけた家で食う

七尾市 松 高 秀 峰

殺気立つチアリーダーの甲子園

欠かさずに見舞ってくれる手ぶらの子

永田町平成元年揺れに揺れ

弘前市 真喜内 實

本当の僕とホテルの一人部屋

せせらぎの涼しい話きき惚れる

暑い時熱いお茶呑む一休み

富田林市 松 本 今日子

新住所星がきれいという所

それまでに降りてみたい駅がある

約束はないが逢えそう青い風

鳥取県 さえき や え

思師の病氣

代筆の手紙が夏をくもらせる

くちなしが色あせぬ間に逢うてくる

九十七年生きて仏の姿かな

富田林市 新開 千代女

精出した割につまらぬ花が咲き

星降る夜甘い言葉に乗せられる

キヤリアウーマン降る縁談に耳かさず

豊中市 上田 登志実

是々非々と限度越えずに生きる幸

救急車気になることもある世間

台風の進路気になる夏祭り

豊中市 一瀬 福一

青くさい言葉の中にあるロマン

髪型を変えて女の曲り角

したたかに濡れて五月の鬼瓦

豊中市 吉田 あずき

いつからか子は窓側の席をくれ

盆ラッシユふるさとないのも有難し

まないたの音はずんでる子の帰省

大阪市 渡部 さと美

いっ気飲みいい汗もとのもくあみに

入道雲浜辺の恋は大胆に

水すまし池の広さに用はなし

大阪市 中西 兼治郎

忠孝の忠の字即死孝危篤

立ち話参院の票たのまれる

晴れた日も雨の日もよい八瀬の里

大阪市 町田 達子

此の辺で時効にしようお人よし

鼻息の荒い女のライセンス

八月の空に切れない過去おもう

大阪市 大野 武太

内税が欺しやすいと大蔵省

涼しかろお地蔵さまに水を打つ

時々音痴な色もつくります

大阪市 富岡 温子

新聞に嬉しい記事が少なすぎ

マイク手に握れば同じ歌が出る

張り切っても主婦の贅沢知れたもの

大阪市 板東 倫子

生真面目な男で嫁の来手がない

褒めことは覚え世渡り楽になる

貞淑な老妻ビール味の味を知る

大阪市 横山 為子

つかんでの話にしようマイホーム

甘い水呑んだほたるが籠の中

終電車お家がだんだん遠くなる

大阪市 宮下 とし

赤も咲きみどりも冴えて今朝の幸

夜勤明け朝顔一輪ホツとさせ

朝顔の双子つづいて三日咲き

鳥取県 清水 一保

善人であると隣の猫認め

大波は父さざ波は母が漕ぐ
大正の胃腸此の頃小言増え

鳥取県 乾 喜与志

朝顔のなんと虚しや吾米寿
愚痴を呑みこんで娘の初盆に
さかな三匹税金のない釣り果

鳥取県 田 村 きみ子

赤トンボ元気ですかと飛んで来た
不意の客新米炊いて喜ばれ
アリガトウ言える笑顔の美しさ

鳥取県 津 村 八重子

敬老というありがたい柵に住み
便利さになれてお尻は重くなる
靴の紐かたく男は朝を出す

岡山市 井 上 柳五郎

本当のことを言つてと憎まれる
マルクスにかぶれた過去でいま自民
有難や天然クーラーわが家抜け

岡山市 花 田 たけ志

ふれ合いを温めて今日を満ち足りる
車地獄手品のように今日も無事
妻の留守ねらつたように人が来る

岡山市 千 原 瑛

氏素性争えません品の良さ
此の度は相手不足にて候

汚染地帯いたちごっこで洗えない

岡山市 池 田 半 仙

庭付きの家でこの上何の欲

反撃のチャンスはダブルタツツチから(ケートボール)

一呼吸おいて音聞く遠花火

岡山市 松 本 元 江

深呼吸して一日のねじを巻く

素手を組む野心のかけらもない二人

先頭を走れば厳しい向い風

広島市 藤 解 静 風

どさくさに紛れて好きな手を握る

年金にクラブは振れず鉞をふる

耳うちをされて味方と思ひこむ

広島市 田 村 新 造

目を閉じれば陸奥や大和の浮かぶ海(江田島)

船足が遅い夕日の大漁船

台風は逃げたか蟬が鳴きはじめ

出雲市 石 倉 芙 佐 子

未練などなかったはずの白い雲

凌霄花愛怨の蔓どこまでも

子を二人産んだ痛みは口にせぬ

出雲市 小 玉 満 江

村おこし少年の打つ大太鼓

汗ばんだ手から反核ピラ貰う

つかまえた螢逃がせば星になる

旅さきで矢張り目につく稲の出来
旅プランはらみの牛が引き止める
夏木立貰って土工のひとやすみ

出雲市 小白金 房子

久谷 まこと

背後から噂の主が覗いてる
今日もまた昨日と同じ風に哭く
ふる里はいつも許してくれるもの

米子市 金山 夕子

ライバルのよいしょよいしょがやかましい
逆境にやっぱり強いお婆さん
ひまわりの悲しい夏の物語

竹原市 石原 淑子

灼熱の恋に螻蛄身を任せ
うっかりと契り結んで二十年
和やかななごやかな亡父百ヶ日

高知市 北川 竹萌

学童の挨拶正し里の道
流れ星帰郷の夜の貰い風呂
五回忌の門札亡父の名のままに

高槻市 竹内 花代子

伊吹山で

誘われた珈琲へ付き合うコココーラ
シャッターは霧のバックで撮される
頂上の汗を忘れた花畑

今度会う日を聞いていた猫の鈴
下戸だとはいうが見事なご返杯
撮影会撮ってる方が照れている

茨木市 堀 良江

唐津市 筒井 朴竜

学舎のメロディチャイム登校日
下校急ぐ河童天下の午後プール
鍛練の成果はタイムレコードさ

箕面市 椎江 清芳

適齢期頭の痛い娘が二人
薬より酒を少々飲めと医者
水涸れた川にも四季の詩がある

静岡市 安本 晃授

吊り橋を渡ると里の風に逢う
後編の後ろ髪引く秋の風
溜めたとて所詮小銭さ老い日記

東京都 吉川 一郎

サングラス少しニヒルにしてくれる
電卓の除算端数が多過ぎる
花の店花の吐息をじつと聞く

西宮市 瀬尾 六郎太

剛と柔うまく融け合い天神祭
腑に落ちぬことも屢々起るもの
ちっちゃな賭け賭け賭けで平均値

吹田市 園田 文子

あじさいの父の形見に雨が降る
遇然の旅に出会った笛太鼓
民宿の窓に朝日のくもの糸

吹田市 栗谷春子

あの財布まだ持つてはる消費税
底辺のあえぎ安易なことでなし
母からも身を守ること既に知り

堺市 柿花紀美女

私より健康自慢の友が逝き
最終のランナーへ拍手待っている
光陰の早さに老いは追いつけず

奈良市 米田恭昌

涼風が祭囃子をのせて来る
涼しさは都^{みやこ}祇の氷室の白昼夢
因果応報やけどしたのは自民党

和歌山市 玉井豊太

昔から奴は秀才だったなア
カブト虫帽子ぐらいいは這って出る
一日を腹の時計で畑仕事

川西市 松本ただし

ポツクリ寺視野におさめて手術台
天網が粗にならぬよう般若経
極道な吾が胃と別れる手術台

和泉市 岡井やすお

指導者は言いたがらない「敗戦日」

反対をせぬと気が済まない御仁
名札見る五十年目の同期会

八尾市 山下美津留

順風を逆風にした鉄砲玉
風向きで漁師明日の計を立て
胃が負けてハワイ諸島を後にする

島根県 藤原鈴江

プロですねおだてに乗ってミシンふむ
歳ですねなどと出鼻をくじかれる
恩師の訃乙女の日々が甦り

和歌山市 青枝鉄治

過疎にいて天から貰う旬の味
苦勞して育てた部下に整理され
宝石の増えた数だけ友が去り

大阪府 松永すすむ

停年で白髪も増える暇もふえ
暇はあるただ金がないから行かぬ
峡阜提灯ひっそりほぐす冷素麵

守口市 森川まさお

盆休み孫とお化けを見に出かけ
魚拓に句を記し
金に寄る雑魚達で

岡山市 直原七面山

自選集

野田素身郎

半世紀越え傾いている戦死墓
大先生も歯切れがわるい地震予知
夏祭りすこし派手めのアロハ着て
パレードの先頭に立つ支店長
藪蚊との闘いとなる墓掃除

水粉千翁

うなずける演技親心とも言い
滔々と旅は河口に夢を置き
瀬を早め巖を砕いている旅路
そのときは悔いなく乗ろう千切れ雲
逆流をわがものとする鮎の道

正本水客

絆かな孫が小さく来て座る
気にするなするなとナンキン豆をむく
クーラーを切つて扇風機のまわる音
井戸埋める話へ近所おりあわず
古時計のように頼りにされている

八木千代

母の鍋素材なものが煮えている
鍋に残る煮物わたしも残りもの
ひとり居にしては大きな鍋ばかり
可愛い鍋でほとけの好むものを煮る
ふるさとの大きな鍋につながる

藤村女

桐一葉落ちて悔いが深くなる
水車静かに輪廻説いている
海原を渡って砂丘に風の私語
忍従を語る悲しい通夜の席
苦難の道貫き歩いた自負がある

金井文秋

優越感味わいたくて歳を聞く
まだ七十八だよと言いたい時もある
独り暮らしの食事だんだん餌になる
歳に不足はないと九十を過ぎて死に
老女が歩くアンダンテのリズム

工藤甲吉

農民一揆と野党が逆転し
核燃は来ぬ方がいい月見草
世の中へ時々腹を立てて老い
5・4・3・2・1・0と死にました
お墓は要りませんかという電話くる

野村太茂津

祭り笛島棧橋は昏れ残り
島へ帰れぬ暗い邪心を抱いたまま
義理も情けもみな棧橋に捨ててくる
憫れとも男に雨が突き刺さる
寂しさや羅漢と遊ぶ外になし

有働芳仙

電話口君の名前を一寸借り
定食のような人材しか居らず
英会話入歯が少し邪魔になる
五十年連れ添い妻がまだ解けず
隅っこで帽子の鳩が待つ出番

藤井明朗

海部総理果敢に政策待ったなし
宿命というには策なし台風禍
こころと体力一致せぬ歳とはわびし
稲かりも人頼みして共稼ぎ
二十一世紀へわたしの詩集夢にみる

月原宵明

有名な顔ではないがサングラス
Gパンの娘は針をもう持たず
補聴器はポケツツ掛けない意地がある
海部さんになったかそうめんすすりつつ
蛸干した渚に秋の気配する

小林由多香

追い風に乗るにもチャンス見定める
ライバルの汗が無気味なほど光り
欠席の理由金がないとも言えず
顔がきくだけ借金も溜めている
悪知恵が手抜き水増し考える

山内静水

聴いて下さい皆さんお静かに
頼母しい跡取りそうですかと言わぬ
派閥などボス猿の貫禄よ
先生はすこしエッチもおっしゃって
おととつとよその奥さま酌いでくれ

本田恵二郎

つげの櫛亡母の匂いが生きている
川蟬の声曳っぱって川を越え
その過去を消し合い美事結ばれる
さすがに語り多く語らずうなずかず
寛水四季それぞれの音色見せ

黒川紫香

曾孫から朝のリズムがまわり出す
ジョギングの顔が変わってくるさむさ

やどかりを廊下で這わす浜の宿

風のある峠で一人だけ下りる

雑巾を干してお昼のパートに出

小出智子

今年こそ読書の秋にしてみせる

松茸山を三つも持っている話

離婚した人に手紙を書いている

犬を飼いたいと思うだけでよい

よいおばあさんになれずに秋が来てしまふ

阿萬萬的

秋の風 大和の旅に出るとする

飛鳥路の石の言葉も枯れて秋

血なまぐさい政変とは別丘の風

呪いに似た話 亀石陽に白く

勸請縄 岩橋洗う水光る

大矢十郎

宮崎よお前は五七五で読めぬ

苦労人の誤字へ目頭熱くなる

ナースではないと書いてる女医の顔

巻舌で来た被害者の代理とか

花博へ花は悲しく咲かされる

児島与呂志

しぶ柿の味を助ける里の風
陣笠の似合う間は無口なり

いのちの火とろとろ人の和を信じ

積み重ね積み重ねして今

根来寺のふもとに逝く日土を積む

西田柳宏子

今だから言える話に嘘三分

タイムカード チーンと仮面つけ替える

神童を凡人にする進化論

昭和さえ判らぬとこが多すぎる

波静かすぎても湖が怖くなる

お知らせ

栗主幹の指名により十月号から西田柳宏子・
野田素身郎の両氏、十一月号から久家代仕男・
遠山可住・波多野五楽庵の三氏に近詠を「自選
集」に出句していただくこととなりましたので
ご期待ください。
(編集部)

▼訂正▲ 9月号「百人一句」同人の部(71P)の
大坂形水氏の句を次のとおり訂正いたします。

一家団樂の後芝生に新聞紙など

一人吟

秀句鑑賞

一前月号から

野田 素身郎

場所替えて商談別の手を使う

辻 白溪子

昼間なら、さしずめゴルフ場、夜なら居酒屋、小料理屋、料亭、スナック、バー、クラブ等のネオン街。場所に事欠かぬ接待国日本相手と商談の内容によって選べばよい。

とり肌が立つほど素敵な人に会い

田中 紀美代

恐ろしいことにでくわした時、鳥肌は立つものだが、素敵な人に会った時にも鳥肌が立つらしい。そんなお方にお会いしたい。

会者定離ああポーナスよお前もか

吉岡 美房

たとえずぐ無くなっても、ポーナスの出入りはよい。私は今年からポーナスに縁のない淋しい身となった。「会者定離」と大仰な表現はさすが。

くぬぎ林の味を知らないかぶと虫

春城 武庫坊

人類が地球を征服してから、ほかの動物の受難が始まった。身近なところでは、鶏は鶏舎で卵製造機と化し、小鳥は大空を知らず、籠の中で人間の愛玩物となった。

この怨み忘れるものか消費税

高杉 鬼遊

その結果が先の参院選。国民を甘くみてはいけない。しかし、消費税を廃止するにせよ、見直しするにせよ、代りの財源を何に求めるか、課題は多い。

朝市で税のかからぬ野菜買う

宮崎 シマ子

消費税に対する庶民の知恵。礼状にそえる一句がまとまらず

安藤 寿美子

礼状だけでなしに、年賀状、暑中見舞状などに添える句は、なかなかむずかしい。型どおりの文面でもいいと思うものの、柳人の一人であれば、一句添えたくもなる。

どっちゃでもええがな湯豆腐冷奴

林 露杖

歳時記では、湯豆腐は冬の季語、冷奴は夏の季語になっているが、酒飲みにはどちらでもいい、早い方がいいというところ。酒好きの気持がよく出ている。

玉子割る今日の戦の始まりに

西山 幸

いざ出勤 今日始まる男の闘いに備え、卯よし、ドリンク剤もよし。しかし、過ぎる

と卵はコレステロールを蓄え、ドリンク剤は副作用がないとは言えない。何事もほどほどにしたいものだ。

願いごと叶わぬままに風は秋

嘉数 兆代賀

昨年もそうだった。今年もまた願いが叶わぬままにはや秋。「風は秋」が効いている。昇格がわかる隣のお中元

吉田 あずき

ご近所の目は怖い。隣の奥さんの目は鋭い。お隣にひきかえ、わが家の旦那は一向にうだつが上がらない。でも、わが旦那ではリクルートのようなことにはならないのが、せめてもの救いか。

手に余る重さ女と広辞苑

谷垣 史好

女性は、扱いようによって重たくもなる。立ち読みのお客が増えた俄雨

原 さよ子

雨宿りするには、書店は格好の場所。立ち読みをしていて、気に入った本に出会い、買ってくれる人もある。雨宿りの客でも大事にしないではいけない。

問診へ嫁のグチまで並べたて

青枝 鉄治

失礼ながら女性患者の診察時間は、大体において長い。順番待ちの中に女性が数人いると、今日は帰りが遅くなるぞと思う。お医者さんでも大変である。

川柳太平記 (137)

川柳の群像

福井天弓

東野 大八

「撫順（中国旧満州、この地については後述する）の川柳会は、昭和3年6月私を入れて五人の柳人で結成。同5年8月『蛇皮線』創刊（菊判活版印刷）同7年3月同川柳誌を十号をもって廃刊。同12年12月『琥珀』創刊。同15年8月二十八号をもって終刊。

この全巻を秘蔵していたのが、同誌編集長だった山下岸柳氏（池田市）である。この全巻は、終戦直前に帰国していた深井凡凡氏（奈良県平群町）から山下氏が譲渡を受けられていたものである。

この懐しの『琥珀』全巻合本復元に尽力されたのが、同誌の同人だった小沢独歩氏（甲府市）であった。敗戦のため散逸したとばかり信じていた『琥珀』合本が復元されたこと

は正に三十七年の歳月を閲してのことであった。このことは、小沢独歩・小沢正彦御父子の物心両面にわたる絶大なる御援助によるもので同人一同深謝の極みである」（『琥珀』合本復元・昭和52年6月刊前書）川柳琥珀復元に当りて、『福井天弓』要約）

撫順というのは、中国東北地区遼寧省の首都瀋陽（旧奉天）の東に位置し、戦前は『露天掘の撫順』として世に知られる一大炭都であった。

明治43年清国から移管された際は、千金塞の名で私掘されていた。これを満鉄が開発し、大正期から昭和にかけて良質な撫順炭の研究に没頭し、昭和6年には油母頁岩からシェール・オイル（揮発油）の抽出製造に成功。や

がて建国される偽満州国政府の経済的根幹をなす坑区として世界に喧伝された。

こうして撫順市は、大正12年に開設された満鉄の炭坑事務所の実勢に比例し、またたく間に人口三十余万にふくれ上り、満鉄マン中心の在留邦人は約二万人となった。天弓ら五人による川柳会が誕生したのは前記の通り。

本名福井新一、明治37年3月28日香川県生れ。十九歳の折、渡満して撫順炭坑に勤め、大正15年川上トメノ（柳号斗米女）と結婚。

この頃から詩、短歌、俳句の趣味を持ち、独立で騰写版刷りの文芸誌などを作っているうち、雑誌『吾楽』の柳壇で、

蝶の墓大きな下駄が踏んで行き

の句に感銘、同柳壇の選者前田雀郎さんに投句指導をうけた。柳号は一天坊、のち古刀と改めた昭和3年、京都の葵川柳社の支部を撫順市で設けたが、同社が番傘川柳社に合併したため、昭和5年蛇皮線吟社を興した。これを機に七古洞・天弓（岸本水府命名）と改めた。同人は日高阿兵良・安武仙派・出口夢詩朗・松浦蝶古・山下岸柳・菊地炭吉らがいた（『琥珀』4号漫画探訪・菊地炭吉要約）
興味深いのは、この頃『川柳雑誌』同人、岩崎柳路・同松代が『琥珀』客員で在籍して

いたことだ。この柳路の招きで、川維主幹麻生路郎が江戸みつるを帯同、昭和5年3月訪撫、琥珀同人らの歓迎句会に出ている。いわゆる路郎の「満鮮の旅」のワンカットである。また、これが縁で、昭和7年4月には川維同人庄万よし歓迎句会も催されている。

「私は撫順で柳誌を出し苦労している最中に悟ったことは、大陸の柳壇は自主独立の境地でいくべきだということだった。川維も番傘も内地の吟社であるからして、それはそれとしてわれわれは、そうした吟社に参与することなく、すべて対等のおつき合いでご交誼願うことにした」

とは、筆者が天弓から在満中よく耳にしたことである。私の川柳趣味は昭和8年頃から初めて川柳句会に顔を出したのは、この撫順であった。昭和10年だったと記憶する。筆者の柳誌への寄稿も「琥珀」誌が最初だった。

前記の天弓の感懐を生む因を作った一挿話がある。昭和11年12月、満州事変の発生の地であり、日中戦争の導火線ともなった奉天(現瀋陽)郊外の柳条溝事件の現地でもある柳条溝(湖)に満州国誕生の聖地として記念の川柳句碑を建立する案がもち上った。その句碑の句は

平和双六振り出しは柳条溝

というのである。主唱吟社が東京の「せんりゅう」誌であるところから、作句は雀郎だとみられ、久良岐だとの説もあった。協賛吟社は内地の各地の吟社約十社だったが、在満支の大陸派川柳吟社の頭を通り越してのこの案に、大陸派川柳人の硬骨漢は一樣にヘソを曲げ、ついにお流れになってしまった。天弓も肚を立てた一人である。

終戦を迎えた撫順は、ソ連軍、中共、重慶国府軍の三ツ巴の争奪の地となり、この世の生地獄を現出した。久保孚満鉄撫順炭坑長ら幹部や漢奸狩りに加え、昭和7年に起こった平頂山事件の虐殺者追及などにより、二千人からの日朝鮮人たちが処刑された。満州国皇帝だった溥儀もソ連抑留の後、撫順戦犯収容所に移された。関東軍将官、旧満州国高官が多数この収容所で死んでいる。

天弓は終戦の際、女たちは断髪して男装し難を脱れた不穏な情勢の中で、上水道の浄水場長であったため難をのがれ、昭和22年8月岡山県高梁市に妻子六人と無事引き揚げた。

昭和40年大井正夫、宇和川木耳と筆者たちによる大陸川柳人同窓会が結成されたが、天弓はその代表者に推される一方、その頃結成

された日本川柳協会の結成発起人として名を連ねている。大陸同窓会には、十九回の会合のうちほとんど顔を出し、うち二回も岡山の天弓の地元で催している。

昭和59年4月、琥珀合本の実現に力をかけた小沢独歩郎に、旧琥珀同人九人の立派な合同句碑が作られた。独歩のこの俠気に感動した天弓は、この除幕式に出席し、その句碑に畏友あり男の道をまっしぐら

の句を寄せ、独歩父子の心意気に報いている。天弓は在満生活中、多くの大陸吟の秀句を残している。

坐るとこ見つけ纏足チヤスいっつり 天弓
の句は大陸吟の名吟として、往時のマスコミ面でもはやされた。面倒見のよい親分肌で人生に筋目を通した生れつきの気性はよく大陸の川柳の振興に貢献し、その人柄を慕う大陸人は多い。昭和63年11月29日ガンにより死去。八十五歳。泉岳院慈照天新居士。

喧嘩した相手も来てる平康里 天弓
回来了カマなどと如才のない書館

(注)平康里・書館は中国の色街)

★次回は「小池鯉生」

柳籠裏三篇研究 (二丁)

佐藤要人・八木敬一・七久保博
岩田秀行・紀内恒久・西原亮
大野温干・青木迷朗

鈴木倉之助 故岡田甫

5 硯箱つかわぬ筆が五六本

佐藤||私の硯箱の中もかくのごとし。どうい
うものか古筆を塵箱に捨てることをしたがら
ないのか、それとも、一向に気がつかず、整
理をしないでいるためか。もつとも、使わぬ
筆が役に立たないというでもなく、私も時
には洗ってニスを塗るのに使ったこともある。



八木敬一氏

平凡なところに目を付
けたところが、手柄な
のであろうか。しかし
うがちは浅いと思つ
まだ左の句のほうが面

白い。

安硯剃刀のつぶしたを入れ

第一二六

岩田||小生の家の硯箱もこのごとし。うがち
ではなくとも、言い得て妙。

西原||使わぬ筆は新しい筆ではなからうか。

青木||諸説に賛、使わぬ筆は、使用未使用の
ものと別にこだわらなくてもよいのではない
でしょうか。

鈴木||新しい筆ととるのはどうか。やはり礎
稿でよいと思つ。珍しい写生句。この頃の句
は、クイズにでも出てきそうな句が増えつつ
ある中に、本句のごときは珍しい。

岡田||この句のような軽み、これも古川柳の

一つの趣向であり、特色でもあった。今回の
丁の中では佳吟の部。

6 お山狂ひをするさかい勘当じや

佐藤||京談仕立ての句。お山は関西で女郎の
こと。「さかい」は「……する故に」という
ような意味の関西弁。江戸人から見ると、勘
当を言い渡すにしては、言葉が優し過ぎる。
そして、それがおかしいのであろう。これが
江戸なら、ものすごかろうものを。

喧嘩でも相談らしひ京言葉 宝三義一
つめつめをするぞよと京の朝帰り

第三二五

七久保||賛。関西人の悠長さを嘲笑してか。

西原||賛。(京坂にて「おやま」「ひめ」等を
以て通唱とし、江俗は「おいらん」以下を惣
て女郎と云。(守貞慢稿)

鈴木||賛。

岡田||同。

7 紫のしらべて来べき芸者也

佐藤||雨譚の句は一捻りしてあるのが多く、
これも難句。「川柳辞彙」の「しらべ」の項
にこの句を載せ、「芸が優れて」と脚注はあ
るが、句意を理解するに十分な注ではない。

紫は紫檀棹の三味線のことと思われる。「元

来、音曲を以て座敷に待る筈の芸者であるのに」というほどの意味ではなからうか。芸者の生命は紫檀棹にこそあるのに、それを忘れて転び専門になるのは解せぬことだ、その意がこめられてはいはしないだろうか。なお、「来べき」の用語は、衣通姫の歌「我が背子の来べき宵なりささがにの……」から借用したようにも思われる。

七久保 礎解贊。芸者：本来は客の酒興をたすけ、歌舞・音曲をもって身をたてるのが本道だが、そこが浮草椽業、表看板よりも売色の散娼も大勢いたであらう。

青木 紫のしらべが不明でしたが、おぼろげながら解りました。

鈴木 諸説に賛しがたい。「紫のしらべ」は琴・琵琶の芸道に達した紫衣の検校を暗示したものと思ふ。「芸者」は第一義、すなわち検校ともなると紫雲たなびき、妙なる楽の音につれて入来するほどである。

岡田 全員落第。△芸者▽はすべて一芸の技能にすぐれたものをいう。また、△紫のしらべ▽は三味線にあらず、鼓です。そこからこの句は再出発して、もう一度取り上げられたし。

8 松の内来るのはじミな扇子売

佐藤 〓 過年玉用の扇子はまことに粗末なもので、開くとばらばらにはがれてしまふよつな代物であつたらしい。暮れから正月にかけて、町々を売り歩いたものらしいが、元日から松の内一ぱいが彼らの商売期間だつたように思われる。扇売りに実は二種類あり、夏に用いるのを売る扇屋は、いなせな兄さんで、地紙売も兼ねたようでもある。ところで正月に来る年玉用の扇子売はこれに反し、多くは細民の行商で、身なりも貧しく地味だつたのであらう。主題句は、この二者を比較して詠んだ句であると思ふ。

商いのせんばう扇々なり 天元仁
七久保 〓 贊。年玉用の扇子売。反対に派手な扇売は地紙売り。

岩田 〓 地紙売りととは扇地紙売りで、それを扇売りとも呼んだ。

鈴木 〓 礎稿並びに諸説に賛。
岡田 〓 贊。

9 居風呂をかり持よふにとまつてる

佐藤 〓 「据風呂を借り、持ちよぶに困っている」という意味の句であるらしい。据風呂は

移動のできる簡便な風呂のことで、主題句はこの据風呂を隣家あたりから借りることになつたが、把手がついているわけでもないのどのように運んだらよいか、一思案しているところなのであらう。確かに風呂桶などというものは、持ちよぶがむずかしいもので、ころがすようにして運ぶのが一番だが、障害物などがあつてそれができないとなると、案外に持ち方が難しいものであらう。

大野 〓 居風呂は礎稿のごとく、「据風呂」であつて、広辞苑にあるように、「竈を据え付けた大桶に湯を沸かして、入浴に供するもの」で、永年使えば水が沁みて重いものである。ただし、古くは釜と桶とは別になっていた。

鈴木 〓 礎稿でよいと思ふ。
岡田 〓 同。

西日本文字放送作品募集

題「軽い」 森中恵美子選

3句 締切 10月15日

ハガキに明記の上、左記へご投句下さい
〒540 大阪市中央区谷町2丁目2-20

大手前ウサミビル3階
西日本文字放送 川柳係

平成元年度 路郎賞



さくらさくら

今年も皆に逢えました

八尾市 宮崎シマ子

路郎賞候補作品

黒川 紫香

どの彩を足しても

虹が落着かぬ

和歌山市 福本英子

路郎賞準優秀作第二席

女郎花

やわいおとこが多すぎる

豊中市 田中正坊

宮崎シマ子柳歴

- 昭和55年 川柳わがわに入会
- 同 56年 川柳業の花に入会
- 同 57年 八尾公民館川柳教室生
- 同 57年 NHK文化センター川柳講座生
- 同 59年 川柳塔社同人

〈準推薦句〉

ぼくの金魚は小さいままでいて欲しい

小島 蘭幸

すすくと育って家を出て行った

新家 完司

〈推薦句〉

さくらさくら今年も皆に逢えました

宮崎シマ子

正本 水客

座布団を干すと野良猫来て座る 寺田 裕美

螢飛んで一息いれる磨崖仏 江口 度

ジャンケンポン勝っても負けても何もなし 奥山美智子

いい事がありそう雀が窓へ来る 中川 滋雀

淋しくてそれでも三度飯を食う 辻 文平

父と子の会話男のをぞかせる 政岡日枝子

洗濯機に首突っ込んでみたくなる

土居 耕花

兄ちゃんの女友達皆嫌い

川端 柳子

テリトリーだんだん狭くなって冬

赤川 菊野

会いたいというメモが来る雪しきり

矢野 佳雲

ふり返らねば他人だったあなた

永田 俊子

長生きをしてネと面倒見る気なし

福本 英子

大切に読まれたらしい亡父の本

西口いわゑ

風の噂をもっとシビアに考える

奥山美智子

〈準推薦句〉

かたくなに姑がゆずらぬしまい風呂

春城 年代

赦すものかと大根の首切り落す

河瀬 芳子

〈推薦句〉

どの彩を足しても虹が落着かぬ

福本 英子

野村 太茂津

どんじりを走ると風もやわらかい

川島颯云児

うつらうつらと夫の海に漂うて

春城 年代

あなた撃つ銃はわたしの指で足る

松原 寿子

花言葉あげてもあなた振り向かぬ

吉岡きみえ

切腹もいいなと思う花吹雪

桜井 千秀

言いつの女あしたの日本だな

時末 一灯

静中動の真ん中に俺がいる

土橋 螢

てのひらを返すと男でなくなるぞ

寺田 裕美

敵のない男を信用できませんか

西山 幸

〈推薦句〉

女郎花やわいおとこが多すぎる

田中 正坊

西田 柳宏子

仏にもつぶてにもなる石ひとつ 高杉 鬼遊

さくらさくら今年も皆に逢えまし

フライパンいつもホンネで生きている 宮崎シマ子

平成元年昭和のままの野良着着る 佐藤 藤子

良妻になろうなろうと豆を煮る 西出 楓楽

何もない私に着い空がある 嘉数兆代賀

ふる里の土は裸足がよくなじみ 田村 新造

好きだから騙し舟など折りましたよ 松本はるみ

どの彩を足しても虹が落着かぬ 福本 英子

人間が好きで教師をしています 斎藤 岳

隙見せぬ剣客もまだ修業中 筒井 朴竜

浜木綿も機銃掃射の記憶もつ 結城 君子

墓石はきれいな金で建てておく 石垣 花子

カン検診魔女も秘かに行ってきた 政岡日枝子

黒牛と赤牛で知る県境 上田登志実

橋高 薫風

ラーメンの屋台へ日参するベント

津守 柳伸

戒厳令の夜は抱き合うほかはなし

谷垣 史好

影法師私の席で待っている

河原恵美子

ストローが何本もあるリクルート

藤田頂留子

散髪は三パーセントのびてから 宮崎シマ子

評 今年は庶民の怒りが爆発したせいか、

諷刺の句に優秀なのが多かった。秀句十句の

中にも史好、頂留子、シマ子三氏の作品が対

象になった。時事吟は命の短いものではある

が、川柳の一つの要素であるので推薦句に決

定したわけである。

宮崎シマ子

こんな立派な賞を頂くのは、雲の上のお方ばかりと思っていましたので、私にとお知らせを頂いた時は、驚きと感激で声も出ませんでした。諸先生方のご指導を仰ぎ、先輩の皆様の温い手に縫り、甘え心で今まで来ました。これを機会に賞に恥じぬよう再勉強いたします。ありがとうございました。



もたれ合う人と

喧嘩をしています

富田林市 池 森 子

池 森子柳歴

昭和57年 富柳会へ入会

昭和61年 川柳塔誌友

〈準推薦句〉

浄土まで道を計りに行ったまま 土居ひでの

〈推薦句〉

もたれ合う人と喧嘩をしています

池 森子

川柳塔賞候補作品

川柳塔賞準優秀作第一席
姑さんと嫁とでなしに

出会いたい

高杉 鬼遊

あの世へは順不同ですかきつばた

鳥取県 山根 八重

山本希久子

故あって皿一枚を割りました

岸 桂子

男には男の世界瓶の数

福士 トキ

妻だからたまに夫を叱ります

滝北 博史

夫婦して同じ咳する花の冷え

麻野 幽玄

約束は守ってくれる人とする

山口三千子

千手仏どの手でひしと抱くだろう

山田 保蔵

和歌山市 森

茜

おにぎりをしたらきれいに手を洗う

乾 隆風

河内 天笑

自己流の体操をして今日終る

船の旅思わぬ方に陽が沈む

どこからが余命でしょうか忙しい

年寄りを看る年寄りになりにけり

おとなしい人おとなしい犬を伴れ

その時は全身マリで逢いにゆく

偶然をうたがいませんお月様

自漫にも恥にもならぬ縄をなう

貝になる前に最後の砂を吐く

〈推薦句〉

山口三千子

野村 静雄

井上すみれ

中尾まゆみ

安田 志津

宮武まつ女

もたれ合う人と喧嘩をしています

池 森子

小出智子

軒先を貸すのは燕だけにする
ほころびが知らないうちに縫ってある

新 正子
大村 正雄

不動産屋が歩いた土地の値が騰る

尾宮 弘治

ほえみをキャッシュカードで引き出そう

今本 早苗

湯上りの老妻なにか塗っている

木下 義嗣

転居した事をツバメにどう知らそ

大川 幸子
伊吹 富恵

もう一度逢いたい傘を借りてくる

西尾 栗

路郎賞の句は洵にやさしい平和な句で、

塔社がモットーとする和の精神とよく合

った句である。作者は誌友を経て同人と

なり、ねやがわ、菜の花、八尾公民館川柳

教室で研鑽を積まれた努力の人である。

今日の賞は宜なるかなである。

川柳塔賞の句は川柳らしい川柳で、仲

々面白い。候補作品の中で複数の選者が

推した文句なしの逸作である。もたれ合

う人は姑と嫁か、老人夫婦か。いずれに

報復のペンを握ったまま眠る

小谷美つ千

〔準推薦句〕

もたれ合う人と喧嘩をしています

池 森子

〔推薦句〕

姑さんと嫁とでなしに出会いたい

山根 八重

板尾岳人

約束をひとり信じる月見草

新 正子

それなりの力量なれど山椒の実

田中 輝子

恥いくつ晒して花の首落ちる

寺中三枝子

いたずらな指を許さぬバラの棘

宇野 昭代

蝶に逢う約束がある花の種

岸 桂子

躓いたところで捨う母の笛

酒井 靖子

引き金をひいてしまったイヤリング

野村 京子

ふり向けばひたすら恥じる赤糸

宮武まつ女

髪切って風の話の話を聞いている

西浦 小鹿

〔推薦句〕

千羽鶴北の序曲を思いだし

森 茜

谷垣史好

おにぎりをしたらきれいに手を洗う

乾 隆風

あいまいな人に紹介された仲

鈴木 良征

千手仏どの手でひしと抱くだろう

山田 保蔵

枝折戸のかばそさ誰もうけいれぬ

森 茜

汚されにぼつと出て来た美しさ

野村 静雄

不謹慎な笑いを溜めている木魚

桜沢あかり

御仏が目を開いたら困っちゃう

大川 幸子

報復のペンを握ったまま眠る

小谷美つ千

過去帳に二歳で死んだ者がいる

小林 一夫

新線のまぶしさ愛のまぶしさよ

中尾まゆみ

〔推薦句〕

この度は、栄ある川柳塔賞をいただく

ことになりました、ありがとうございます

す。

ただただ人のあなたかき、やさしさに

触れることが嬉しくて、川柳を作ること

はその先にあつた私ですが、この素晴ら

しい受賞をステップとして、大きくはば

たいてみたいと胸をふくらませています。

どうぞよろしく願っています。そして

水煙抄

黒川紫香選

静岡市 沢田 きん

はしゃいで帰れば病人待っている

富田林市 池 森 子

いつか又夢の世界で逢いましょう
だんだんと陽差しを逃げる立ち話

向き合うと赤い帽子には負ける

月下美人一夜を満たす顔で咲き

やさしさを並べ男試される

騙された背中へ染みる秋の風

広告塔の上でカラスがよく笑う

雲海で昼寝出来たらすてきだな

あなたの火消してマッチを擦る女
今頃になって過去に責められる

熊本県 大川 幸 子

八尾市 高 杉 千 歩

説明会に來いの診断気が減入る

木偶の棒と呼ばれて久し星降る夜

スベアを頼り過ぎていた油断

昨日とは次元の違う人と寄席

夢の中の事だまさか気付くまい

元氣印にベレー帽赤を拭る

どうって事ないに気がかり娘のレター

書き遺すことなしまだまだ元氣です

波が消す砂文字だから深く描く

五分前のあなたを探す都市砂漠

兵庫県 酒 井 靖 子

熊本市 宇 野 昭 代

あでやかに咲いた花にもある誤解

ぽっかりと空いた一日持て余し

がむしゃらに生きて女が虹を追う

添寝からすべり出て母又忙し

血も涙もない石ころに蹴つまずく

懸命に生きたと思う日が終り

ペンだけが嬉しい味方でいてくれる

私には私の幸せ今日を生き
逆風に微動もしない父の眉

名古屋市 藤井高子

気まぐれな風と波長の合うとんぼ
距離すこし置くから「ひと」が美しい
ありふれたシナリオでした待ちぼうけ
霧が晴れるとどこにも迷路などはない
蹴ちらした石がおでこへ飛んで来る

伊丹市 山崎君子

夏祭り今年も亡姉の浴衣着て
ひとり言仏に庭の花飾る

涼風がゆとりをくれる朝のみち
絵にしたい花とおしゃべりしています
首たれたひまわりに聞く今日のこと

京都市 松川芳子

共稼ぎしているように朝を出る
判断の甘さで転ぶ女坂

生きている幸福があり米を研ぐ
ミニバイク妻の凜々しいアルバイト
里帰りできたラッッシュいとわない

大阪市 上田柳影

メロン切る妻嬉しさを持ち帰る
蝗蛙も消えた田圃に夢がない
案じつつ豪雨聞いている山の宿
折れて出る心持つる朝の窓
緊張がゆるんで汗がどうと噴く

井の中で居眠りぐせがついてくる
吉報へ胃袋軽い歩が弾む
直角に進んで捻挫くり返す
風多彩過去の頁を通りすぎ
駆け足で雲が流れてゆく旅路

今治市 野村京子

ハイビスカス小さな罪が生れそつ
女だけ攻めたてに来るしがらみよ
淋しさを埋めておきます備考欄
八月の海へ聞かせるレクイエム
蓮の開花仏もおわす観世音

西宮市 秋元てる

大空の碧を沈めて湖黙す(十和田湖で)
ギャグ一つこなれないまま幕下りる
冴えぬギャグ笑ってくれる妻がいる
床拭いてふいて新宅客を待つ
喜びの涙は流れるままにする

西宮市 松本一郎

丸くなった友の言葉がひっかかる
病室の窓一杯の青い空
明日またね病室を出る妻の背
病室の窓から妻が小さく消え
根無草わが人生に悔いはない

善人の影は踏まないことにする
尼崎市 森安夢之助

八起き目の男の意地が通せるか
爽やかな笑顔で敵を迷わせる
言い訳はしないが海は荒れている
躓いた石へお詫びを言うて去に

尼崎市 的場 十四郎

ホロ苦いビールで知ったイロハ道
朝顔に愚痴の甘さをさとされる
少年の鼓笛太陽を突きつける

丸盆にこの世の義理をのせて生き
先生が気ままにつくった句をほめる

久留米市 鶴久 百万両

時々は誓詞も読んで仲がよい
美女になる秘訣を俺に聞きにくる

カネのなる木を裏庭に接ぎ木する
そうめんでもよいと気さくな友を招ぶ
だとしても男のけじめつけておく

吹田市 井上 照子

新妻の味覚に馴れて愛たしか
栄養剤忘れた朝の重い足

原因は甘え過ぎての不仕合わせ
大役をあつさり受けて悔いている
ワイングラス悪女口紅拭わな

兵庫県 森脇 和子

育ち盛りカレーの好きな子を見つめ
まだ少し肩の荷があり慕われる
平凡な倅を抱いて墨をする

足りぬもの満たす一刻髪洗う
好きだから台本なしの体当り

羽曳野市 福田 満洲子

米ぐらいけちるでないよ世帯主
直売の方が高値の夏野菜

本棚にされてしまった古ピアノ
猫ふんじやつただけは覚えてるピアノ

摂津市 木下 道子

観光バスのにぎわい移し土産店
寝てみたいコーヒーゼリーの真ん中で

物真似の域を抜け出たプロの芸
山の子に花の名前を訊く旅路

和歌山市 山口 三千子

眉唾かも知れぬ話がうますぎる
一日一善凸凹道を補修する

糠にくぎ覚悟で打った釘が効き
こわれ物のように初孫抱いて来る

和歌山市 森 茜

無人駅おとなりさんが待っている
教訓の一つを貰う捨てぜりふ

御曹子とてもきれいな目をしてる
お弁当きっちり食べて娘は出かけ

大阪市 亀井 円女

呑んだ日は私に鰻買うてくる
不思議だね内緒ばなしが翔んでいる

熱帯夜月とやもりと不眠症

盲導犬に会うと涙が出て困る

出雲市 金村 青湖

盆帰省燕と君とイカ刺しと

死ぬるまで女でいたい薄化粧

名も成さず敵も作らず阿波踊り

少しずつ曲る背を抱き黒子役

出雲市 岸 桂子

どの川も海に流れて行くつもり

本棚をいつしか柳誌が埋めて行く

兎も角も息をひそめて夏送る

この返事二円切手は貼らず出す

米子市 新 正子

くじ売り場はずれ多数と書いてなし

なつかしい顔が集まるおとむらい

地下鉄に乗って酸欠です与作

ちまき買ひ女が鉾を歩きます(京都祇園祭)

佐賀市 江口 万亀子

耐えていた涙の壺があふれてる

赤信号意外な人も渡りだす

寶石ももたず金婚式がくる

戦前も戦後も耐えて少しほけ

鳥取県 西浦 小鹿

公園に昔の鍵が落ちていた

愛語る鍵穴に夢入れておく

彼岸まで泳ぎ切ったか笹の舟

温かい話を縁に集まった

見晴らしがいいので墓地を予約する
尾宮 弘治

ミニの娘が斜めにのぼる歩道橋

燃え尽きたはずのリズムに虹が立つ

焼き茄子を食べに異郷の子が戻る

尼崎市 山田 保蔵

一流ホテル前でタコヤキ売っている

待たされて空缶蹴ってうさはらし

披露宴祝辞つづきで食べられぬ

自転車に取られ歩く道がない

藤井寺市 高田 美代子

逢いたいと言って下さる人が居る

無理をせぬようにと自分に言いきかす

拗ねているきつと倅せすぎるのね

指切りをした日と同じ祭り笛

酒田市 永澤 裕子

ひとり酒背負った荷物捌きかぬ

自惚れの軽い返事にせめられる

気晴らしが時間忘れたゲーム台

愛唱歌知ってる限り秋の月

東予市 小山 悠泉

ポスターの美人が誘う能登の旅

伊勢えびが色どり添える祝膳

母の目にまだまだ惜しい使い捨て

土のぬくもり好きで百性止められぬ

吹田市 山本 希久子

すべり台母を待つ子に夕日落ち
米作の苦勞を知らぬ米談義
虚と実のはざまを揺れる秋桜
神様に甘えてみたい余生です

鳥取県 石谷 美恵子

ひよっこりと顔出すモグラ叩かれる
マンションに風鈴吊す軒がない
満腹になれば意見も丸くなり
廃船の哀歌岬は聞いていた

姫路市 谷 清柳

鍋さげて似合いの蓋を探してる
おなじ空見ている人のいる安堵
跳び越えた壁の向うに壁がある
正論を吐けば吹き矢がとんでくる

貝塚市 池田 寿美子

良い噂左の耳に溜めておく
倅せの一日は茄子の浅漬に
コンビ組む正反対も又愉し
星空に天守妖しきシルエット

(玉三郎イン・ヒメジ)
尼崎市 鈴木 良征

目刺しが好きで大きなことは出来ません
本当の味方に弱身握られる
三枚目いつもトチっている科白
良い人になろうなろうと旅に出る

寝屋川市 宮崎 菜月

運命を質入れしても欲しい愛

やわらかな息して眠る青蛙
拝殿の暑さにも仏胸はだく
クワガタもカミキリもいる昆虫酒場

熊本市 黒田 緑

視点ちと変えて横道でもするか
素直ではない目に鏡ゆがませる
三猿に笑われそうな目に出会い
唾一つ付けたら事が終りかけ

熊本市 岩切 康子

室内プール老若男女が睦まじく
テレビより一菜もらう夕仕度
毎晩を付合い酒といい機嫌
味覚の季女は日毎艶を出し

熊本市 北川 一進

約束は酒の上での軽い口
音痴です言ったマイクの上手い声
突然に見合写真を差し出され
子の遊び秘密の場所が一つあり

熊本市 高野 宵草

年の功うまい言い訳してくれる
涼しくて職場がよろし夏期休暇
おもいきりお喋りをして憂さはらす
花の種ラベル信じるほかはない

和歌山市 堀端 靖子

屈託のなさTシャツの人が好き
お誘いの輪に馴染もうと飲むワイン

木で熟れたトマトの味を知っている
玉ネギの産地で取れた女です

岐阜市 渡辺杏村

運動会パパのビデオが忙しい

混浴を期待しすぎた露天風呂

ひんしゆくを買った課長のハダカ芸
ロマンチスト落葉を本にはさみこむ

和歌山市 田中みね

憎むまい愛した日々もある別れ

こだわりが解けて夕餉の軽い箸

あけすけの妻で空気が淀まない

気まぐれな恋の落とし子風媒花

鳥取県 山根八重

また来てねいつも約束させる指

夕顔をみつめて昨日今日のこと

お刺身が器用にできる島育ち

夕焼けの静かな海が好きなの

島根県 高野律子

高原の八月すでに秋の風

遠花火あれよあれよと対話切る

寡婦暮し小さいけれど明るい灯

今日も又挨拶ぬきの友が来る

堺市 山本半銭

八月の汗をかいてるかもめーる

コスモスが咲いて逢いたい人がいる
見出しだけであらかたの事読みとれる

免許証の写真わたしも気にいらん

佐賀市 古川一徳

健康ドリンク壘が転がる病んだ街

賞罰なしのわが人生に悔いすこし

経典は死ぬ日のために読んでおく

台本を忘れアドリブ ソツがない

兵庫県 奥野テル

実らせる約束がある茄子の花

小雨降る静かな夜を詩と組む

明暗の狭間を風と渡り切る

それぞれの個性を見せて咲く野草

高槻市 芦田静江

化野に生きるあかしの石を積む

ブランドに期末を漁る老いの背な

裸馬に乗って自分を確かめる

カラタチの愛のボールは狂わない

岸和田市 岩佐ガン吉

あの汗だどうやら嘘はないらしい

異常なしとは二時間半も待ったのに

ヘルスメーター妻の嘆きも乗っている

豊中市 滝北博史

人生に数えきれない落し穴

妻だからたまに夫の財布みる

赤紙がさらっていった青い鳥

昭和史はひばりの唄でつづられる

金髪の浴衣姿も輪の中に

ライバルと射程距離の中に住む

義弟逝くれんげ菜の花入れてやる

ストレスを捨て切れずして旅終る

尼崎市 明 壁 敏 之

尼崎市 佐 野 六 浦

もつれてる毛糸末練を切り捨てる

二階から自慢話が降りてくる

マンションにクロスワードの灯がともしり

内の犬一戸建に住んでいる

尼崎市 木 下 義 嗣

真夜中に妻の軒に目がさめる

子も居ない部屋で一人でビール飲む

伊達眼鏡掛けては見たが恥しい

酔うほどにリズムにうまく乗る男

堺市 神 原 文

やさしさの過ぎる言葉におだてられ

ときめいて封切るまでの一瞬時

夢二の画ほどを指してダイエツト

誘っても誘われた日も払う僕

旭川市 朝 倉 大 柏

酒のあるうちは味方の顔でいる

じいちゃんが児を笑わせている平和

生きているから幸せとしておこう

好きだからあんな嘘までついたのに

岡山県 杉 本 伊 久 栄

もしもしと笑顔伝わる電話口

ビール一杯流した汗をふいてくれ

同窓会会う度ごとに若がり

甲子園夢見る孫の野球帽

羽曳野市 芦 田 絢 子

川風に髪なびかせて駆ける子ら

別れの口付け冷たくて泣けました

手抜きする自分に慣れてくる怖さ

尼崎市 那 賀 島 雅 子

熟年の重みがかかる小さい椅子

浮世絵の女はどれも同じ顔

寝ころべば空も身近な草の原

和歌山市 前 田 美 子

三パーセント上のせをするおこずかい

台風が外れてまあある月が出る

何も無い日の幸せを忘れてる

大阪市 今 西 静 子

神経質の夫は一日ぼやいてる

妻らしく今日一日はさからわず

来い来いと羅漢の中の父母の声

京都市 小 林 英 子

愛憎を重ねて夫婦らしくなる

マンションが増えて無口になった町

憎めない顔して憎いことを言う

枚方市 森 本 節 子

いい話南の風につてくる

百メートル下がって華厳のしぶきうけ

オルゴールの館で「植生の宿」を聴く(伊香保)

枚方市 中山 おさむ

一年の早さを孫のてのひらに

マンガ本扶養家族に囲まれて

俗事にはうとい巨匠の野心作

尼崎市 住谷 石舟

夾竹桃夏の女は美しい

古い殻お捨てなさいと蟬しぐれ

年の差が気になり恋のはかどらず

守口市 森川 春子

金魚掬い少し破れて慎重に

紙風船頬つべた痛いほどに吹き

食の進まぬ顔が自分でも分かり

堺市 宮本 かりん

限りなく花は自分を主張する

飼い主のいない所で猫を蹴り

炎天下蟻も一言うわさする

大阪市 榎本 路児

鬼ヤンマ野球少年夕焼ける

露天風呂旅の終りという夕陽

花生けた牛乳瓶がある茶店

静岡市 小本 久子

おとなしい金魚は先にすくわれる

留守番電話咄嗟に言葉出てこない

学校が近くて遅刻ばかりする

鳥取市 岩原 喬水

買うたびに一円玉が文句言う

ふるさとは良しステテコで風を聞く

顔見えぬ電話に頭下げて詫び

尼崎市 吉永 伊三郎

腹の子に時を急かされて式早め

父の日は浮いた噂もなく暮れ

金に縁ないのが女連れている

京都市 渡辺 圭坊

高原に変らぬ愛の桔梗咲く

山麓で想いに耽ける萩の花

野鶏頭道におしゃれ振りまいて

藤井寺市 楠 昭子

情報が早いとて町内だけのこと

肩書がついてゴルフの帽子買う

玄関での話たいした事がない

静岡市 増田 扶美

碗ぎたてのトマトの香り今朝の幸

鈴虫を買って夢見る団地の子

過疎の村我が世とばかり蟬しぐれ

鳥取県 西川 和子

鬼のような事でも言えるのは母さ

ボリュウムを上げて洗濯しています

電器屋のテレビに私写ってる

松江市 原 長 三

日記帳余白だんだん多くなる
一日が短くなってゆく余生

老いの身をゆったり浸すぬるい風呂

広島市 名 和 喜一郎

幾度も花取りかえて父の病む
卯の花の味付け嫁に教えおく
ずいぶんと歩いたつもり螢気楼

出雲市 金 森 知恵子

人徳かポンポン言う口愛される
ビタミンの助けも借りた夏の坂
正攻法勝目ないから不貞寝する

岡山県 土 居 ひでの

母の手を離れて片言夏の旅
風青く三歳五歳を野に放す
泥んこになって自分を失わず

静岡市 三 浦 つ ね

夏休み帰れない娘と長電話
風鈴の音に去年の句が浮かぶ
笑わせるガイドを乗せていい旅行

砂川市 大 橋 政 良

追い風にのり追い風に騙される
染め抜きが出来て二度目の役がつき
くつろげる雨が一日降ればいい

藤井寺市 中 島 志 洋

アベックは名月なんか見ていない
落書きの傘の相手と共白髪
猫舌が爛が温いと怒鳴ってる

出雲市 伊 藤 寿 美

イマジネーションあなたにラブし書く漫画
ジョギングが片手で拝む石仏
嫁不足過疎で泳がぬ鯉のぼり

兵庫県 東 浦 砥 代

漬物を褒めて茶呑みの友が寄り
独り呑むグラス明日の夢を盛る
残り火を沈めて寡婦の力瘤

寝屋川市 大 田 藍 子

夏休み森の木陰でかくれんぼ
再検査誰にも言えず一人寝る
そうめんと野球で過ごす夏ひとり

岡山県 後 安 江 山

押し花に遠き日還る日記帳
此処だけの話がもれるすき間風
かたくなに口を閉じた貝の意地

大阪市 清 水 利 武

今日一日何をしたのか陽が暮れる
コアラまだ馴染まないのか寝てばかり
生活の知恵が作った床料理

泉佐野市 真 崎 浪 速 子

斜めからじっと見ていた謀反劇

五時男今日も斜めに押す暖簾
癖のある綴り達者でいるらしい

静岡市 西村 千代

日曜日朝の素顔を覗かれる

朝顔が伸びて二階の窓で見え

年寄りを甘く見過ぎた日の誤算

鳥取県 中瀬 さつき

台所嫁と姑の笑い声

蚊を追いつ墓掃除して盆を待つ

疑問符抱いて後からついて行く

鳥取市 萩原 美雪

ひとつまみの庭もないけどマイホーム

旅先の恋せつなくてせつなくて

ささやかな建売り老母の位置がない

米子市 小塩 智加恵

ひばり逝きひばりの歌が好きになる

淋しくて赤青黄の花を画く

二杯目のコーヒーまでがお小遣い

鳥取県 美浦 美代子

パッじつけた強い仲間裏切られ

かあさんがよく笑う夕餉ほのほのと

甘い汁吸う悪代官が生きかえる

米子市 小西 五十鈴

冬よりも夏の暮しは楽という

格安の卵料理が増えて飽き

風鈴の音色でわかる南部鉄

伊丹市 小熊 江美

線太くなって息子が帰省する

先生の家庭訪問で大掃除

なぐさめる言葉さがして眼鏡ふく

静岡市 浅子 まつゑ

欲求不満隣のつるが伸びて来る

経を読む修業僧の声若し

生活のリズムを乱す夏休み

熊本県 増田 一乗

お忙し着せ替え人形のママばやき

それぞれの顔が揃った合同句集

午睡から覚めても夏の日が高い

鳥根県 加本 義良

身内にも右と左が居る選挙

右側を歩けば車と向い合う

追越した車が赤で止つてる

川西市 野村 静雄

思い出に酔うてクスクス笑われる

一円に罪はないけど腹が立ち

今だから言える話が多すぎる

広島県 森川 抜智

間のぬけた返事に力ぬけそうだ

国なまり丸出しの喧嘩おもしろし

まるまる損ですとまるまるのうそ

堺市 近藤 豊子

蟬しぐれ止むと風にも音があり

蟬しぐれ止んで速達届く声

さつまいもリユックにおもい蟬しぐれ

長岡京市 山田 葉子

アーケード鳩も立退き迫られる

居間キッチン妻の注文どおり建ち

つむじ風内緒話によりたがり

西宮市 菊池 トミエ

捨てきれぬ小箱の中に独り言

宅急便とび出しながら手を拭いて

亡姉に似た後姿の花の寺

島根県 松本 聖子

梅雨明けの空の青さの嬉しさよ

風鈴が梅雨のあけるを待ちかねる

過ぎた日を今の生活にタブらせる

鳥取県 松本 伊都子

相槌をうっかり打って恐くなり

気の向かぬ手紙にペンが引っかかり

ねぎらいのビールを注いで夫に添う

豊中市 村上 とく子

塾通い卵の殻がかたくなる

お客様もう一円とレジの声

ナイターが終り夫婦の差し向い

豊中市 三宅 つえ子

空振りをせずにひっそり茄子の花
人格の崩壊見せぬベレー帽
許されぬ答を杖に聞いてみる

相生市 中塚 礎石

表札は住民票が無い遠慮

二次会になつて言いたいことも言え

ままごとと言われようとも目玉焼き

唐津市 浜本 治幸

確かめて確かめて見る宝くじ

何となく日が暮れてから動き出す

何一つ出来ぬ猛暑の昼下り

河内長野市 大西 文次

酒呑んでまで貧乏な話する

夕焼けに明日もおいでよ赤とんぼ

肘鉄のコンテストなら出てみたい

今治市 渡邊 伊津志

つぶやきが輝いている海の風

したたかなようで間抜けたところが好き

目の高さ同じになつて話聞く

豊中市 小林 一夫

花の名を思い出せないだけのこと

語るべきことも語らず夕立す

万灯供養遠き人恋う灯を見つむ

川西市 西脇 富美

妥協ではないと心が繰り返す

掛け違う鉦に気付くのどかな日
いい話らしい座蒲団深く当て

榎原市 西本保夫
振り返ればグッドタイミングで家を買った

奥さんをほめてこの場は逃げておく
年金の暮しで靴もちびらない

新潟県 高野不二

漫画なら読みます大学生が言う
年金の暮しにこわい交際費

どう見ても左遷さ椅子がきしんでる

枚方市 山崎彩子

顔の汗区切りつくまでほっとかれ
おとなりの風鈴三箇で攻めたてる

観世音お言葉ほしい時もあり

大阪市 堀口欣一

終戦の日の井が家宝です
髪長く美しきひと湖西線

大天狗小天狗集う展示会

倉吉市 青砥菊枝

ザアザアと小気味よい音夏の雨
産声がり椅子からみんな立つ

古里に降りれば蟬の大合唱

尼崎市 中澤向西

請求書眼鏡外して読み直す
株相場すり上げて見る老眼鏡

盆の客帰ってしずかな三DK

茨木市 藤井正雄

暇なのが気疲れのするアルバイト
横顔をほめてワインをそっと注ぎ

釣堀の看板鮎の飛びあがり

鳥取県 武田照女

置時計亡夫の角度に置いてある
定年の夫を乗せる帆掛船

湖底から昔話が浮き上がり

倉吉市 田中八太郎

ひらがなを並べて孫に返事かく
忍の字で心頭醒ますこの暑さ

孫に買う土産を選つて弾んでる

河内長野市 岡崎実

たこ焼に一家言ある若旦那
村を捨て都会の隅で酔うている

風雪に耐え貧乏を友とする

十和田市 阿部進

生臭い風が漂う政治裏
親友がお金貸したら寄りつかぬ

露天風呂のんびりと聞く蟬しぐれ

岡山県 牧野秀香

あじさいが青春家族の彩に咲き
その先の構図が読めた御親切

鍵っ子もプランコ捨てて漫画熱

泉佐野市 大工静子

鼻のイボ目印なり今日の客
うしろからお早うと言われうれしい日

菊の名は春の小川と立ててあり

島根県 川津幸夫

日めくりの予定を追う父元氣
八つ橋が好き八つ橋の京土産

飼犬のしつけ隣と不仲にし

倉吉市 橋本さつき

カンナカンナ憎いと燃え上がる
捨て置いた毬でさっぱり弾まない

昏い湖に浮かぶわたしの晒し首

寝屋川市 井上すみれ

昼寝から覚めて景色がボケている
腰かけが空いて文庫本眠くなり

古里の森都の話聞きたがり

静岡市 久保きぬ

傷心を優しく包む眼に出会う
縁日の金魚に親子遊ばれる

納得のいかぬ世界が揺れている

岡山県 後安ふさえ

腹の内よめず乗ってた口車
ひろい読み出来る孫へ絵本買う

忍耐の言葉をだいて今日も生き

大阪市 山北三三三

飼犬に通る野犬が話しかけ

へそくりが一泊旅にまだ足りず
夢の中呪文唱えて雲に乗る

十和田市 阿部喜久江

招待状祝儀の子算組んである
金いくら積んでも買えぬ母の愛

道づれができて楽しいバスの旅

静岡市 山中竹野

遠出やめ庭の樹陰で避暑としやれ
脳細胞減ってジョークもまわりかぬ

スマートにいざござなしのおつきあい

鳴門市 八木芳水

冷静になって何もが恥ずかしい
言い訳に汗も吹き出す嘘ホント

アルバムと半日過去を語り合う

伊丹市 猪原石荘

若い歌早口ことば聞く如し
古写真ゼムクリップの錆がつき

いつの日か孫に譲ろう切手趣味

岡山県 福原悦子

お喋りの中に真実一つ見る
秋の風茄子の色まで染めあがる

色づいたほおずき確かな陽の匂い

鳥取市 近藤秋星

立秋と聞いてもぴんと来ぬ暑さ

老いらくの恋と他人は笑うけど
故郷の西瓜重たく持ち帰り

鳥取県 西原 艶子

子宝の代り人形作ってる

まだ水が澄んでるだけの安堵感

お化粧を落とし見慣れぬ顔になる

富田林市 山原 昭水

ぼくの部屋百科事典が生きている

自分史を書いてみようか正直に

近所には雑誌の表紙が住んでいる

岡山県 伏見 すみれ

留守番という役割も骨が折れ

爪染めて好奇心から道を外れ

恙なく楸を洗った今日の汗

宇部市 中村 三良

すかんぼに敗戦しみじみ味わいし

エチケットなど腹八分目になっってから

無人駅定期案山子に見せて出る

藤井寺市 武部 敦子

カラフルな窓のカーテン団地の灯

耳寄りな話に乗ったイヤリング

和歌山県 森 三枝子

仏前に両掌で詫びる親不幸

主婦の座に馴れて空気のような妻

鳥根県 福岡 博利

中元と歳暮を交わすだけの友
杖ついて歩くがやっとの日課です

鳥取県 武田 帆雀

どちらかが折れて人目によい夫婦

断水の時間は昼寝するとする

鳥取県 乾 隆風

日帰りで辞書とひと汗かいてくる

飢え知らずダイコン飯も知らぬ子で

鳥取県 黒田 くに子

おもちゃ博開く世の中平和だな

不揃いの顔にも鼻は真ん中に

鳥根県 兒玉 幸子

新聞配達朝の光へ勇気わく

山ひとつ越えれば降らぬ夏の雨

鳥取県 今本 早苗

童謡をうたってくれたおばあちやま

助手という席から夫を攻めている

米子市 服部 朗子

夕凧を見事に飛ばす糸捌き

風鈴の短冊ゆれて人思っ

岡山県 富坂 志重

器良すぎて私の料理似合わない

百円の結納金で五十年

岡山市 河野 青銅

街並みがきれいでゴミも捨てきれず

ビル街の谷間で会ったまるい月

岡山県 森下正子

言いたい事聞いて論してくれた亡夫

浮き沈み沈んだことも陽があたる

大阪府 川原章久

送り火が水面に写す若夫婦

立読みで漫画が売れぬ夏休み

静岡県 宇佐美寿美

バイバイと車窓にゆれるもみじの手

カルチャーもクーラーつきで避暑気分

大阪狭山市 桜井莊次

むずかしい顔が見ている漫画本

斜め傘急ぐ理由のある女

鳥取県 石尾かつ乃

夏まつり過ぎて過疎地に虫が鳴く

軍靴の音がどこかでする墓前

鳥取県 幸家單車

仕事にも慣れてそろそろ愚痴が出る

世なおしにペン一本でたち向う

寝屋川市 河合時弘

洗濯機にまかせきれない古い妻

キャンプファイヤー少年やっとな気づく

東大阪府 岡田寿美礼

うす紫の小菊にあつて満ち足りる

一日を無事に勤めたうまい酒

スローモーターもまたよし妻の台所

甘い球見のがす妻の思いやり

愛媛県 八塚三五島

足裏の罪雑巾へすりつける

二DKダブルベッドがはいるかな

吹田市 西岡豊

教え子が来賓席で反り返る

どんと飲みどんとやろうという女傑

寝屋川市 北岡波留吉

ほめたい孫にきびしい嫁の目と出会い

夫の言訳じつと聞いているポーナス日

鳥取県 前田嘉津江

願いごと叶って神に鈴を振る

花時計四季おり折りの彩を着る

和歌山県 岩崎瑞穂

追伸へ胸ときめかす恋心

何もかも条件揃うて縁遠い

出雲市 高橋きよし

娘の帰省待ってる母の握り寿司

雑音を聞きつつ独り街に住む

川西市 田中喜俊

いつの日も釘づけになる甲子園

宅急便紐解きながら母思う

松江市 豊田巡歩

街の雀寄ると女権を主張する
年金を貰い呆けては居られない

堺市 井上 たかし

ポケットの中の指切りたわいなし
欲張りが損して終るいい童話

静岡市 柳沢 たま

お帰りと言って迎える盆の膳
夫に似た人もこちらを向いている

静岡市 中西 稚

似顔絵を誕生祝いに孫がくれ
誕生日何はなくとも祝われる

鳥取県 市村 京子

会いたさに窓をあければ月の道
結び目のまだあたたかい糸を抱く

青森県 波 ただお

天も地も人も燃やしたネブタ哉
ジーンズの姪の腰つき女めき

鳥取県 美田 旋風

いらだつてグルマの片目待っている
検査潰け医者は結論まだ出さぬ

大阪市 平山 登代

長すぎた杜宅住いも新築に
墓詣り早くも枯れてる盆の花

大阪市 家村 高雄

紙吹雪客席に舞う幼稚園

中指でどれどれ孫に歯が生えた

鳥取県 木下 芙葉

逝きてよし浄土の道は花ざかり
寺の鐘今日うつとりと風にのり

鳥取県 久野 野草

控え目に光るお星は亡母だろう
太平洋飛んで心も広くなり

兵庫県 倉垣 恵美

身の上を知って真直ぐのびる苗
繻帯の交換すんでから痛み

岸和田市 三輪 通彦

犬でさえ打算があつて尻尾振る
世間体気にして前へ進めない

鳥根県 菅田 かつ子

通り雨に野菜行水してもらい
蟬の合唱時々音痴もまぎれ込み

鳥取県 森山 豊子

ピアガーデン昇つただけで汗が引く
いい笑顔貰い平和な日を送る

唐津市 入江 喜久夫

貯め置きし一円玉の生きる日々
波の音聞きつ砂場の昼下り

藤井寺市 菊地 繁男

鯉料理祭囃子を聞きながら
家系図で父の存在見直され

風鈴の音に読経の汗もひき
仏壇に勤行つとめる盆の朝

豊中市 額田明吉
八戸市 島田昭治

カラオケのお陰で老いを忘れてる
夏休み孫のプランが先走る

島根県 山根峰雪

炎天の草刈り因果なアルバイト
金を好き金を嫌いと思つてみ

広島市 中村要

ふる里と東京に行交うお中元
息抜きに集う女性の茶飲み会

泉南市 坂根流水

言い訳が言い分に変わる倦怠期
白髪染やめて案外映える髪

静岡市 青柳金吾

お人よし老いての日々はこれどよい
自民党ひとりよがりで奈落おち

八尾市 片上英一

横着で肥満ますますもてあます
正論のように聞えるワナもある

岡山市 江口有一朗

三毛猫がいて味噌汁がある暮し
ボヤいてもボヤかなくても日は暮れる

八尾市 向井しづ子

気にいらぬ嫁だが孫の出来がよく
ふと胸をよぎる寂しさ何だろう

島根県 今川三津江

乗る前に出来上つてる団体さん
冷房の部屋で老骨きしみ出す

神戸市 岩田信義

台風が近づき雲が慌てだす
心地よい眠り夕立降っていた

鳥取県 鈴木芙美

お答えを待ちます夕虹消えるまで
逆風に耐えて課長の異動待つ

大阪市 尾崎黄紅

ヨチヨチのピエロ我が家の人気者
コスモスが隣近所一人じめ

吹田市 山田里子

指切りの数のひとつも守られぬ
かたくなに生きて寂黙の人となり

豊福路子

手八丁口八丁を遠巻きに
師と友の法要兼ねてクラス会

大阪市 乾哲静

白髪の顔にだんだん馴れてくる
うつし世の庭はあまりに狭すぎる

唐津市 山口ふさ子

炊飯器ずばらになって二日おき

相槌を打つひまもない雄弁家

芦屋市 根来 敬

実言うと転ばぬ先の杖も折り

種明かししないでおこうもめるから

大阪市 平井露芳

豪邸のコアラ空気も金をかけ(天王寺動物園)
脳の水お腹へ流す道作り(母硬膜下水腫入院)

島根県 岩田三和

熱戦にテニスコートも汗を吸う

呑みたくてコップ一杯汗をかく

奈良市 井上大

サミットで作り笑いをして別れ

大相撲だけは見ている受信料

大阪市 喜多佐津乃

叶う夢叶ぬ夢に折る指

まだ欲があるから数字追いかける

鳥取県 伊吹富美

負けて勝つそんな言葉のない力士

山訪えば青葉滴る滝の音

高知市 山崎一求

油売り油を売って叱られる

年齢を問わずの職のきついこと

静岡市 大村正雄

威張っても誰も偉人と思わない

お気の毒札束置くに困る人

東大阪市 大平太一郎

人生に卒業なしと日々新た

マイク手に唯我独尊サロンプラス

ふくろうの声も平和な夜のしじま

子と別居頼れぬ余生覚悟する

静岡市 丹羽定次

お早うとゲートボールも騒ぎ出す

みんな寝て夜更けに帰るお父さん

和歌山県 西口忠雄

遺族年金あるから亡父忘れない

暗中模索まだまだ続く核の傘

鳥取県 山内芳江

やせる器具買って借金肥り出す

しつとりと梅雨も又良しお茶の席

静岡県 大石たき

出来ぬ旅世界一周写真で見

野良猫が高い金魚をねらってる

鳥取県 前田一枝

嫁取りものばす気楽な水入らず

パートにも募集年齢はずされる

富田林市 加藤ミツエ

梅雨も明けいつまで続く通院が

夏休み親子のやくそくハイキング

◆ジュニアの部 大阪市 福西範子(小六)

もうすぐだ終わってしまう夏休み

軽井沢銀座で楽しくショッピング

愛染帖

橋高薫風選

- 和歌山市 神平 狂虎
愛はむらさき死は近からず遠からず
貧乏詩人の村が手帖の中にある
八尾市 片上 英一
蛙でもホゾを噛みたいことがある
今里の新地で逢った桃太郎
豊中市 辻川 慶子
ジョークだと言うには棘が痛すぎる
落しても割れぬ器の無表情
米子市 林 荒介
鍋も煮詰まる旅のおわり
町田市 竹内 紫緒
ネックレスに替わり老人バスの紐
和歌山市 後藤 正子
川の名を思い出せないまま渡る
米子市 八木 千代
神さまに逢える逢えぬはおもいの差
相生市 中塚 礎石
ハンカチの白旗少うし小さいか
和歌山市 西山 幸
姫だるまおまえもノラになりたいか
鳥取県 谷口 次男
そのうちにタイムカードを打つ漁師
寮屋川市 江口 度
花博に合わせ毛虫に餌をやる
唐津市 久保 正敏
消息不明今年も咲いた夾竹桃
米子市 川上 より子
とも綱を解かるる予感優しすぎ
羽曳野市 吉川 寿美
追いつけぬ虹ひたすらに追う木馬
- 枚方市 山崎 彩子
吹田市 園田 文子
兵庫県 倉垣 恵美
五十回忌すんで食器を洗う音
吹田市 園田 文子
雨だれが話しかけてる亡夫かも
岡山県 池田 半仙
相反す理想金婚通り過ぎ
笠岡市 松本 忠三
わたしから聞いたと言つては困ります
寮屋川市 堀江 光子
大輪のばらに屈託小さくなり
鳥取県 土橋 螢
眼の上の瘤になろうとする私
寮屋川市 豊福 路子
娘のみぞへ結び目ひとつ置いてくる
唐津市 田口 虹汀
ラグビーの孫スベインの牛に似て
岸和田市 芳地 狸村
宝くじひとの弱さを知っている
岡山県 山本 玉恵
夢一つ下さい命あまります
寮屋川市 岸野 あやめ
女なら少しは妬いてみるなんて
大阪市 神夏磯 典子
墓参り少し華やく夏帽子
米子市 政岡 日枝子
無防備な顔の片側にはエクボ
出雲市 板垣 夢酔
- 青森市 工藤 甲吉
平賀源内をうなぎで思い出し
小錦が座るとでかい蝦蟇になる
米子市 石垣 花子
知らぬ間に齡とつていた母の眉
明日が有る赤ちゃんの眉透き通る
松原市 小池 しげお
年金生活NHKばかりかけ
風鈴を聞いている何もせずにいる
寮屋川市 河合 時弘
伴走の妻が降りると言いだした
おとなしく寝ろとホテルにある聖書
鳥根県 松本文子
風だけが騒ぎわたしは待ちぼうけ
待つ受話器トイメライを聞かされる
弘前市 波多野 五楽庵
ワープロで人の悩みが書けますか
濁音が胸に溜って眠らせぬ
吹田市 栗谷 春子
弱る心臓千匹の合唱に
納得のいかぬ顔あり桃の味

結婚に触れると男燃えて来ず

田村新造 鳥取県 喜与志

奈イトクルーズしやれたデートもしてみよう 米子市 小塩智加恵

手火花にふるさとの顔母の顔 砂川市 大橋政良

砂かけて跳んでわかつた菓の温み 鳥取県 新家完司

離婚間近し外食の日がつづく 豊中市 三宅つえ子

一片に自分を置いた万華鏡 堺市 山本半銭

あちこちの手近にうちわ老夫婦 橋本市 岸本木魚

画布みんな花の絵にして老いてゆく 米子市 青戸田鶴

いく度の青春かな舟をひとり漕ぐ 林 瑞枝

錆止めのように一合呑んで寝る 今治市 矢野佳雲

きついこと言いに行くのに化粧して 和泉市 中川楓

軽口の中から貰う良い思案 今治市 渡邊伊津志

百日紅ひときわ紅し景福宮 和歌山市 福本英子

ピラ配り貰ってくれて有難う 和歌山市 松本元江

ひと夏を無事に葉裏のカタツムリ 岡山県 松本元江

虫の声急に浴衣が着たくなり 堺市 高橋千万里

父の倍生きて今年も盆送る 鳥取県 乾

老い二人大安仏滅曜日なし 米子市 小塩智加恵

見ているも楽しくなれる豆のつる 砂川市 大橋政良

かんたんに騙されなくなってきた 鳥取県 新家完司

着替えずる妻へ鏡は耐え続け 弘前市 相馬銀波

速効性にすればよかったお中元 広島市 中村要

印一つ押しても消えぬ絆かな 大崎市 山田妙子

酒の自販機曲るとそこに秋がある 尼崎市 春城武庫坊

手切れ金積んでも川柳とは切れぬ 寝屋川市 宮尾あいき

矢印があるから謀反したくなる 海南市 三宅保州

ハーケン打つ貴方よ下にわたし居る 和歌山市 田中輝子

割箸が一本かけた手づかみで生き 岡山県 富坂志重

失敗は顔から好きになつたこと 川西市 野村静雄

八月の過去一斉に蟬の声 茨木市 井上森生

蟬の声生さるころで聞いている 米子市 金山夕子

鳥取県 堀江正朗

失明の暇ぬらして聞いている 鳥取県 堀江芳子

決心がついて世間を気にしない 鳥取県 小砂白汀

酒吞めば荒野を語る父の首 愛媛県 八塚三五島

手鏡のひとり芝居に歩いてくる 守口市 森川まさお

職引いてからも電灯つけ放す 静岡市 渥美弧秀

もえさしの吾が魂は詩に成る 奈良市 米田恭昌

出発の歌を背にきく定退日 大崎市 板東倫子

山の湯のやや饒舌な運転手 富田林市 松本今日子

どうみても彼女に似合う彼でなし 岡山県 千原理瑛

横丁へつれ去られそうネオン街 堺市 井上たかし

ジंकスを破るジंकス頼りにし 和泉市 岡井泰雄

金持はもつとよい税思案中 今治市 月原宵明

日本サッチャー白いイヤリング 和歌山市 牛尾緑良

切られ役だから立派に死んで見せ 名古屋市 藤井高子

やさしさに低温火傷してしまつ 宝塚市 丸山よし津

一姫二太郎それから離婚した夫婦

堺市 神原 文
丁寧なおじぎをされて身構える
米子市 光 井 玲 子

岡山県 矢内 寿恵子
走馬灯廻りつきると亡母の絵に
大阪府 町 田 達 子

吹田市 西 岡 豊
三大祭の一つは毎年見えています
金一封べたべたはった盆おどり

鳥取県 小谷 美っ千
頼杖に迷いをのせて雨を見る
和歌山市 森 茜

倉吉市 奥谷 弘 朗
消えている筈の愛しさつとよきる
岡山県 塩見 みよ子

大阪府 榎 本 路 児
焦点が背中合わせに義理の仲
大阪府 榎 本 路 児

観世音指は嬰兒に似て丸し
この次は奥さん連れて来いと医者
大阪府 大福 留 吉

ハイ息を止めて狙上のレントゲン
鳥取市 西尾 呼 風
マドンナを妻には持たず幸いし

神戸市 岩 田 信 義
床の間に眼鏡宴会果てし跡
田辺市 染 道 佳 明

酒たばこ男嫌いではないのですが
広島市 名 和 喜 一 郎

鳥取県 さえき やえ
向う側何かあるだろう坂登る
ろくでない話も一理あって聞く

姫路市 中塚 遊 峰
万札を扇のように数える娘
竹原市 信 本 博 子

もう一度逢える予感でさよなら
山口市 神 田 治
マドンナの今度はテストされる番

枚方市 森 本 節 子
八月の尾瀬を尾の字だけ歩き
倉吉市 青 砥 菊 枝

タイムサービス腰痛忘れ真つしぐら
東大阪市 今 岡 貞 人
女二人も大臣になる世の変わり

松江市 豊 田 巡 歩
水鳥のくらしが欲しい熱帯夜
八尾市 向 井 しづ子

夕鳥ひと声お米をとぎましよう
西宮市 門 谷 たず子
ドタ靴の足が生きてる立吞屋

割り勘の紅茶に夢を少し入れ
大阪市 今 西 静 子
孫と相撲とろう昼顔咲く浜辺

唐津市 筒 井 朴 竜
玄関を出てから祝儀確かめる
羽曳野市 田 中 隆 二

岡山県 江 口 有 一 朗
大切な自分を忘れている不覚
仙台市 川 村 映 輝

いやな日本などと生保でくらしして

岸和田市 三 輪 通 彦
愛社心企業戦士の死が続く
唐津市 山 口 ふさ子

独り者ヌードで家中闊歩する
藤井寺市 武 部 敦 子
旅帰りエプロンつけて茶漬たべ

藤井寺市 中 島 志 洋
富裕国民の暮しは慎ましく
高槻市 川 島 颯 云 児

粗品欲しさに答えるアンケート
唐津市 浜 本 治 幸
祝杯を交わしてからの多弁症

人間も山河も汚染して平和
東京都 吉 川 一 郎

投句先 千 560 豊中市中桜塚三丁目12-15
橘高薫風苑(ハガキに3句)

課題「飾る」 選者 橘高薫風
締切 10月10日

投句先 大阪市中央区馬場町3-43
NHK大阪放送局

発表 10月22日(日)ラジオ第一放送
午前11時5分から

ラジオセンター「川柳係」

水煙抄

秀句鑑賞

前月号から

林 荒介

慌ても慌てなくてもゆく浄土

大田 みさと

瞑想に入つてやたら飛ぶ虫

高橋 きよし

笹舟が向う岸からやつて来る

西浦 小鹿

全てを阿弥陀さまにお任せして、洒脱に悠悠と生きられれば此の世は浄土なのだが、仲々凡俗な人間には及ばないはなし。坐禪の壁にさえも明滅する虫。迷いは迷いとして現世を肯定し、自分の浄土を耕し続けければ、向う岸からの舟にも慌てずに対応出来るのではなからうか。先渡他の心を忘れてはならぬ。

雨ふればすぐに雨もりする夫婦

市村 京子

よくぞ言つて下さいました。京子さんのお宅は違つてでしょうか、大方の夫婦がそんな生活を繰り返して長らえているのではないでしょう。雨もりの夫婦には作者が見えて心地

よい。人間を観る目線がわかる。

葉がりしてこんなとこにも陽の光

神原 文

紅葉の葉刈りを今年は忘れていた。明日にでも手を入れなければ秋の彩が悪くなる。重なりあった葉を刈ることによって、小枝の先端まで陽に照らされる。人間もそうだ。時々整理して脳の隅々まで新しい血を送つてやらねば、足踏みさえも出来なくなる。

花好きが花を咲かせる花だんぎ

芦田 静江

忙しい時のお相手は大変だが、含蓄のある話が開ける。花それぞれの土作りから、基肥追肥と尽きるところがない。裏庭に回ればところ狭しと折々の花木が植え込んであるが、決して自分好みに花を作つてはいない。花木の個を尊重し対話しながら育てている。個を認め、自分の鑄型に嵌めてはならぬ。

虹はまだはるか向うに居てほしい

石尾 かつの

海を跨いだ大きな虹、嶺を越して山から山にかかる虹。そんな虹に出合つと希望も湧き信仰も生まれる。少年の頃に水遊びで作つたジヨロの虹は儂く淋しい。何時までも遠くにある虹に向つて祈り続けたいものだ。

地球儀を回す力は指でよい

吉永 伊三郎

地球を飛び立つたボイジャーII号は海王星の映像を地球まで届けてくれた。この限りで

は平和な地球に見えるが病んでいる。それもかなり重傷だ。オゾン層の破壊による地球の温暖化、天然資源の涸渇、思想宗教の対立。力まかせに地球儀を回せば空中分解してしまう。ゆっくりと地球儀を回しながら、限りある生命を見詰め各自のありようを模索する時に来ている。生きとし生けるものと共に。

葉の裏で動きを止めて生きのびる

岸 桂子

羽化に備えて充電のとき、贖物と本物の見分け難い昨今、今こそ静かに自分を見詰めて力を蓄え、大空に向つて舞い上つてほしい。青空はあなたのものである。

前ボタン一つはずれたほど惚ける

乾 隆風

車間距離おいて伺う話です

新 正子

殆どのズボンがフアスナーに変わったが、フアスナーでは解りにくい。前ボタンには強かで遠ましい人間像が浮んで来る。十分に車間距離をとって伺わねば打つ遣られる。車間距離に正確な情況判断が要る。取り過ぎると血の通つた話が出来ぬ。

夕刊が来たのに妻が帰らない

猪原 石莊

大切な妻を残して死ねますか

北原 波留吉

待つ身、待たされる身、いとしい人のために。

尚音のむ

小出智子選

留守番電話に聞かすことではない話

歩きつつ話せば楽に言えそうなの

みんなが渡る 私も渡る赤信号

切り売りのカボチャも自信なさそうなの

五十二才でひまわりと背くらべ

順風へ鶴の折り方忘れかけ

外泊をしてから母の目をそらす

四十からの顔がいくつもある鏡

あの世まで縁の切れない女偏

先に行く方が勝ちだと言う会話

義理ひとつ欠いて仏の灯が揺れる

赤トンボ仏が帰る知らせとか

やはり主婦なぜか落ち着く台所

セピア色になって友情つづいている

おかめの私に誰もニコニコしてくれる

シナリオの通りに演技してる妻

人形の衣紋を抜いてえそらごと

距離おいて見るから丘に夢がある

落ちこぼれの瞳のやさしさを知ってます

高槻市 河瀬 芳子

大阪市 本間満津子

和歌山市 西山 幸

和歌山市 田中 輝子

鳥取県 西原 艶子

富田林市 片岡智恵子

鳥取県 萩原 美雪

茨木市 堀 良江

寝屋川市 平松かすみ

米子市 新 正子

鳥取市 小谷美つ千

岡山県 千原 理瑛

鳥取市 前田 一枝

八尾市 高橋 夕花

岡山県 富坂 志重

米子市 小塩智加恵

出雲市 石倉芙佐子

守口市 結城 君子

鳥取県 市村 京子

糸の繕もどせばつらいことばかり

無言電話と軽い演技を始めよう

喧嘩するうちが花とは他人の眼

菊枕 花に埋もれて取り澄まし

愛人と他人のように駅に待つ

良心が痛むお釣の貰いすぎ

娘の縁談急に頑固な父になる

生き方を変える五分早く起き

実家への土産話をつめている

プラスアルファー嫁が聖書を持っている

侍せの真っ只中において不安

逢うてみたいと思っただけの安らぎで

束の間の虹現実に戻される

躓いた石はそっと片寄せる

敗北の弁 勉強になりました

振り向けばいつも誰かが居てくれる

ひとのものを買っても女気が晴れる

歯車を少しずらして妻の術

自然体で生きるとまるい絵が描ける

悪人はだあれもないところてん

ひらかなない花の言い分聞いてあげ

片肌はいつでもぬぐと父の意志

どの人もスマート戦時中の写真

意地悪な影がいつでも横にいる

母と娘の間でこころ揺れている

兵庫県 倉垣 恵美

和歌山市 後藤 正子

大阪市 津守 柳伸

米子市 林 瑞枝

堺市 三浦 和子

寝屋川市 宮崎 菜月

松原市 佐藤 藤子

八尾市 宮西 弥生

和泉市 中川 楓

大阪市 日阪 秋子

和歌山市 田中 みね

大阪市 鈴木 節子

和歌山市 山口三千子

和歌山市 桜井 千秀

和歌山市 堀畑 靖子

鳥根県 松本 文子

名古屋 藤井 高子

八尾市 高杉 千歩

和歌山市 木本 朱夏

羽曳野市 吉川 寿美

米子市 光井 玲子

大阪市 政岡日枝子

西宮市 板東 倫子

大阪市 奥田みつ子

大阪市 堀 いくの

放たれて恋に恋している六十路

人形にまといついでる物語

人に席ゆずって足が痛みだす

好きだから馬鹿になるほど月を見る

いつからか二つで足りる皿小鉢

その中の二人はいつもレモンテイ

いい便り今夜は抱いて寝るとする

あたためた構図へ絵筆走り出す

夏枯れへ嬉しいハガキ届けられ

糠に釘なんてバカにはしないこと

しっかりと明日のために飲む薬

マルチーズ飾りのように抱いている

見舞客冗談ばかり言う不安

登ろうとするから山が高くなる

好きだから喧嘩もしてるパパとママ

飢の日の記憶が箸を重くする

仲直りした日のペンはよく喋る

見えかくれ自我を見つめる父の筆

コスモスにこっそり世評聞いてみる

イソツブのキリギリス二匹住んでます

野仏を逆撫でにする鬼やんま

夕焼けこやけ今日の舞台の幕が降り

キャンプの火戦争しらぬ子らが焚く

太陽を独り占めた証だね

裏方の汗台本に書いてない

兵庫県 東浦 砥代

和歌山県 寺田 裕美

有田市 松井かなめ

米子市 茂理 高代

西宮市 門谷たず子

尼崎市 春城 年代

竹原市 信本 博子

堺市 山本 半銭

大阪市 山田 妙子

和歌山市 山川 克子

倉吉市 淡路ゆり子

西宮市 西口いわゑ

岡山市 塩見みよ子

藤井寺市 高田美代子

岡山県 丸山 光子

岡山県 矢内寿恵子

堺市 神原 文

和歌山市 前田 美子

貝塚市 池田寿美子

和歌山市 古久保和子

寝屋川市 稲葉 冬葉

寝屋川市 稲葉 冬葉

藤井寺市 楠 昭子

大阪市 島村美津子

大阪市 上江洲勝子

てにをはを一つ変えたら生きてくる

ああ女 二泊三日を喋りづめ

未だ色香残して元は芸者とか

針千本吞ます小指が可愛ゆくて

好き嫌いはつきりしてるのも若さ

夕暮れて蟬の余韻がうらがなし

鬼灯が熟れると亡母が逢いにくる

そよ風が風鈴の音誘いだす

ものまねもそっくり芸で生きる道

すらすらと書けたらよいがお詫状

お互いの老いに気付いて笑い合う

土産物屋へ吸い込まれゆくバスの客

宝塚市 丸山よし津

寝屋川市 岸野あやめ

岸和田市 清野 こう

姫路市 丁坪サワ子

静岡市 小木 久子

吹田市 栗谷 春子

大阪市 町田 達子

堺市 船越 重子

大阪市 樋口シマ子

堺市 小西 小雪

静岡市 増田 ふみ

池田市 林 すて

ゴシックの一句目。留守番電話に話すことではないと

言い切ったところに、一つのドラマを想像させる。正攻

法の句の訴える力であると思います。二句目。例えば一

つ部屋で向き合って話していると息の詰りそうな話も、

歩きながら話せばと言う人間の心理を衝いた句。三句目

ちよつとした群集心理。何所ででもよく見られる情景に

対して辛辣な作者の目がある。四句目。日常生活の中で

何でもないことを句に出来ることは素晴らしい。意外性

ともとれるが女性らしい捉え方です。五句目。ひまわり

と背くらべの出来る作者の心の若さが頼もしい。この場

合、炎天に咲くひまわりこそ、背くらべの対象としてふさ

わしい。

投句先

〒544

大阪市生野区勝山南1―18―10

小出 智子(ハガキに3句)

■ずいそう

懐しの立川文庫

望月六郎

本誌七月号の西尾栗先生の「真田祭」を一読して、大げさに言えば懐旧の念潮の如く、天を仰いで「ああ立川文庫」と我を忘れた。

小学五、六年頃と記憶する。漢籍嗜好の父の居間の書庫から、偶然にもクロス張りの小型本を発見した。それらは、『諸国漫遊記』一休禪師、『真田三代記』、『難波戦記』というのである。一読して夢中になったのは、真田幸村とその十勇士武勇伝であった。

そのままの一冊を携え、私唯一の読書のアジトだった山際に向いた屋根の上に這い上り、陽が頭上に上るのも忘れて耽読したため、めまいを起して危く屋根から転げ落ちそうになったものだ。

私の青春は、立川文庫全巻通読の文学素養からはじまっている。十代の大坂幕しのいわば根っこ部分は、真田三代の六文銭の旗印がひるがえっている。そこには猿飛佐助、霧

隠才蔵の忍術大名人の活躍がある。

大阪という土地柄は、江戸時代になっても太閤さんヒイキである。江戸のタヌキオヤジ徳川家康を散々悩ます正義の勇者真田幸村はいわば大阪のヒーローである。一般庶民にとっても、幕府はムシの好かん存在だが、特に上方町人にとっては、家康は頭からマムシなみのクソジジイと映っていた。だから真田幸村は、カンタンに死んで貰っては面白くない。

影武者を銭の数ほど出してみせ

この古川柳は、幸村が死んだと見せたのは実は影武者の働きによるもので、旗印の六文銭だと五、六人いたことになる。おかげでホンモノの幸村は大阪落城のあと、九州の島津家にかくまわれ、九十歳まで長生きしたことになる。立川文庫の『猿飛佐助薩摩落』は、幸村と抱き合せて佐助まで無事なものだから、大阪の判官ヒイキも行き届いたものだ。栗先生は真田十勇士は、九人まで名前が判っているが、あとの一人はわからない。「たしか望月某という名をかすかに覚えていて」とおっしゃっておられるが、当方で手持ち文献をひっくり返した結果、その名は望月主水、望月六郎兵衛村雄と判明した。この望月某は幸村の影武者の一人ということになっているし、真田十勇士のメンバーの一人であること

西宮市民文化祭協賛

西宮市民川柳大会

とき 11月5日(日) 正午開場

ところ 西宮市立勤労会館3階会議室

(阪神電鉄・西宮東口駅下車、山側すぐ)

兼題 連想句(福島郁三氏三回忌追悼)

「文楽のキッス カチリと音がして」

から選択

「光る」 中村東角謝選

「丸い」 奥田みつ子選

「帆」 松本 一郎選

「倉」 佐野美知子選

「和紙」 水垣美代子選

「飴」 石井 冬魚選

「土」 黒川 紫香選

・各題2句(3才に呈賞)

午後1時(厳守)

締切 600円

会費 当日欠席で投句だけされる方は

62円切手5枚同封、10月10日ま

で到着するように左記へ

〒662 西宮市城山12-8

水無瀬富久恵

はまちがない。

立川文庫切つてのスターは、何といつても猿飛佐助で、霧隠才藏より忍術の方も一枚上で、才藏は弟分である。二人は江戸城へスイスイと忍び込み、家康の頭をボカボカにぐったり、徳川方の豪傑を赤ん坊みたいにに取り扱い、とり巻かれると泉水の大岩を抱え込み、チギつては投げ、チギつては投げて、岩をボタモチなみに扱つたところがいわば立川流のミソで、荒唐無稽なその都合主義はヒドイもんだが、ここがまた、立川文庫の謹憚らぬバリエーションの本領でもあるわけだ。

東京の友人からせつせと送つて貰う「講談研究」の刷り物に「講談の生成は立川文庫に負うところ多大である」と書いてあつたが、アニムベナカランヤというところ。

しかし、まともな文献もある。中野好夫編『現代作家』は、二十人の現代作家の人間形成を描いたユニークな記録だが、中野重治・高見順・丹羽文雄・石川達三・椎名麟三・川端康成・大岡昇平の七作家が、少年時代、立川文庫を熱愛したことを挙げてゐる。

丹羽文雄も「僕ら世代のたいの人のように、読み物は例の立川文庫がはじめだった。中学の入学試験を受けている頃に読み出し、夢中になつたあまり、とうとう入試に落第し

てしまつた」と言つてゐる。林芙美子も無名時代は、この文庫本にわけくれ、柴田錬三郎は「わしの文学素養のカナメは立川文庫であつた」と認め、進んで『柴錬立川文庫』をモノしていることは、周知のとおり。

中国文学に眼を通して久しい小生は、中国の三大奇書『三国志』『水滸伝』『西遊記』は、中国の説話師、いわゆる講談師のよみものタネ本だが、どうも立川文庫の執筆者「雪山山人」は、中国のこれらの講談本の翻案をしたように思われてならない。すなわち真田幸村は三蔵法師で、佐助、才藏が孫悟空、大食漢で好色な三好清海入道が猪八戒、他の面々が沙悟浄といった役割で、善玉悪玉の登場人物はそっくり水滸伝である。

ここで「講談研究」の文献を念のため拝借して、立川文庫なるものを紹介しておこう。

立川文庫は明治44年、『諸国漫遊一休禪師』がそのシリーズの第一号として出版された。発行元は大阪市東区博労町四丁目十三番地、立川文明堂。発行者は立川熊次郎。体裁はタテ12・5センチ、ヨコ9センチの小型本で、本文二二〇―二三〇ページ、六号総ルビ付でクロス張り七色装植で一冊25銭。ペストセラ―は、やはり真田三代記と真田十勇士。大正年間には、大阪船場の丁稚社会のアイドルで

あつた―と山本有三や吉川英治が書いてゐる。終りに川柳関係のコトも書いておこう。関西柳壇の奇才、住田乱耽は麻生路郎先生の大坂商大の後輩だが、彼の祖父は灘の酒屋の搬送請負業。素人相撲の大関を張つたが、文字にうとい。そのため、可愛い孫の乱耽が学校に上つた時、「この本を読んで学者になれよ」と買つてきて、どさりと乱耽の前に積み上げたのが立川文庫全巻百九十六冊だつたそう。堀口堯人さんがよくこの話をしてゐた。

寝屋川市民川柳大会

とき 11月3日(祝) 開場午後0時半

締切午後1時半

ところ 寝屋川市立総合センター4F

(京阪寝屋川市駅から京阪バス②で総合センター前下車)

兼題

「気」前 里 小路選

「チャレンジ」 河内 月子選

「育つ」 上田 佳風選

「ラッキ―」 西山 幸選

「今日」 奥山 晴生選

「のん気」 古川 一高選

「石」 橘高 薫風選

出句 各題とも2句(投句拝辞)

会費 1000円(入選句集代とも)

主催 寝屋川市川柳協会

後援 川柳ねやがわ

初歩教室

題一 味覚

阿萬 萬的

今月の課題「味覚」に対して、皆さんは余りにも正面から取り組み過ぎているためか、味覚という固い言葉が、句の雰囲気壊している場合が多かったように思われました。

投句の中で特に多かったのは母の味で

おふくろの味覚恋しい寢暮し

志華子

おふくろの味が恋しい寢暮し

美代子

盆掃省ぬか漬茄子の味覚恋う

美代子

亡き祖母の素朴な味覚捨てがたく

ミツエ

いつまでも懐かし亡母の塩加減

圭坊

おふくろの味覚をはめるかくし味

保夫

舌にとろりおふくろさんのかくし味

艶子

一流の味覚は知らぬ夕御飯

艶子

(一流の味は知らぬが母の味)

艶子

ふるふき大根母の味覚が身に沁みる

清柳

手料理へ心を添えて母の味

静子

ひと味に母の真心入れた椀

和子

(かくし味母の真心こもる椀)

手造りの味覚懐かし亡母憶う

太一郎

(手造りの味なつかしく亡母憶う)

秋茄子は嫁に食わずな、じやないが、

繁男

秋茄子の味覚伸よう嫁姑

繁男

秋茄子の味覚が違う姑と嫁

志華子

(秋茄子の味でも違う姑と嫁)

だが、若嫁さんには若嫁さんの味があつて

三世代母さん味を変えて盛る

彩子

若嫁は大根煮にも肉を入れ

呼風

薄味の家に嫁いでまるくなり

信義

家内安全妻の味覚に慣らされる

信義

(一家無事妻の味覚で明るい灯)

そして年老いてくると、兎角ねえ

時弘

歯を入れて覚えた味が变り出す

照子

この頃は味覚も变り老いを知る

明吉

年かしたらうす味料理に舌鼓

芳水

うす味に馴らす嫁はんいとおしい

芳水

(貴方もお齡なよと薄味馴らされる)

味覚にはうるさい父の冷やっこ

静子

うるさかった亡父の味覚の供物

章久

(うるさかった亡父へ供える秋の味)

秋にはおいしいものが沢山あつて

一乗

焼きたてのトウモロコシに秋の風

信一

秋の味それぞれ果実は持つている

信一

(秋の味それぞれ果実にある個性)

秋の味覚大地の恵み感謝する

ダン吉

(秋の味酒と大地に感謝する)

秋の味覚も遂によそから輸入され

円女

(秋の味さえも外国から輸入)

秋ともなると旅に出るのもまた

三津江

秋風へ味覚が誘う旅に出る

三津江

飽食の秋に味覚の食へ歩き

三美恵子

(味覚の秋私も旅に出たくなり)

幸せは味覚の旅の澄んだ空

敬

朝市の浜の味覚にとりつかれ

志重

(朝市に味覚をそそる魚がはね)

山の宿秋の味覚を盛って出し

高雄

(山の宿手造りという秋の味)

そしてこの頃では、味に匂がなくなつて

グルムブーム旬の味覚を忘れさせ

金吾

四季の味覚なくして育つハウス作り

光子

ハウス育ち旬の味覚を忘れさす

三千子

四季のない野菜の味覚忘れられ

由梨

(四季のない野菜に匂が忘れられ)

パイオテクノロジー旬をなくした味覚です

ダン吉

下五是。味にする。と軽く止めて見ては如

何。飽食時代のこの頃では、味が分からなくなりました。

味覚感飽食時代が邪魔をする

秀香

飽食に味覚音痴になり果てる

清柳

飽食の時世味覚が失なわれ

三村美恵子

新しく作句される方々は、兎角同じ所へ目
が向きやすいもので、句会などでは同士討ち
として、没になるケースが多いようです。

だが、日本料理にはやはり季節感が大切に
食道楽菜味色々旬を生き 康子

(食道楽菜味が活かす旬の味)

はじかみを添えて味覚の京料理 勝美

薄味で素材生かした京料理 圭坊

(薄味で目も楽しめます京料理)

冷や奴風鈴の音とともに食べ 信一

(冷や奴に風鈴の音と水の音)

天恵の味覚が誇り過疎の村 太一郎

せめてもの昔の秋を山で真産 しんじ

(真産敷いて昔の山の秋の味)

私たちのグルメもこの頃では国際的になり

海外のグルメ美味いと言う平和 ちず子

世界中の料理味わえる日本になり 登代

(エスニック料理平和な日本です)

グルメ日本味覚にうるさい舌が肥え 保夫

(グルメ日本味にうるさい舌となり)

バイキングの方へ曲つた帰り道 隆雄

(バイキングで一杯やらかと帰り道)

では最後に、もろもろのおいしさを届ける

ことにしましょう。

焼き芋を落葉に入れて母おもい 好笑

(落葉で焼く焼き芋の味くにの味)

静肅に味覚が決める酒の味 美恵子

(秋深く秋の味覚と酒の味)

田舎出を自認何でもうまい飯 信義

(ふる里にうまいものあり米の艶)

秋立ちて味噌汁二杯では足らぬ 喜与志

(秋立ちて味噌汁うまい朝の膳)

パーティの味覚どこもみな同じ 好笑

(立食パーティどこもおんなじ料理が出)

宅急便母の味覚をつめこんで 一枝

(ふる里の味覚が届く宅急便)

土用うなぎ僕の味覚を喰らせる ひでの

(味覚をそそる匂いも今日は土用丑)

城下町味覚はいつも焼団子 喜代子

(城下町に昔の味の焼団子)

無農薬野鳥が先に試食する 方子

(無農薬虫と野鳥が試食する)

お互いの味覚すれだし倦怠期 サワ子

(お互いの味覚もすれて倦怠期)

長屋王の味覚あれこれ木簡書 サワ子

(木簡出土天平の味よみがえる)

さぬき路に舌が覚えていたうどん 時弘

ままかりは瀬戸の夕陽に添う味覚 しづ子

お地藏さん甘さ押えたおはぎです すみれ

母が来てキリコの皿に盛る味覚 遊峰

梅干を持って海外旅行する 蛭拙

スーパリーの味に馴染んだ共稼ぎ 君江

美恵子

信義

喜与志

好笑

一枝

ひでの

喜代子

方子

サワ子

サワ子

時弘

しづ子

すみれ

遊峰

蛭拙

君江

食へ物に味が出てきて快復期
冷用酒寿司屋に早い秋がある

これでおいしいものの旬は終ります。いつ

も私が言うことですが、川柳は詩ですから、

できるだけ視野を広くして作品をつくってい

ただきたいと思います。

◇

題「湯豆腐」 10月10日締切(12月号発表)

宛先 〒569 高槻市桜ヶ丘北町3-19

ハガキに3句以内 辻 白漢子

川柳塔鹿野みか月結成

満9周年記念大会

とき 11月19日(日) 午前9時開場

ところ 鹿野町営国民宿舎「山紫苑」

兼題 「椿」 森中恵美子選

「うれしい」 小出 智子選

「声」 山田 止水選

「幸」 西山 幸選

「とんぼ」 長谷川博子選

「苦」 両川 洋々選

席題 1題 兼・席題とも2句

会費 1500円(欠席投句千円)

※その他、詳細は11月号に掲載

みね

治

西日本川柳大会

に参加して

八木千代



前夜からの雨は日野川をあふれさせ、四十曲峠のあたりではなんと凄しい雨脚。ところが、トンネルを抜け県境を越えたころから霧はゆつくり上り視界がひらけてくる。二万三千石の勝山は、城下町らしい風情で、小雨に煙った遠山が墨絵のように美しい。散策をうながすように空も晴れてくれ、おはぐろ蜻蛉が肩すれすれにとびかう野趣いっぱいの一刹

全身の細胞がいきいきしてくる。

「ハイ。コレマデ」というように、またも土砂降り。タクシーで駅へ。そこから林荒介さんの大型の車に乗り換え、院の庄から津山南へ折れて一路、久米南町へ。津山線の線路添いに、季に少し早い曼珠沙華の群落を見たと思っただのは幻だったろうか。

「睡蓮へ水もゆれてはならぬなり」――霧雨がまといついて、弓削平先生の句碑の肌はやわからなくなつかしい。そっと頬を当てて、「こんにはは。また参りました。弓削に到着した」という現実感がたしかなものになる。

荒介、瑞枝、垂弥、千春、そして私。色とりどりの雨傘を差すほどの模様でもなく、手に提げて弓削駅まで薫風先生、好啓先生方をお迎えに行く。ホームから手を高く振りながら両先生、智子さん、藤子さんのお顔もしばらくぶりの出会いに、「来てよかったな」としみじみ思わずにいられない。

「俺に似よおれに似るなと子进行」――この自然石の大きな句碑が建立されてから四十年。まるで子が生れ、孫が生れるように、つぎつぎと句碑の立つ弓削の山は、今や日本一の川柳公園として名高い。私は孫弟子になるわけだけれど、路郎先生のことを知りたい、学びたい。生前のお話を聞かせて頂きたい、いつでも胸の奥は涙で熱くなってくる。

奇童会長の感懐深い挨拶に続いて、長身で偉丈夫の町長さん(国忠泉さんとおっしゃる)

が立たれてあたたかい祝辞。「弓削の駅前にこの句碑のあることを非常に誇りに思う」と結んでくださり、そして、わが川柳塔の薫風先生。大正十五年の川柳雑誌合本を大切に抱えこむようにして碑の前に立たれ、雨のため駅舎の軒に移られ、改めて句碑に向き直る姿で師に語りかけられる。ベルトを腰から刀を抜くようにはずされ、俺に似よ俺に似るなと子进行」と彫金されたバツクルを披露、「いつか路郎師の心を継いでくれる次代の川柳家に譲りたい」としめくられる。

そして献酒の儀。碑の前に傘をさしかけてお供えされていた銘酒の樽「加茂五葉」の鏡割り。薫風先生、奇童会長のお二人が句碑にたつぷり捧げられる。そのあとに勿体なくも智子さん、瑞枝さんと三人で献酒させて頂く。「みんな飲んでくださいよ。樽があくまでは解散になりませんよ」と数々の肴も調えられていて参列者全員で乾杯。好啓先生も、双城さんも、サナエさんも、百合子さんも、福世さんたちも、みんなみんな川柳の輪につながる親しさと嬉しさに溶けこんで乾杯につぐ乾杯。とろりとろりと弓削の風に、九月二日の人の情けに和を醸してゆく。雨なんか気にならない。「来てよかったなあ。路郎先生の句碑の心になれることができてよかったなあ」と、これで何度目かのことはをつぶやく。弓削の皆さん。ほんとうにありがと。

(写真)前夜祭の奇童・止水・紫光の各氏)

いつも青春

林 瑞 枝

西日本川柳大会には毎年、参加させて頂いているが、大会場のあのほんわかとした雰囲気が好きで、親類に行くような気持ちで駆けつけている。今年は折り悪しく、天候に恵まれず、朝からの雨で、前夜祭は屋内で行われ、卓上に飾られた薔薇の花が、明るく微笑んで迎えてくれていた。宴もたけなわとなり、皆が久方振りの出合いを祝い、特に久米南町の町長さんの酌いで下さった絶倫の酒とかいう「まむし酒」には、いささか酔っていた。

舞台では、「海の男はよさう」と歌が弾んでいた。はすかいのテールで梶原サナエさんが、両手を上げて万歳。「北の漁場」と「まぶたの母」の曲が流れ「これが浮き世と言うものかあ」と小笠原双城さんの歌声に、聞き惚れていた。カラオケは、「裏町酒場」「ひと酒」が歌われ、小出智子さんと佐藤藤子さんが肩を並べ、愉しく私も乾杯を繰り返していた。「男三代」の歌が終わったら、ここで川柳塔社も負けちゃおられないと、佐藤藤子さんが勇気を奮い起こして舞台上に上り、透き通るような可愛いソプラノで「おてもやん」の歌を披露され、拍手・拍手。「フランスのおて

もやんみたいだったねえ」と薫風先生がにこにこ。

ハーモニカの巧い人がいて、「東京音頭」と「みちずれ」の曲が流れると、観覧席も急に盛り上りを見せて大合唱となった。弓削川柳社の紫光さんが、「貝殻節」を歌おうと提案をされたので、八木千代・沢田千春・田中亜弥と私は舞台上に上り、思いきり歌った。その後で岡山のご婦人たちが、「瀬戸大橋音頭」を踊られたので、千代・千春と私は舞台上に駆け上り、踊りの輪に溶け込んで汗だくになって踊った。そして、「兎追いしかの山」と肩を組んで、全員が輪になって歌い、まるでお伽の国の幻影の中でローソクの灯を見詰めながら夜の別れを惜しんだ。

明くる九月三日、第四十一回西日本川柳大会は、長島氏の司会で始まった。「心の足跡を残すために、心の味方を増やそう」とのお言葉が、私に印象的に残った。日本は今や長寿社会を迎えて、生涯教育が重要となっている。

是非とも川柳を広げよう。そして川柳の森を作るべく努力していると浜野奇童氏の弁さわやか。わが主幹の西尾葉先生の祝電を胸をふくらませて聞いた。

川柳大会の披露は小出智子選「偲ぶ」で始まり、さすがに尚香の花の選者だけあって、礼儀正しく美しくにこやかで、わが社の誇りであった。

亡父の匂いが少し残っている帽子
橘高薫風選「遊ぶ」の天位は、嬉しいことに佐藤藤子さんであった。

遊んだあと風呂の広さが淋しいな
新家完司選「午後」は、堂々と落ち着いて披露され、貫禄十分であった。

長い午後義眼を洗いたくなった
大会の総合点二位は千代さん、続いて川柳塔社から藤子さんが入賞された、目度度く桶を獲得され、拍手を受けた。

逃げ切れぬ列 父もいる兄もいる 千代
神様に会いたくて鶴は渡るのです 荒介
午後の陽へ二度目のおしめ干してやり 亜弥
子定には無いけど海が風いで来た 秋女
遮断機も神の子定の計らいか 瑞枝

柳会が終わってから、川柳公園を尋ね、桜の樹の下に苦むしてきた私ども夫婦の二つの句碑を眺めていた。苦田ダム・奥津浜を通り、人形峠を越える頃には、夕陽が雲の峰に赤くぼっかりと顔を見せていた。

(写真)句碑前の千代・智子・瑞枝の各氏



柳翁二百年忌記念
川村好郎氏を偲ぶ会

本社 九月句会

九月四日(月) 午後六時

メンズフアッションセンター

今月の句会は、川柳の始祖である柳翁二百年忌を記念し、あわせて奇しくも昨年この日に亡くなられた川村好郎氏を偲ぶ会として開かれた。

正面には、中島小石さんから寄贈された川柳翁絵姿の軸が掲げられ、また、好郎門下生有志が編んだ川柳句集『遍歴』から抜粋した小冊子と粗供養が参会者に配られた。

おはなしは高杉鬼遊氏。句集の中から路郎選初入選の「特配の米で鮮して秋祭」はじめ戦争中の句、サラリーマン生活を詠んだ句、夫婦・男女の句など、さまざまな作品を紹介しながら、どنگり川柳会・大萬川柳会ほかの句会を通じて多くの後進を指導し、大きな愛情で包みこんだ亡き師の横顔を偲んだ。

初出席は叶岡史風(大阪市)稲葉星斗(枚方市)広屋利通(吹田市)の三氏。月間賞は林瑞枝さんが獲得した。

(進行)岳人 (受付)年代・藤子

(記録)射月芳・みつ子 (清記)楓楽

出席者 房子・喜風・颯云児・恭昌・白濱子・福本英子・正坊・勝美・薰風・佳秋・すすむ・悦郎・眉水・茂茂津・悟郎・武庫坊・年代・文字・寿美・凡九郎・鬼遊・千步・勝晴・柳英子・冬葉・紫香・小林英子・杜的・重人・礫・公一・月子・天笑・東雲・満津子・典子・史風・白峰・幸・狸村・柿木英一・美幸・千秀・金太・隆二・トメ子・藤子・利武いわえ・みつ子・楓楽・章・庸佑・萬的・静歩・たず子・三男・憲太郎・文秋・星斗・利通・光代・登志代・笛生・射月芳・章久・小路・吸江・絹子・柳太郎・栗・弥生・昭子・美代子・一三三・片上英一・英千子・雀踊子・柳伸・元紀・度・智子・頂留子・寿子・安藤寿美子

席題「月」

河内月子選

うっかりと月をまたいだ水たまり 頂留子
見栄を切る男の背なにも月無情 狸村
月冴えてます後悔はせぬように 重人
満月に枯れた心をなぐさめる 悦郎
まるい月子狸酒を買いに来た 雀踊子
老い二人肩を寄せ合うおぼろ月 悟郎
萩すすき月の光も冴えてくる 小林英子
名月や母の居らない庭でらす 笛生
お月さんが許してやりなと言っではる 杜的
お月様が見ると言えは子が笑い 文秋
お月様へ逆らうような空模様 小路

ロケットに月の情けは判らない
宿直のひとりに惜しい月夜
満月のお渡り雨戸開けておく
事故現場へ無情に月が冴えわたり
飲みましよう月がとっても青いから
月満ちてひとつの命声をあげ
見え隠れ二人の後をつける月
お月さん家まで送って下さいな
月光が罪の深さを問い詰める
アベックにあてられたのか月細る
裏道で誰かが月を責めていく
月の夜は行先告げず妻の留守
晩酌をまた追加する月の冴え
まんまるい月で喧嘩を中止する
三十五階の隣も月を褒めている
面影りの背に満月がまた巡る
独り言月に漏して晴らす胸
世の中はなるようになる昼の月
どこまでも月はふたりをつけて来る
夜泣きをば互いに月を褒めて食べ
逢いにゆく姿を月に笑われる
お月様にはめてもらった未完の絵
満月や秋には秋の実が熟れる
もう一度恋しに見たい月きれい
昼の月はない恋のように浮き
野暮な月すつと二人について来る
月満ちて欠けて独りの飯茶碗
仲直りしたかと覗く夜半の月
これからのドラマ知ってるお月さん

狸村 颯云児 年代 萬的 眉水 射月芳 東雲 満津子 みつ子 金太 紫香 佳秋 柳太郎 美代子 美幸 天笑 光代 正坊 年代 柳太郎 三男 千歩 幸 笛生 いわゑ 美代子 寿美 みつ子 昭子

人間は水の泡だと見てる月
ウクレレに合わせて踊る月の夜

席題「許す」 柿本英一選

苦心した初段の免許額に入れ
一枚のハガキで許すこともある 福本英一
三振へ監督黙って笑うだけ
許さねば私もきつと駄目になる
許すとは言わぬ老父から来る為替
許してと流す涙の透明度
どうしても許すと云えず干すグラス
孫の顔見たくて許す気になった
アウトロー許してマザーグース病む
割り込みを許す無事故の免許証
表向きだけは許したことにする
金釘のゴメンナサイの文字に負け
少し早く許し過ぎたか玉子割る
行革は口先ばかり許可認可
許されぬことが時効になつてくる
許すとは言えぬ明治の咳払い
許す気である先生の肚を読む
許しても憎しみ入れる袋ない
ゆっくりと許してあげることにする
なんと許して亡母は峠を越えたや
無条件に許し非行の種を蒔く
許してはもらえぬ墓の花替える
許す気であるのに鳥へ戻らない
許す気になった煙草を深く吸い
拇印だけで済ましてくれた軽い罪

昭子 月子 星斗 福本英一 利武 みつ子 佳秋 絹子 雀踊子 元紀 天笑 柳伸 絹子 憲太郎 笛生 柳伸 庸佑 利通 年代 武庫坊 笛生 紫香 柳太郎 紫香

許されたわけがこの頃わかりかけ
許されぬ恋は民話として残り
簡単に許して愛が冷めている
何もかも許すと眠り深くなる
眼の黒いうちに許してもらわねば
美しく許す言葉を考える
許すのは橋を渡ってからにする
意地張って居るがおいしいお茶を入れ
許される距離で想いを抱いている
気を許す犬と話していたピエロ
ラッシュユだから許しているが長い髪
日記には許すととうに書いてある
許す母許さぬ父もバランスだ
許し合つて墨絵になつてゆく夫婦
みんな許してきれいな骨になりました
遠花火男に少し気を許す 楓 幸
兼題「珈琲」 宮西弥生選

モカの香に酔つてる独身貴族とか
珈琲と人を愛してベレー帽
一杯のコーヒーからのお付き合い
ブラックをひとり飲んで恩師の忌
揺れている気持コーヒー知っている
モーニングサービスはせぬ珈琲店
珈琲二杯君と僕との未来など
しぶちゃんの課長で珈琲も奢らない
珈琲の味がわかり出したは失恋後
珈琲よ今日から私ひとりです
珈琲も冷えて二人の無言劇

年代 萬的 典子 三男 登志代 佳秋 満津子 満津子 萬的 冬葉 千歩 年代 幸 雀踊子 射月芳 射月芳 射月芳 隆二 史風 太茂津 眉水 楓 光代

珈琲通から見れば砂糖を入れ過ぎる
珈琲店マスター無口な方がいい
マドンナの珈琲館が逃げ場です
眠られぬ珈琲ばかりのせいでない
アメリカン大人の恋になりそうだ
ブラックで今日は飲んでるチビた靴
おいしいコーヒー狭い階段のぼらされ
コーヒーは冷えてしまつて乱気流
人生の午後は一人でアメリカン
珈琲館出てから噂風になる
珈琲からわたしの朝が動きだす
白壁の町で珈琲店探す
初恋も別れも同じ喫茶店
お喋りの続きを持つて喫茶店
ブラックコーヒー長いまつげの娘がひとり
珈琲はブラックとても甘いひと
コーヒーのんで別れる街の小さい秋
珈琲をおんなの部屋で飲んでいる
コーヒーの味にうるさい舌がある
珈琲を安いと思うことはない
人間の香り溢れて珈琲店
モーニングコーヒーが匂うモデル地区
ブラックで飲みはる何かあつたよだ
僕をしばらく行方不明にする珈琲
珈琲よ王座に甘えすぎないか
ここからは心は許さない珈琲

ひざかけの柄もつれしい川下り
兼題「川」 河内天笑選

文秋 寿美子 柿本英一 美幸 柿本英一 勝美 佳秋 頂留子 楓 金太 笛生 杜的 笛生 萬路 小路 鬼遊 雀踊子 鬼遊 美幸 萬的 凡九郎 年代 片上英一 弥生 英壬子

手を振れば手を振り返す川向う
濁流のはたで長閑に露天風呂
サプちゃんもひばりも好きな川がある
秋の川原言葉のいらぬ人と居る
小川には小川のリズム糸とんぼ
川ひとつへだてて税の安い果
川縁りに住んで雨あし気にかかり
ネオン川じゃばゆきさんが泣いている
天の川ボージャー通過気付いたか
川の流れるようにアンプ生きてゆけますか
天の川ことは結婚してやるぞ
川上へ登れば逢える桃太郎
河内弁聞いて流れる大和川
川上で美味しいはなし聞いてくる
浮き草のため息洩れるネオン川
人間が病ませて死んでいった川
平成を乗り切る父と子の川だ
訥弁の父に背負われ川渡る
廻行した鮭へ多弁な川となる
思い上りの風に川幅見失う
向い合う私と川の長いとき
川いくつ渡れば自分みえるだろう
橋のない川を渡った愛である
ひとりでは渡りきれない天の川
あやまちを川は流してくれませぬ
川はジグザグわが哀愍の歲月と
それからの川人間と喋らない
四面楚歌小さな川がとび越せぬ
汚された川を流れる花のウツ

吸江 小路 片上英一
三男 武庫坊
雀踊子
月子
トメ子
金太
岳人
射月芳
千秀
千代
妻子
瑞枝
柳太郎
寿美
小鹿
楓楽
史風
東雲
柿木英一
重人
美代子
章久

向う岸ばかりに群れる赤とんぼ
川を渡ると人聞くさい街がある
川濁り他人ばかりの街となる
橋のない川でカヌーを漕いでいる
手をそれた毬が流れて行った川
流れ藻のわたしを抱く川の幅
案内図から消えた小川が吠えている
鮭帰りおんな多弁な村となる
川下で真っ正直に生きている
恋をして川へ洗濯しに行こう
花火師に魂があり川炎える
あぶくぶくぶく叫びつづける街の川

兼題「村」
笠原吸江選

青い目の花嫁が来る過疎の村
過疎守のお婆と仲のよい鳥
廃屋も一役買った村おこし
村を出る覚悟片道切符買う
村おこし帰って来たのは与作だけ
村おこし里の便りは寄付のこと
餓鬼大將今は村長で好々爺
原発の抜きに慣れてオラが村
大阪に一つ残った村守る
彼岸花燃えてる村の無人駅
親離れ子離れ村の鎖守さま
村長も役場もみんな身内です
アメリカの狙いに村は眠れない
婦人票村史を愛える事が起き
破つてはならぬ掟が村にある

福本英子
幸
柿木英一
武庫坊
たず子
幸
寿子
荒介
諷云児
岳人
弥生
天笑

射月芳
柳宏子
柳太郎
柳太郎
佳秋
典子
恭昌
利通
眉水
笛生
太茂津
元紀
章
射月芳

岸和田市文化祭参加 第39回市民川柳大会

日時 10月22日(日) 正午開場

場所 岸和田市市民会館地下会議室
おはなし

兼題 「練習」 西田 柳宏子

「凍る」 小出 智子選

「ぶつぶつ」 中田 たつお選

「割引」 阿萬 萬的選

「熱」 野村 太茂津選

「一杯」 橘高 薫風選

席題 (1題当日発表) 河内 天笑選

兼・席題とも2句
(出句は出席者に限る)

締切り 午後2時

会費 500円(大会誌・記念品呈)

呈賞 文化祭賞・文化祭奨励賞・文化
協会賞・操子賞・きしせん賞

主催 岸和田市柳会

後援 岸和田市教育委員会

岸和田市文化協会

岸和田市文化協会

村の阿呆はとてモカラスと仲が良い
村を出るためのせりふを考える
電話線村に続いているんだね
八瀬童子小さな村に有る誇り
農協に頭上らぬ村長さん
大学へやると村には帰り来ず
山あいの村へ書けない作家来る
あべのから村に帰れば河内弁
村越えてまた村こえて伊勢神楽
案山子にもブランド着せて村は秋
犯人を追う刑事へ村は貝となる
聞かないで村へは帰れない訳を
与作のおらぬ村には帰る気がしない
この村を忘れずに来る赤とんぼ
ちちははを村へ残している負い目
祭り笛村が一つに燃え上がる
この村から社会党は出なかつた
村はずれ子安地蔵に傘がない
帰省して村の素直な風にあう
村役場への便り勝手本もらうだけ
この村に生れて村の嫁になる
僻村の土になりたい母が居て
タムの底民話とともに村ねむる
村の暮わたしはここで眠れない
村はずれ地蔵も年をとり給う
なにも無い村だが温い風が吹く
開拓の村満洲の昭和悲史
男なら村では死ぬぬ向う疵
幸せはわたしに帰る村がある

村の地蔵よ帰れぬ事情があるのです
一億円宙に浮いてる村おこし
ある日ある時無口になって村捨てる
開票は待たずに決まる過疎の村

磯 幸 荒介 小林英子 隆二 女

兼題「遍歴」 西尾 菜選
一処不在雲の流れる山頭火
ふくよかな山田五十鈴の男達
寅さんのあんな人生楽しかろ
遍歴へさすが艶ある隠し芸
遍歴を問われ影武者蹴躓き
女遍歴言いたいことはたとある
遍歴の画布は季節を秋にして
遍歴の数だけ鈴を持って
遍歴なんてとんと之無く御座候
まだ色気あつて遍歴しています
敗戦の遍歴がある父の杖
遍歴のきり絵ちぎり絵貼り絵かな
終のすみかで遍歴おもう雲は秋
遍歴の度に子供が増えてゆく
遍歴の果て住みついた吹き溜り
遍歴の過去を語れば枯すすき
遍歴であんなただの梯子酒
遍歴のところどころに句読点
遍歴が続く情けに逢いたくて
かと言って人生遍歴にげられず
遍歴に白いページが少しある
遍歴の噂人間できてます
遍歴が多彩になつて途中下車

新正子 寿美 みつ子 佳秋 紫香 荒介 利通 女 雀踊子 公一 射月 年代 憲太郎 新正子 光代 瑞枝 栗

兼題「遍歴」 西尾 菜選
遍歴の果て見直した吾が家の灯
遍歴の噂が着ぶくれて帰る
遍歴をした庖丁に味がある
花袂恋の遍歴ふり返る
遍歴の男が帰る兎小屋
遍歴の果てに洞門掘りつづけ
遍歴の日記にしみる蕎麦の味
遍歴の腕が次第に錆びてくる
遍歴の女が歌う子守唄
遍歴の遊び心へ伸ばす髭
女遍歴ない大臣にすげ替える
初恋を入れると十人目の女
振り向けば遍歴の跡白々し
遍歴の情けにすぎる津軽三味
遍歴の論吉が帰るお仏壇
遍歴の過去は問うまい薄い眉
遍歴のお伽話をしてあげる
遍歴のはては土の捜索隊

兼題「遍歴」 西尾 菜選
遍歴の果て見直した吾が家の灯
遍歴の噂が着ぶくれて帰る
遍歴をした庖丁に味がある
花袂恋の遍歴ふり返る
遍歴の男が帰る兎小屋
遍歴の果てに洞門掘りつづけ
遍歴の日記にしみる蕎麦の味
遍歴の腕が次第に錆びてくる
遍歴の女が歌う子守唄
遍歴の遊び心へ伸ばす髭
女遍歴ない大臣にすげ替える
初恋を入れると十人目の女
振り向けば遍歴の跡白々し
遍歴の情けにすぎる津軽三味
遍歴の論吉が帰るお仏壇
遍歴の過去は問うまい薄い眉
遍歴のお伽話をしてあげる
遍歴のはては土の捜索隊

柳伸 三男 吸江 寿美 柳伸 笛生 英千子 美代子 美幸 小鹿 敬 紫香 公一 幸 年代 元紀 房子 杜的 寿美子 いわゑ 風云児 敬 千代 重人 弥生

川柳塔社常任理事会(9月1日)
▽平成元年度路郎賞ならびに川柳塔賞選定。
▽川柳塔社同人物故者のための塔はその名称を「川柳塔」とし、11月12日、開眼式を挙行することを決定。
▽大阪川柳人クラブ初代会長の故金泉萬楽氏の句碑建立に協力することを申合せ。
▽同人総会に提案する役員改選案について検討、原案を決定。
▽川柳塔社同人規約の改正について検討。

新正子 寿美 みつ子 佳秋 紫香 荒介 利通 女 雀踊子 公一 射月 年代 憲太郎 新正子 光代 瑞枝 栗

兼題「遍歴」 西尾 菜選
遍歴の果て見直した吾が家の灯
遍歴の噂が着ぶくれて帰る
遍歴をした庖丁に味がある
花袂恋の遍歴ふり返る
遍歴の男が帰る兎小屋
遍歴の果てに洞門掘りつづけ
遍歴の日記にしみる蕎麦の味
遍歴の腕が次第に錆びてくる
遍歴の女が歌う子守唄
遍歴の遊び心へ伸ばす髭
女遍歴ない大臣にすげ替える
初恋を入れると十人目の女
振り向けば遍歴の跡白々し
遍歴の情けにすぎる津軽三味
遍歴の論吉が帰るお仏壇
遍歴の過去は問うまい薄い眉
遍歴のお伽話をしてあげる
遍歴のはては土の捜索隊

兼題「遍歴」 西尾 菜選
遍歴の果て見直した吾が家の灯
遍歴の噂が着ぶくれて帰る
遍歴をした庖丁に味がある
花袂恋の遍歴ふり返る
遍歴の男が帰る兎小屋
遍歴の果てに洞門掘りつづけ
遍歴の日記にしみる蕎麦の味
遍歴の腕が次第に錆びてくる
遍歴の女が歌う子守唄
遍歴の遊び心へ伸ばす髭
女遍歴ない大臣にすげ替える
初恋を入れると十人目の女
振り向けば遍歴の跡白々し
遍歴の情けにすぎる津軽三味
遍歴の論吉が帰るお仏壇
遍歴の過去は問うまい薄い眉
遍歴のお伽話をしてあげる
遍歴のはては土の捜索隊

柳伸 三男 吸江 寿美 柳伸 笛生 英千子 美代子 美幸 小鹿 敬 紫香 公一 幸 年代 元紀 房子 杜的 寿美子 いわゑ 風云児 敬 千代 重人 弥生

川柳塔社常任理事会(9月1日)
▽平成元年度路郎賞ならびに川柳塔賞選定。
▽川柳塔社同人物故者のための塔はその名称を「川柳塔」とし、11月12日、開眼式を挙行することを決定。
▽大阪川柳人クラブ初代会長の故金泉萬楽氏の句碑建立に協力することを申合せ。
▽同人総会に提案する役員改選案について検討、原案を決定。
▽川柳塔社同人規約の改正について検討。

新正子 寿美 みつ子 佳秋 紫香 荒介 利通 女 雀踊子 公一 射月 年代 憲太郎 新正子 光代 瑞枝 栗

兼題「遍歴」 西尾 菜選
遍歴の果て見直した吾が家の灯
遍歴の噂が着ぶくれて帰る
遍歴をした庖丁に味がある
花袂恋の遍歴ふり返る
遍歴の男が帰る兎小屋
遍歴の果てに洞門掘りつづけ
遍歴の日記にしみる蕎麦の味
遍歴の腕が次第に錆びてくる
遍歴の女が歌う子守唄
遍歴の遊び心へ伸ばす髭
女遍歴ない大臣にすげ替える
初恋を入れると十人目の女
振り向けば遍歴の跡白々し
遍歴の情けにすぎる津軽三味
遍歴の論吉が帰るお仏壇
遍歴の過去は問うまい薄い眉
遍歴のお伽話をしてあげる
遍歴のはては土の捜索隊

兼題「遍歴」 西尾 菜選
遍歴の果て見直した吾が家の灯
遍歴の噂が着ぶくれて帰る
遍歴をした庖丁に味がある
花袂恋の遍歴ふり返る
遍歴の男が帰る兎小屋
遍歴の果てに洞門掘りつづけ
遍歴の日記にしみる蕎麦の味
遍歴の腕が次第に錆びてくる
遍歴の女が歌う子守唄
遍歴の遊び心へ伸ばす髭
女遍歴ない大臣にすげ替える
初恋を入れると十人目の女
振り向けば遍歴の跡白々し
遍歴の情けにすぎる津軽三味
遍歴の論吉が帰るお仏壇
遍歴の過去は問うまい薄い眉
遍歴のお伽話をしてあげる
遍歴のはては土の捜索隊

柳伸 三男 吸江 寿美 柳伸 笛生 英千子 美代子 美幸 小鹿 敬 紫香 公一 幸 年代 元紀 房子 杜的 寿美子 いわゑ 風云児 敬 千代 重人 弥生

川柳塔社常任理事会(9月1日)
▽平成元年度路郎賞ならびに川柳塔賞選定。
▽川柳塔社同人物故者のための塔はその名称を「川柳塔」とし、11月12日、開眼式を挙行することを決定。
▽大阪川柳人クラブ初代会長の故金泉萬楽氏の句碑建立に協力することを申合せ。
▽同人総会に提案する役員改選案について検討、原案を決定。
▽川柳塔社同人規約の改正について検討。

新正子 寿美 みつ子 佳秋 紫香 荒介 利通 女 雀踊子 公一 射月 年代 憲太郎 新正子 光代 瑞枝 栗

兼題「遍歴」 西尾 菜選
遍歴の果て見直した吾が家の灯
遍歴の噂が着ぶくれて帰る
遍歴をした庖丁に味がある
花袂恋の遍歴ふり返る
遍歴の男が帰る兎小屋
遍歴の果てに洞門掘りつづけ
遍歴の日記にしみる蕎麦の味
遍歴の腕が次第に錆びてくる
遍歴の女が歌う子守唄
遍歴の遊び心へ伸ばす髭
女遍歴ない大臣にすげ替える
初恋を入れると十人目の女
振り向けば遍歴の跡白々し
遍歴の情けにすぎる津軽三味
遍歴の論吉が帰るお仏壇
遍歴の過去は問うまい薄い眉
遍歴のお伽話をしてあげる
遍歴のはては土の捜索隊

兼題「遍歴」 西尾 菜選
遍歴の果て見直した吾が家の灯
遍歴の噂が着ぶくれて帰る
遍歴をした庖丁に味がある
花袂恋の遍歴ふり返る
遍歴の男が帰る兎小屋
遍歴の果てに洞門掘りつづけ
遍歴の日記にしみる蕎麦の味
遍歴の腕が次第に錆びてくる
遍歴の女が歌う子守唄
遍歴の遊び心へ伸ばす髭
女遍歴ない大臣にすげ替える
初恋を入れると十人目の女
振り向けば遍歴の跡白々し
遍歴の情けにすぎる津軽三味
遍歴の論吉が帰るお仏壇
遍歴の過去は問うまい薄い眉
遍歴のお伽話をしてあげる
遍歴のはては土の捜索隊

柳伸 三男 吸江 寿美 柳伸 笛生 英千子 美代子 美幸 小鹿 敬 紫香 公一 幸 年代 元紀 房子 杜的 寿美子 いわゑ 風云児 敬 千代 重人 弥生

川柳塔社常任理事会(9月1日)
▽平成元年度路郎賞ならびに川柳塔賞選定。
▽川柳塔社同人物故者のための塔はその名称を「川柳塔」とし、11月12日、開眼式を挙行することを決定。
▽大阪川柳人クラブ初代会長の故金泉萬楽氏の句碑建立に協力することを申合せ。
▽同人総会に提案する役員改選案について検討、原案を決定。
▽川柳塔社同人規約の改正について検討。

新正子 寿美 みつ子 佳秋 紫香 荒介 利通 女 雀踊子 公一 射月 年代 憲太郎 新正子 光代 瑞枝 栗

兼題「遍歴」 西尾 菜選
遍歴の果て見直した吾が家の灯
遍歴の噂が着ぶくれて帰る
遍歴をした庖丁に味がある
花袂恋の遍歴ふり返る
遍歴の男が帰る兎小屋
遍歴の果てに洞門掘りつづけ
遍歴の日記にしみる蕎麦の味
遍歴の腕が次第に錆びてくる
遍歴の女が歌う子守唄
遍歴の遊び心へ伸ばす髭
女遍歴ない大臣にすげ替える
初恋を入れると十人目の女
振り向けば遍歴の跡白々し
遍歴の情けにすぎる津軽三味
遍歴の論吉が帰るお仏壇
遍歴の過去は問うまい薄い眉
遍歴のお伽話をしてあげる
遍歴のはては土の捜索隊

兼題「遍歴」 西尾 菜選
遍歴の果て見直した吾が家の灯
遍歴の噂が着ぶくれて帰る
遍歴をした庖丁に味がある
花袂恋の遍歴ふり返る
遍歴の男が帰る兎小屋
遍歴の果てに洞門掘りつづけ
遍歴の日記にしみる蕎麦の味
遍歴の腕が次第に錆びてくる
遍歴の女が歌う子守唄
遍歴の遊び心へ伸ばす髭
女遍歴ない大臣にすげ替える
初恋を入れると十人目の女
振り向けば遍歴の跡白々し
遍歴の情けにすぎる津軽三味
遍歴の論吉が帰るお仏壇
遍歴の過去は問うまい薄い眉
遍歴のお伽話をしてあげる
遍歴のはては土の捜索隊

柳伸 三男 吸江 寿美 柳伸 笛生 英千子 美代子 美幸 小鹿 敬 紫香 公一 幸 年代 元紀 房子 杜的 寿美子 いわゑ 風云児 敬 千代 重人 弥生

川柳塔社常任理事会(9月1日)
▽平成元年度路郎賞ならびに川柳塔賞選定。
▽川柳塔社同人物故者のための塔はその名称を「川柳塔」とし、11月12日、開眼式を挙行することを決定。
▽大阪川柳人クラブ初代会長の故金泉萬楽氏の句碑建立に協力することを申合せ。
▽同人総会に提案する役員改選案について検討、原案を決定。
▽川柳塔社同人規約の改正について検討。

新正子 寿美 みつ子 佳秋 紫香 荒介 利通 女 雀踊子 公一 射月 年代 憲太郎 新正子 光代 瑞枝 栗

兼題「遍歴」 西尾 菜選
遍歴の果て見直した吾が家の灯
遍歴の噂が着ぶくれて帰る
遍歴をした庖丁に味がある
花袂恋の遍歴ふり返る
遍歴の男が帰る兎小屋
遍歴の果てに洞門掘りつづけ
遍歴の日記にしみる蕎麦の味
遍歴の腕が次第に錆びてくる
遍歴の女が歌う子守唄
遍歴の遊び心へ伸ばす髭
女遍歴ない大臣にすげ替える
初恋を入れると十人目の女
振り向けば遍歴の跡白々し
遍歴の情けにすぎる津軽三味
遍歴の論吉が帰るお仏壇
遍歴の過去は問うまい薄い眉
遍歴のお伽話をしてあげる
遍歴のはては土の捜索隊

兼題「遍歴」 西尾 菜選
遍歴の果て見直した吾が家の灯
遍歴の噂が着ぶくれて帰る
遍歴をした庖丁に味がある
花袂恋の遍歴ふり返る
遍歴の男が帰る兎小屋
遍歴の果てに洞門掘りつづけ
遍歴の日記にしみる蕎麦の味
遍歴の腕が次第に錆びてくる
遍歴の女が歌う子守唄
遍歴の遊び心へ伸ばす髭
女遍歴ない大臣にすげ替える
初恋を入れると十人目の女
振り向けば遍歴の跡白々し
遍歴の情けにすぎる津軽三味
遍歴の論吉が帰るお仏壇
遍歴の過去は問うまい薄い眉
遍歴のお伽話をしてあげる
遍歴のはては土の捜索隊

柳伸 三男 吸江 寿美 柳伸 笛生 英千子 美代子 美幸 小鹿 敬 紫香 公一 幸 年代 元紀 房子 杜的 寿美子 いわゑ 風云児 敬 千代 重人 弥生

川柳塔社常任理事会(9月1日)
▽平成元年度路郎賞ならびに川柳塔賞選定。
▽川柳塔社同人物故者のための塔はその名称を「川柳塔」とし、11月12日、開眼式を挙行することを決定。
▽大阪川柳人クラブ初代会長の故金泉萬楽氏の句碑建立に協力することを申合せ。
▽同人総会に提案する役員改選案について検討、原案を決定。
▽川柳塔社同人規約の改正について検討。

新正子 寿美 みつ子 佳秋 紫香 荒介 利通 女 雀踊子 公一 射月 年代 憲太郎 新正子 光代 瑞枝 栗

兼題「遍歴」 西尾 菜選
遍歴の果て見直した吾が家の灯
遍歴の噂が着ぶくれて帰る
遍歴をした庖丁に味がある
花袂恋の遍歴ふり返る
遍歴の男が帰る兎小屋
遍歴の果てに洞門掘りつづけ
遍歴の日記にしみる蕎麦の味
遍歴の腕が次第に錆びてくる
遍歴の女が歌う子守唄
遍歴の遊び心へ伸ばす髭
女遍歴ない大臣にすげ替える
初恋を入れると十人目の女
振り向けば遍歴の跡白々し
遍歴の情けにすぎる津軽三味
遍歴の論吉が帰るお仏壇
遍歴の過去は問うまい薄い眉
遍歴のお伽話をしてあげる
遍歴のはては土の捜索隊

兼題「遍歴」 西尾 菜選
遍歴の果て見直した吾が家の灯
遍歴の噂が着ぶくれて帰る
遍歴をした庖丁に味がある
花袂恋の遍歴ふり返る
遍歴の男が帰る兎小屋
遍歴の果てに洞門掘りつづけ
遍歴の日記にしみる蕎麦の味
遍歴の腕が次第に錆びてくる
遍歴の女が歌う子守唄
遍歴の遊び心へ伸ばす髭
女遍歴ない大臣にすげ替える
初恋を入れると十人目の女
振り向けば遍歴の跡白々し
遍歴の情けにすぎる津軽三味
遍歴の論吉が帰るお仏壇
遍歴の過去は問うまい薄い眉
遍歴のお伽話をしてあげる
遍歴のはては土の捜索隊

柳伸 三男 吸江 寿美 柳伸 笛生 英千子 美代子 美幸 小鹿 敬 紫香 公一 幸 年代 元紀 房子 杜的 寿美子 いわゑ 風云児 敬 千代 重人 弥生

川柳塔社常任理事会(9月1日)
▽平成元年度路郎賞ならびに川柳塔賞選定。
▽川柳塔社同人物故者のための塔はその名称を「川柳塔」とし、11月12日、開眼式を挙行することを決定。
▽大阪川柳人クラブ初代会長の故金泉萬楽氏の句碑建立に協力することを申合せ。
▽同人総会に提案する役員改選案について検討、原案を決定。
▽川柳塔社同人規約の改正について検討。

新正子 寿美 みつ子 佳秋 紫香 荒介 利通 女 雀踊子 公一 射月 年代 憲太郎 新正子 光代 瑞枝 栗

川村 好郎 50句

川柳句集「遍 歴」から

伊子緋妻へ撰るのも旅なれや
特配の米で鮓して秋祭
敗戦を知るや知らずや庭の菊
一億特攻消えダンサー大募集
読みたくもあり読みたくもなし敗戦記
もつと早う来いと集金断られ
むさんこに辞めたい日なり喫いつづけ
歯車の一つと思う朝を出る
有難いありがたいと無料の仕事ばかりして
まだ六十もう六十のむつかしさ
寝て起きるこれも一期の旅のうち
あきらめてすむ心配は知れたもの
喜んでもらう多忙をうれしがり
七十は七十なりの歩道橋
精一杯生きた枯葉に心置く
古木にも新芽 老眼鏡を拭く
育つもの育てるものか人も木も
窮すれば通ず通じてからわかり
世相どう変りゆくとも円い月
夫婦茶碗どちらも欠けていて平和
暗黙のルール夫婦は失わず
妻にさえ心と別な言葉撰り
子供等が待っていますと妻の文
あんたかてくどうまつせと 妻
ロマンスシート誰に会おうと妻と旅

手袋の片手のような妻であり
昨日を忘れ今日をゆるして夫婦なり
おじいちゃんに妻にも呼ばれぬてたがり
午後からの微熱妻にも話すまい
夜のない夫婦になつても夫婦なり
思い出の道は避けたし通りたし
さてとなれば逃げる卑怯を男持ち
わたしでは不足でしょうと酌いでくれ
うしろから見るべきものか 女
したいことみなしてせっかち先に逝き
道問えば女一足後へ寄り
春雨へ女房と濡れるあほらしさ
飛び入りへ刺身一切れずつ減らし
上座よりうっかり先に箸を割り
退屈な巡査に違反ひっかかり
桜なら堺刑務所いま見頃
川田順みてみなはれと励まされ
試作品として長男に生まれ
お隣のピアノも暑いものうち
居たい人帰りたいひとと通夜の席
古稀だなど思う日もありペンを置く
結局はひとり旅人わかりかけ
誰にでも聞く自動ドアだから嫌い
もう少し生きるつもりで辞書を買う
ありがたく残務果せと喜寿給う

第15回堺まつり協賛

堺市民川柳の会

とき 10月15日(日) 午前10時開場
ところ 堺市総合福祉会館

(5階大研修室)

兼題 「はじまり」 藤井二三選
席題 「飾る」 池 森子選

「リゾート」 久保田元紀選

「祭」 後藤 正子選

「にっこり」 岩内 外吉選

「走る」 竹山 逸郎選

「酔う」 橘高 薫風選

出句締切 正午 各題2句 投句拝辞
秀句呈賞・会費 1000円

(昼食・作品集呈)

連絡先 河内天笑方 堺川柳会

堺市堀上緑町二丁九一

☎ 〇七三二・七八・四七〇六

第36回八尾市文化祭

八尾市民川柳大会

とき 10月22日(日) 正午開場
ところ 八尾文化会館4F 第1会議室

(近鉄八尾駅下車 西武バート東隣)

会費 1000円(呈作品集・鉢植花)

兼題 「絆」 高田 律子選

席題 「地」 小西 幹斉選

「川」 伊藤 定子選

「王」 大路 美幸選

「矢」 卜部 晴美選

「花」 龜山 恭太選

締切 午後1時(各題2句吐)

懇親宴 3000円(希望者のみ当日受付)

主催 八尾市・八尾市教育委員会・

八尾市立公民館

後援 八尾市民川柳会

東大阪市文化祭参加

第17回東大阪市民川柳大会

日時 10月29日(日) 正午開場

出句締切 午後1時半

会場 東大阪市立社会教育センター3階

東大阪市長堂2-38

(近鉄布施駅北へ5分)

電話 〇六一七八九一四一〇〇

「川柳のあるべき姿」

永田 帆船氏

宿題 (各題2句 出席者に限る)

「挑む」 一階八斗酥選

「源氏物語」 久保田元紀選

「肩」 杉森 節子選

「詩」 野村太茂津選

「鬼」 墨 作二郎選

「走る」 西田柳宏子選

「紳士」 龜山 恭太選

席題 1題 当日発表 金本不二夫選

賞 各題秀吟賞・賞状・楯・発表誌呈

会費 1000円

主催 東大阪市文化連盟

東大阪市民川柳同好会

後援 東大阪市民川柳同好会

東大阪市民川柳同好会

東大阪市民川柳同好会

東大阪市民川柳同好会

東大阪市民川柳同好会



1人1句、原則として30句以内、各句会ごとに秀句を精選してご投稿ください。
毎月25日締切厳守。 担当・玉置重人

城北川柳会

神夏磯典子報

おいしいと食べる息子に励まされ
胃を痛め筋の味忘れたり
蠅に身をかわされ叩いた手がしびれ
衣ずれの気配を感じ正座する
リクルート線なき家の小判草
女らしい笑みを残して母は逝き
そつとしておいたわりと気がつかず
気疲れて味のわからぬフルコース
はた餅を入れる器が欠けていた
大物と器違えば騒がれる
首相席座ったばかりにスキヤングル
落第児へ大器晩成賭けている
したたかに幾山河越え喜寿迎う
極細の筆鮮やかな年賀状
一〇三小遣いくれと孫が言い
情報過多へ話す言葉を選っている
花一輪そえた器が生きている
女教師の麦藁帽へ赤トンボ
恩人を踏み台にして女翔ぶ

寿美礼 ふみ
テルミ きみ子
みさ子 輝子
文子 白峰
秀夫 閑石
敏子 午郎
登美子 静歩
新一郎 達子
きくゑ 春雄
静子

大空へ大器召されて悲しい酒
気骨ある男は言い訳などしない
気がつけば引き返せない位置にいる
みんな違ふ地図で見つけるユートピア
冷コーへ愚痴をとこした昼下り
細い目をまた細くする孫が来り
虚しく哀れひばりが空に消え
気の合った友と四方山刻忘れ
台本の無い人生を模索する
美しい足跡残す靴を選ぶ

川柳化粧櫛

植村客遊子報

飲めぬ口義理の二次会三次会
丸く住むために嘘を少し交ぜ
平等に切っているのに二男の眼
一言を呑みこんでおく老いの知恵
記念碑の側で更生誓わされ
公園のベンチで負けをかみしめる
百貨店トイレを借りただけのこと
やれやれと言うてるように入日落つ
老人会巾旗で頑固のけじめつけ
いたむきに蜘蛛も生きている糸を出し
雨続き蛙も満足鳴きませず
誘われて来ても果せぬ恋の道
札儀作法教えぬままに娘は嫁ぎ
タイガース三連勝は無理でしょう
突然の雷潮に電話切る
消費税嫌ですネーと眉ひそめ
空いたバス話のつづき持って乗り
自己主張押えて掛ける寡婦の椅子
名ばかりの強き母なり古稀近し

市郎 史風 典子 満津子 純子 温子 倫子 よし子
公一 右近 岳詩 サワ子 大鷹 輝月 越山 悲子 秋月 葉香 紅葉 虹石 悟虹 春華 文子 好花 鈴代 はつ子 遊光 遊峰

年金で饅どん食べて今日も暮れ
読み合せ原稿通り違うてる

久世川柳クラブ

二宗 吟平報

二度の子になつてかごめの輪に入る
亡父描いた絵だから僕に語りかけ
チギリ絵に心の思いはり合わせ
読みのきく孫に将棋を挑まれる
遠来の客に母さん標準語
潤れる事知らぬ泉の母の愛
チャリテイの愛の泉に灯を灯す
泉水の鯉も我が家の数に入れ
山峡の景観絵になり詩になり
平均寿命統計局に保障され
足下を読んだ啖呵の酔うている
泉から叱られている汚れ水
こんこんと愛の泉をもつ乳房

東大阪川柳会

森下 受論報

わがままな姫に滅びた城もある
一幕の夢かも知れぬ姫と逢う
老妓にも秘めた想いの姫鏡
片仮名の絵本が読めるお姫さま
豊かさ揺さぶられて来る悪魔
豊満な乳房を狐児は忘れない
石仏むごい歴史を知っている
豊かさの陰で自然が泣いている
貧乏でも心が豊かだった過去
都合よく曲げた歴史に踊らされ
一本杉村の歴史を知り尽し
真実はひとつ歴史へ意見割れ

永楽 客遊子 甫正 半仙 志重 美恵子 江山 伊久栄 秀香 邦人 贊平 吟平 山人 保恒 外吉 雅士 作二郎 恒明 湖風 慶三 頂留子 晋吾 白屯 孤舟 庸佑

唯一人判を捺さない意地をもつ
母一人村を捨てないつるし柿
思い出し笑い女ひとりの夢芝居
余生など忘れる唄で一人酌む
末席のひとりが反旗持つている
面影が泣き上戸にしたひとり酒
連敗に涙の乾き知らぬ意地

むらくも川柳会

藤井

明朗報

柳宏子
信治
章久
滋啓
美子
喜隆
風

汗を拭く見上げる峰はまだ遠い
汗水を流した祖父の田圃継ぐ
大手振り信じる道を歩いてる
汗ふいて乳ふくませる野良の風
年金の下りて楽しさ倍になる
雨の音聞きつつ昼寝夢さそ

慈雨であり豪雨ともなる梅雨末期
晩酌が楽しみ父は上機嫌
太陽のおかけ昼寝に風呂がわき
自転車はやめて歩くぞ若い意気
およばれの刺身カラシに汗をか
雨雲が垂れて歩幅を早めさせ
汗を拭く素顔の君が美しい

川柳塔わかやま

牛尾

緑良報

一円もしっかり抱いてる父の汗
耐えている握り拳に滲む汗
汗の香が寡黙な父によく似合う

仲子
島子
鶏生
武葉
一衛
正朗
芳子
明朗

裕美
紀美女
光代

父の汗息子すなおに農を継ぎ
叩かれた肩から明日が冷えてゆく
叩かれた傷より疼く叩いた手
ちくはぐに手を叩いている反対派
悠然とただ叩かせている自信
叩かれた数が気楽かも知れぬ
叩かれた数だけ恩を受けている
上官の命で叩いて叩かれた
許せゆるせと鐘を叩いて悔いばかり
家宝にまで手を付けた三代目
寶石に無縁な指に土を嗅ぐ
土用干し家宝の刀で素振りする
過ぎ去れば絵になる過去は宝です
手も足も縛られ宝島に着く
子宝と育てて今は袖にされ
拍手多数石ころ一つ流される
善玉が多数の波にさらわれる
一株で多数が喋る総会屋
からくりは多数の中にある秘密
合縁奇縁多数の中の唐がらし
数の力でも言う城を拜ませられ
蓋を開ければ淋しがり屋が多過ぎる
多数から抜けて海鳴り聞いている
多数決さくらも交じる敵もいる
多数決たかが女と見た不覚
多数決やっぱり母に味方する
石仏の丸さを風も叩けない

金太
栄美子
保州
高夫
公博
正博
三男
忠雄
太茂津
鉄治
アサ
瑞穂
克香
桂香
凡太
信秋
照子
好笑
守忠
豊太
寿子
輝子
登志代
信子
千寿子
緑良

静岡市川柳塔同好会

永倉

僕川報

平和の灯分かち続けて趣味を積む
英霊が無言の意見する軍備

弧秀
晃授

独り居の病に臥せて困り果て
言葉には出さず頑固を妻に託び
自他共に頑固で通る果報者
意見より離婚が先となる世相
広告に騙されて買う特効薬
此処だけの話飛び火で燃えている
だんだんと陽差しを逃げる立話
経を読む修業僧の声若し
息を呑むドラマ涙をくれてやり
子にかけた夢はむなしく逃げて行く
富士登山天人となるいい日和
身にしみたあの日の意見忘れぬ
金魚すくい厚い儲けは薄い紙
追われても虫は逃げる空がある

猛士
金吾
正雄
たま
たき
きん
まつ
千代
静代
久子
房江
僕川

佳句地10選

(前月号から)

牛尾 緑良選

お人好しばかり乗ってる泥の舟
終着のホームに残る女傘
いたずらに触れてはならぬさくらんぼ
竹とんぼ祖父の話を超して行く
惚れた弱味長い廊下を歩き出す
枯れるのが怖くて走り続けている
有望な男誤算も持ち歩く
忘れっぽくて人は誓いをくり返し
飽食の果ての茶漬に凝っている
空をとぶゆめをにわとり見ているかも

みつ子
一弥
正坊
荒介
竹雪
竹芳子
艶子
頂留子
凡子
小四史子

草笛を器用に吹いて兄妹
踏んばって自分らしさを取り戻す
朝顔の生長日記母がかく
駐在と並んで歩く村の道

川柳塔唐津支部

久保

正敏報

叱られて家系図にあるペソをかき
小遣いを上げてと姉妹決起する
時計屋の時計百個の顔を持つ
蚊も色気あるのか若い肌が好き
台風が土用の部屋を密封し
今宵咲く一夜のうたげ月下美人
土曜夜市金魚のヒレに消費税

三幸川柳教室

桜井

千秀報

竹筒の重さ楽しむ貯金箱
節目から竹は命をふきかえす
祖母の手に素直に曲がる竹細工
若竹の伸びに自由な明日がある
火吹き竹泣いてた亡母の後ろ髪
一病を宥めすかせる竹を踏む
札束に無縁明るく日を送る
札束で買えぬ笑顔で迎えられ
札束が夢の電車に乗ってくる
真っ直ぐに生きて札束寄り付かず
札束の嵩へ行員無表情
札束を持って寂しく猫と住み
札束に無欲な父の花バサミ
窓口で札束あつさり処理される
肩書を捨てたらステテコ好きになる
ためらいを捨て逢いにゆく紅を差す

とおる 美智子 暢子 紫香
四郎 高明 旭恒 虹汀 幸夫 正敏
千秀報 美子 茜 育子 正秋 玉枝 高夫 当梨 晏子 幸子 千秀 好笑 美子 智水庵 和子 靖子

捨て猫を抱いてきた子の瞳に負ける
ゆるせない男はばつさり捨てようか
ソプラノを捨てて少年脱皮する
捨て鉢な心に出会う羅漢の目
捨て難い味でまだ着る紺紺
ほどほどの美女であちこちもてている
自画像はすこし美人に書いておく
クラス会美女の隣が空いている
娘も二十美人ぶってるうす化粧
でもやはり美人でいたい三面鏡
わたくしの鼻では歴史変えられぬ

川柳塔きやらばく

政岡日枝子報

鉄治 かなめ 保州 孝み 可笑 結実 桂香 千枝子 公子 朱夏 保子 朗子 登栄 智加恵 千春 恵子 富美子 八重子 日枝子 田鶴 寿々子 亜弥 亜弥 花子 瑞枝 正子

慌てるなきつと私の影の角
野火とゆく女の夢に慌ててる
一人が慌てみんな判らぬまま走る
ふとよぎる余白の色に慌てだす
灯がゆれる旅の終りをふと想う

川柳泉尾

吉川

寿美報

より子 やえ 千代 玲子 美代子 三千代 マリ子 途子 良子 敦子 伴子 恵美 靖子 義一 治子 文子 悦子 シメ子 克行 淑子 白水 美津子 洋子

狂い咲き目につばいの花菖蒲
一点が狂えば沈むマトを引く
順番が狂って虹の絵が未完
繰り返す一人言狂ったのは智恵子
喝采を遠く裏方汗光る
生きている事確かだろっ吾が息子
ひとり身のベースつかんでクチも出す
葱坊主ひとりひとりの天を持つ

三 世
シ マ 子
ト ミ 子
美 子
弘 子
和 子
功 子
寿 美

わかあゆ川柳会 松本はるみ報

ほのめかすつもりで石を蹴ってみる
キューピット残念ながら二日酔い
青梅をばっしと噛んだ日の若さ
ほのめかすだから世間がさわぎます
口車残念ながらのせられた
この人に残念だったと言わせまい
手の中がわからないからほのめかす
青梅がほんのり恋をしています
ほのめかしておいて反応待っている
ひけらかす程でもないがとほのめかす
ほのめかす言葉がほしい影法師
青梅も酔っぱい世相噛みしめる
桁ちがいが残念ながら歯がたため

鈴 江
恵 美 子
か つ 子
ヒ デ 子
好 栄
は る み
聖 子
智 重 子
歳 栄
民 子
白 李
清 泉
白 汀

川柳塔とつとり 岩原 番水報

二次会は今日の子定に入れてない
退院の子定嬉しい荷をまとめ
いい顔をして請求書回される
中国の顔スピードで処刑する
こんな顔でも良いからとらわれた
横向いた顔の一人が反旗持つ

多 可 志
喬 水
秀 和
友 夫
一 枝
帆 雀

それでいいのか鏡の中の顔に聞く
裸になって話すつもりが腹割らぬ
老いの目に裸のギャルがまぶしすぎ
出直しの裸へ風が冷たすぎ
泥水を飲んだところで夢が醒め
甘い水流して蜚呼んでみる
貰い水おんなの唄が張ってある
睦まじい夫婦へデマが水を差す

いさり火川柳会 尾崎三代治報

結ばれる出会いとなったアルバイト
バイトして社会のことを少し知り
アルバイト蝶ネクタイがゆがんでる
アルバイト銭の尊さ肌で知り
台所薄刃の音で朝が明け
七輪も居すわっている台所
家族の和台所から育てられ

京都塔の会 松川 杜的報

かんとんに紐かけ母の荷が届く
誘惑にのろうか枕の前の自尊心
お百度に森のガラスが騒がしい
騒ぐだけさわいで孫は寝てしま
恋人のうつり香を抱くそは枕
大騒ぎさせたと本人思つてす
断ち切れぬ絆へ枕裏返す
ポケットで小銭が騒ぐ消費税
教会の鏡にざんげがしたくなる
座布団を折って昼寝の仮枕
陰画紙のような炎天鳴る踏切り
騒いでも無駄だが意地は見せておく

圭 一 郎
呼 風
砂 山 花
由 多 香
新 風
旋 風
山 人
艶 子
智 恵 子
三 代 治
豊 子
由 多 香
孝 子
武 士
伊 都 子
求 芽
和 友
杜 的
麗 水
年 代
紫 香
美 智 子
芳 子
諷 風 児
圭 坊
福 子
白 溪 子

脳味噌の目方知ってるそば枕
目の高さ変えて騒ぎの渦にいる
マルクスにかんかんだった時もある
浮気もの枕は誰とでも眠る
ばんそうこう腕白坊主と仲が良い
父さんが心を許す膝枕
睡蓮が控え目に咲いてた菖蒲園
自信喪失じ父母の夢ばかり見る
切株で星を見ている山の精
バーゲンセールを出れば疲れがどつとでる
借りた本そのままにあり落ち着けず
女性軽視また大臣が騒がせる
ご近所にスターが住んでいる騒ぎ

西宮北口川柳会 松本 一郎報

七人の敵が美人で困ってる
美人にはつい採点が甘くなる
私の広告は妻がしてくれる
老母元氣仏花いつでも新しい
宇宙界で地球は汚点かもしれず
三回忌あお百点の妻だった
反論をいっばい溜めている無口
墓参りすませワイワイ西瓜割る
百点の妻の男は気にならる草ぼうぼう
よそさまでことは気になる草ぼうぼう
北口のチャイム鳴ってる待合せ
広告の通り瘦せた怖くなる
一点に愛憎溜まる倦意期
真夜中にうろつく癖は聞いてない
来世へ旅発つ点となるいのち
南無妙法蓮華経でストレス解消し

い わ ゑ
保 蔵
伊 三 郎
杜 的
宣 子
光 代
園 歩
握 夢
よ し 津
江 美
武 庫 坊
英 子
柳 伸
浩 一 郎
し げ お

妥協癖風の吹くまますくなくびく
背伸びする癖は故里捨ててから
雑草よお前もほしかり花言葉

錠剤のききめは問わぬことにする
センサーにわたしのくせをおぼえさす
広告を派手にはしない老舗です
姑が美人で嫁の来てがない

放浪の癖がまた出たうちの猫
ガキ大将とあわだち草は仲がよい
点描のモネ七色の詩を描く
接点が錆びてつながらない夫婦

右下りの書体に愛が透けてくる
父の日に鼻かぜをひく癖がある
又靴を買うささやかな贅である
百点の妻を指摘して米をとぐ

雑草の花でも気高く咲いている
この癖があなたをあなたらしくする
人嫌い雑草むしる父の背
姑の居間ときどき洩れるひとり言

広告のティッシュペーパーなら貰う
川柳たけはら
森井 菁居報

おにちゃんいつもいじわるくやしいな
しゃん玉みたいにいふわとびたいな
シナリオへ少うし見栄を入れておく
お国自慢へ長老の弁舌えてくる

弱り目にたたり目吹き矢とんでくる
父の日よ独りの父に小豆煮る
砂時計の砂の流れを見ていたり
大会で会う約束の旅の女

香子
蘭
美智子
きよ子
はつ絵
眉水
元秋
佳紀
萬的
金太
静子
正一
芳子
（河）
紀雄
京童
諷云児
紫香

ラブソング老いらくの恋燃やそうか
粗品進呈客はそんなに甘くない
さわやかな忠告だった墨をすり
今日は雨じや一人静かに柳誌よむ

春夏秋冬たくくピアノに季節感
行き届く嫁の看護の手の温み
まだ少し嫁らしくと髪洗う
補聴器に内緒話は止めとこう

親馬鹿が宅急便に詰めてある
世話好きと言われても我が歩く道
私の海にはひょうたん島があり
女らしい女に出逢う夢二の絵

人恋しくなつて来ました水枕
赤いバラ怖いものなどありません
ワープロで打つ原稿の字は言わぬ
ふるさとの軒で風鈴錆びている

降りるしかない階段に立っている
こたわりを捨てると少しずつ肥る
通わせたい心ひとつを抱いて発つ
風葬もよからう若葉の中にいる

ひろしまの子です原爆許せない
尼崎いくしま川柳会
春城
年代報

しきたりがそのまま生きて祭り済む
仕来りに均等法はそっぽ向く
仕来りを破り手に手を取っている
仕来りを無視して祭る盆供養

刀匠の仕来り水にある生命
離婚歴仕来りたつた一つだけ
家計簿にやすらぎ続く卵の値
風神の怒りか飛行機事故続く

一枝
愛子
栄恵
ヤスエ
浪子
喜美子
喜久恵
勲
俊夫
麻代
康子
博子
房子
淑子
一路
新造
静風
笑子
伸子
政巳
のぼら

いい夢の続きは明日に取つておく
童話するつづきつづきと眠らない
明日もまた踊る浴衣を壁に吊る
良い事が続きアルバム重くなる

多数決を信じた蟻がまだ続く
夏帽子ふたりで歩くところが
中流の意識でかぶるゴルフ帽
白線帽あが青春に悔い多し

草臥れているが思い出持つ帽子
仕来りの眠るダム湖を照らす月
魚拓から生きる望みを知らされる
つつましく生きて女の薄化粧

簡単に帽子脱げないわけがある
クモの糸きれいな畏が張つてある
隠しごとありそう豆腐の白い顔
思い出がこぼれ始める旅みやげ

不幸続きの庭ひとところカンナの朱
尼崎尾浜川柳会
春城武庫坊報

朝顔の花で勇みの靴をはく
朝顔が咲いているのにもめている
朝顔のやさしい笑みに亡母がいる
情熱を浴衣にかけてネオン街

浴衣を着てすし天婦羅でワングフル
大文字加茂の河原を浴衣色
入退院お盆三日は家の床
国訛り盆の列車は温い

盆近くなると自然に川が澄み
おはら節心ゆだねて風の盆
新盆の墓がきれいに飾られる
武庫坊

諷云児
保蔵
定人
園歩
作二郎
紫香
堯
正坊
白溪子
伊三郎
久美子
静夢
みち子
美智子
敬
英子
年代
十四郎
六浦
義智子
義嗣
弘治
澄子
いわお
石舟
夢之助
佳秋
清太
紫香

迎え火へゆつくり仏降りて来る
骨切りの音さえ女洗い髪
水墨の河童親父の顔に似る
事故現場立つ地蔵さん新しい
ムリ言えは優しい文で断られ
万両は淋しがりやと寄せて植え
玉すだれ女本懐遂げている
連れ合いが逃げて無口になるインコ
本心が酔いがまわってヒョイと出る
上品に食べると美味くない西瓜

八尾市民川柳会

飯田 悦郎報

売る人も買う人も汗かき氷
熱の子に氷持ち寄る路地の愛
ほおばればこめかみ痛いシャーパー
甲子園氷どころでないピンチ
子の寝息そつとつかがい氷割る
しみついた帽子に残る胸の傷
ひと夏のドラマを知っている帽子
帽子買う妻もこの夏翔ぶらしい
へボ作家ほどベレー帽良く似合う
バスガイド帽子をぬぐとすずす弁
かなしい日は帽子をすこし深くする
登山帽脱ぐところが蟬しぐれ
葬いが済んで身内は飲んで散り
聞き飽きた愚痴も楽しい飲み仲間
忙しい母さん背中でものを言う
ひよつとこの面が背中で寝る夜店
背開きにされて鱧にご難の日
背中にも気遣いながら老いの耳
それ以来背中間の眼を感じ

定人 美代子 敏之 向西 保蔵 たく 歌子 すみ 寅之助 武庫坊

頂留子 喜風 重人 春堂 弘直 三男 比沙胡 一志 悦郎 度 泰 雅士 朝子 晋吾 美代子 正好 柳安子

母が怒るとしゃんと伸びている背中
浮気ばれ何時も背中を向けられる
半額につられてオーバーする予算
半額にせよと颱風やつてくる
花火半額もうこおろぎが鳴いている
半額セール消費税はおまけなし
オバタリアン半額のチラシ胸に抱く
半額のグイヤ遠い距離がある
半額のチラシが財布を呼びにくる

打吹川柳会

奥谷 弘朗報

山開き富士ことのほか雪の山
騙された七ツ釘も敗戦記
冷静になって気付いた勇み足
楽しみは明日のプランへ目が冴える
灯明が揺れると亡父の声がする
まだ十年死なぬ気で書く遺言書
再会の出来ぬ息子と夢で会い
追伸に私突き刺す細い文字
ためらわず終章と書く自叙伝に
美しい嘘を並べて罵作る
石室やしはし羅漢と向かい合う
仕合せ過ぎて女にある不安
天安門奇々怪々を昨日今日
送り火のあたりをさまよう母虫
税制はひつたりよりスリがよい
善人の仮面ころがる枕元
わらべ唄聞える窓を開けて置く
慣れすぎて空の青さを忘れかけ
返り血を浴びて栄光への出番
おどりこに口説の極意合わせつ

幹齊 東雲 和子 美幸 柳伸 宏子 隆章 とみを

早苗 妻子 白峰 温子 雄々 柳風 梅朗 典子 杜的 原兆 寿美子 雀踊子 静歩 紫映 善政 紫泉 紫み子 節子 三和

台風が大国日本恥部さらす
運命の星を使命に変えて生き
無人駅美容は夏を忘れない
ユーモアの解られぬ人へ気が疲れ
才能におぼれ犬かきしています
お祈りが終ると酒が欲しくなる
善悪も分け合いないが妻と住む
幸せは老いの職つ軽い足
潮時を心得ている苦勞人

大原川柳社

小林 妻子報

一夜潰して代役の幕あける
欲待へ遠来の友酔いつぶれ
青い毬弾んで老母を慌てさせ
原爆忌花も草木も黙祷す
相愛の相手へ手綱放さない
世渡りが下手で一步もゆすらない
墓掃除私の勤めと感謝する
万燈のどこらあたりか亡母の旅
廃校のいちように語る午後風の風
糠味噌に家族が和む朝の膳
ひまわりに諫められたる昼寝起き
切り口上吐いて引つ込みかぬ顔
気が付けば幸せ過ぎる絵の中に
優しさを宝に寡婦という輪廻
猿真似も出来ず約束してしまふ
妥協した男の意志は崩れない
こぼれ種花咲く夢を抱いている
捨て石になって未来を信じ切る
お手玉を縫って老化をカバーする
立秋へ芒は秋を忘れてす

宗光 邦俊 弘朗 佳女 小鹿 仙岳 勝見 弘子

あすなろ 正子 ひでの 寿恵子 みさえ 睦子 こぶゆ 敏子 たけよ 悦江 理瑛 朝代 智泉 宮子 辰子 玉恵 みづえ 妻子

川柳大阪

中原比呂志報

踏み出した一歩夢あり敵も居る
 代読の祝詞めがねをかけなおす
 道一つ早く曲つただけ孤独
 玄関に朝は主役の父の靴
 年を経て幼稚に戻る趣味一つ
 向い風わたしを試すように吹く
 人間の尊厳奪つ人べらし
 文明の汚染で包む青い星
 生きているイノチが汚染生むそうナ
 七色のネオン汚染の川でゆれ
 奪い合つボール一つに血がたぎる
 大臣のいすは各派で奪い合う
 命まで奪つて中国孤立する
 順風を逆風にした鉄砲玉
 風鈴の音色重たい熱帯夜
 ロボットにシヤネルの香りわかるまい
 畳替え香り新たな気力生み
 虫籠はからでも楽し夏休み

南大阪川柳会

中川 滋雀報

父の時計は父を忘れぬためにある
 おもいでが詰つて鳴らぬオルゴール
 柳行李亡母の想いが断ち切れず
 古里の愛着旨い井戸の水
 大形ゴミへ愛着残る古机
 ふるりに愛着があり祭笛
 愛着を断たねば天井落ちてくる
 愛着の靴とは知らず犬は噛み
 息子より娘に辛くなりすぎる

洛 醉
 重人
 与呂志
 雅果
 金太
 正之
 凡九郎
 本蔭樺
 希久志
 幸一
 美津留
 柳弘
 鉄心
 喜楽
 比呂志
 作二郎
 柳伸
 喜風
 勝美
 慶三
 トミ子
 正好
 藤子

辛い目にあつて大きくなれました
 母だから辛い答を出している
 朝帰り辛い味付け待つて居る
 逆縁の別れが辛い釘の音
 耐えられる奴と見込んで辛い点
 入社十年こんな水をあけられる
 うまきまの差があらわれる老い日々
 生きたいとみんなにその差つけた神
 筆順を正しく書いて病んでいる
 正しいと信じこんでるから怖い
 正しいと信じて旗を振っていた
 黒いから黒いと言つて飛ばされる
 正と邪を裁く一票持つている
 目つぶしの金で正しさ見失い
 正しさを守つて生きる難しさ
 六法のなさけに光る朝の露
 太陽のなさけに光る朝の露
 風のなさけ雨のなさけを知る農夫
 ワンマンでなさけにもいとこ惚れ
 なさけなや女の知恵に踊らされ
 一喝に父のなさけが熱くなる

サークル檸檬

新開千代女報

君と僕中味の違う汗拭う
 必勝のうちわゆれける甲子園
 いも掘りをいっち喜ぶ都会の子
 掘り当てた胸に咲いてた赤いバラ
 店ざらしうちわの出番夏祭り
 うちわからたらちねを呼ぶ風がくる
 鬼面彫る手は傷ついて傷ついて
 掌に汗を握りツムライリユージョン

頂留子
 智子
 和子
 章久
 公一
 重人
 楓楽
 凡九郎
 冬葉
 庸佑
 恒明
 度
 寿美
 新造
 しんじ
 憲太郎
 柳宏子
 文秋
 久子
 覚然坊
 滋雀
 今日子
 美子
 千代女
 雅子
 三四子
 智恵子
 美緒
 登美子

無言電話根気の良さに負けました
 富柳会 池 森子報

雨やどりだけでも開く自動ドア
 冷えた手を温めてくれた母の胸
 ご対面自動とびらが開きます
 人生を堅く結んだ安堵紐
 紐みたいな男が見てる予想表
 久し振り初恋の入り沢山
 金のないのが集まって打開策
 狂い出す覚悟で開く玉手箱
 久し振り大文字の灯浴びて萌え
 心開いて幾星霜の距離うめる
 開かれた天皇からも税を取り
 久し振り妻をさきれいと思つ朝
 よく開く窓に噂が流れ込む

南海川柳会

飯田

悦郎報

小豆島二十四の瞳に海の色
 北方領土いつ還るのか海荒れる
 遠洋漁業海がますます遠くなる
 単身赴任今度は海を越せという
 戦争展の罪が七つの海にある
 お茶を汲み刑事盲点つてくる
 盲点を引き出してやる新社員
 盲点でゆくりうまい水を飲む
 盲点に人生の鍵おいてある
 盲点は妻の笑顔のゆれにある
 小形犬人に甘えるコツを知る
 ひと回り小形になった蛙の子
 台風は小型呑気な鬼瓦

泰子
 静枝
 昭水
 智久
 文次
 莊次
 維久子
 花梢
 美房
 岳人
 森子
 覚然坊
 憲太郎
 勝美
 庸佑
 元紀
 グン吉
 志華子
 重人
 凡九郎
 佳秋
 しづ子
 甘平
 凡子

小形でも菊を咲かせた秋の天
 オクタンカ色分けをするドラム缶
 秘密持つ二人が抱えている符号
 親子して符号にはげむブラモデル
 野暮天で愛の符号を読みとれぬ
 棟上げの部材部材にある符号
 悪企み男の部材を借りにくる
 借りた金倍に活用難しのぎ
 一円の活用税の足しに生き
 活用が未熟でブラン流される

豊中もくせい川柳会 田中

昔なら許しはせぬと祖父が言う
 昔々の嘶に孫は横を向く
 昨日のこのように昔が甦る
 想い出はなべて薄れる昔の事
 横丁に入れば昔のままの店
 針の座にいた母の昔を聞いている
 母の昔に西瓜の冷えた井戸がある
 着飾つてみても昔に戻れない
 シナリオを探しに入るピアガーデン
 枝豆のきれいな緑ビール注ぐ
 一杯目息もつかず飲むビール
 さりげなくビール酌している仲直り
 打つ人に打たれ敗れたなどと思つ
 敗れても仲良く帰る草野球
 敗れたが悔いは残っていない汗
 交渉に敗れたらしい靴の音
 敗者復活何で負けたか知っている
 引き立てる甘さを塩は知っている
 盆帰郷鉦山の土産は蝮酒

悦郎 東雲 柳伸 花仔 壮之助 信治 信博 喜風 真砂

正坊報

壽美子 薫風 智子 遅児 路児 きく子 作二郎 諷云児 つえ子 英子 登志実 正坊 紫香 とく子 白溪子 富子 しげお 明光 武庫坊

倉吉川柳会

渡辺

善句報

里

小路報

ハイビスカス強烈に咲く陽に向い
 春雷も気をきかしてランデブー
 宇宙船地球の外は強い風
 早口にまくしたてられ口きけず
 公園でひとり遊ぶ女の子
 一日を熱いコーヒでしめくくる

私にはアリアバイあるぞ巫山戯るな
 アリアバイの証拠に大きな穴を掘る
 水溜り飛ぶと平和な道がある
 小六卒の社長で肌があたたかい
 アリアバイがピアス一つで崩れ出す
 仲人の礼ふる里の米の餅
 六道の辻で私は迷つてゐる
 六三三少し方角すれてきた
 六十の舞踏シューズが軋み出す
 六十代燃えております汗もかく
 入院も六号室で安堵する
 お隣が礼にソックス置いてゆく
 アリアバイは私が作っておきました
 アリアバイに要る悪友で捨てられぬ
 田舎からオーイオーイと風が吹く
 田舎にはスイカを冷やす井戸がある
 目札をする土地蔵が呼びません
 礼服の方程式が解けません
 三顧の礼尽くして貧乏くじを売る
 父の樹へ礼儀正しく脱帽す
 花の数だけ女アリアバイ持っている
 平和っていいな赤紙も来ない
 生かされたお礼に温い飯を炊く

房吉 明吉 圭坊 登代子 博史 杜的 碧水 喜美子 きみ子 康子 よしえ とめ子 小鹿 満春 和枝 寿朗 秋人 幸枝 千代子 柳風 京子 ゆり子 はるお 康志 御前 あけみ 秋女 雄々

六道の辻で阿修羅と待ち合わせ
 タイエット六疋減らせと書いてある
 原発のゴミは田舎に捨てていく
 六法にはポルノのことは載つてない
 墓の下こそ本当の平和かな

信じきる力へかける飛行雲
 壁新聞の力はきつと巻き返す
 お力になりませいでと通夜の席
 招かざる客が一番飲んで去に
 お客さん扱いこそばうなつてくる
 容姿端麗鬼が住んでるとは見えす
 うるさいが姿見せぬと案じられ
 隅っこのひとりに突然からまれる
 引出しの隅っこの何かの鍵があり
 味方でも敵でもなくて隅に居る
 腕さすも自負に出番がやつてこず
 車椅子丈夫になつた腕力
 腕相撲だけなら父に勝つている
 腕前に安心して居るカンナ屑
 無駄のない力強さは橋の反り
 武力弾圧悲しい夢を見たものだ
 不意の客見事にさばく妻の腕
 珍らしい客に内孫愛想よ
 求人に容姿は触れぬ縄のれん
 天職で猫背になつたを悔いもせず
 四コマの漫画の隅にいる私
 父親の権威が隅に落ちていた
 利き腕を決して枕にはしない
 本当に怒ると女腕まくる

螢 かつみ 次男 独歩 苦句 憲太郎 元紀 眉水 悟郎 恒明 文秋 頂留子 度 萬的 笛生 射月芳 勝美 凡人 重人 白兔 作二郎 庸佑 幸治 章 覚然坊 雀踊子 金太 冬葉 比沙胡

長考のロケンの腕がだるくなる
数の力に三パーセントむしられる
妻の留守ちと持てあます女客

姿見に今日はレディーと言ひ聞かせ
振り上げた腕のやり場と目のやり場
隅っこでヒソヒソ話する喪服

岸和田川柳会

植山

武助報

忍の字で綴る女よ古いかも
酒を汲む器の浮気しています
女の手政治の色を塗り替える
未だ色香残して元は芸者とか
綴織り古都を飾るよ祇園祭
年金の足しに細ぼそ手内職
うれしさがあふれて母の目が細い
細かった昔を誰も信じまい
娘の部屋が灰色になる嫁いだ夜
市場籠高い安いと立ち話
もし酒が飲めたらいい事があり
細ぼそと貯めて子のない夫婦箸
取っておきの地酒目当てに友が来る
逢える日の鏡はとも好きな顔
横文字で綴られてる娘の日記
高い木の果実で熟れすぎではならぬ
言ひ訳のんだん細い声になる
自分史を綴ると修羅が甦る
輪の中でひとつの色を育てあげ

川柳藤井寺

高田美代子報

眼が笑う嫌いは好きと言うしぐさ
好き嫌い刻み込んでる母の腕
比呂志
隆

壯之助
晴生

月子
柳宏子
柳伸

喜久子
すみえ
浪速子
こう
希久子
通彦
狸村
富志子
一弥
勝晴
武助
射月芳
白光子
ひで
さよ子
初太郎
月子
甘平
天笑

あの人が嫌ひ少女の回り道
思い出がつかなくて八月は嫌ひ
ウインドは女心を惑わせる
窓の外近所の陰口ちりり聞く
人一倍淋しがりやの窓があく
八十八へまだ今日があり窓あける
明日あるを信じて窓のガラス拭く
期待かけ窓に位置する子の机
電話ベル独居は困る入浴中
また妻の愚痴が始まる給料前
衣食住足りて男手ない暮らし
釣糸の不始末に困っている野鳥
傘借りて来たのに夫の傘が待ち
美人不美人でも困る妻の顔
七面鳥特に困った顔でない
これなあに答えに困る孫の問い
子には子の理屈に困る母の耳
困った時話せる友がひとりいる
立前の困るは本音の困らない
困らないために残した金で揉め
儲かって困る話をしてみたい
阪神が負けたと女房言いに来る
私も姑に似て来たドッコイショ
空振りに終わらしたいバラ一輪
困る迄ほつて置きますしつけ糸
草笛の遠音を聞いて門に佇む
あれこれと噂の絶えぬ片えくぼ
四面楚歌嫌ひは嫌ひのまま通す

だましてた癌の夫へ墓で詫び

翠洋会

中西兼治郎報

与呂志
和子
三郎
繁男
敦子
治子
須美
信子
うめ
正枝
政代
和美
彩
修六
宗一
悦子
末一
寿美子
婦美枝
美房
吸江
祐二
昭子
伴子
きよし
雅美
志洋
美代子
兼治郎

ステテコのビールは妻に酌いでやり
ハンカチを二人分敷く中之島
あの方に別れのハンカチ差上げよう
秋風の音無き音をきく孤独
喉仏ゴクゴクおどる大ジョッキ
正直に詫びれば不問としたものを
偏西風乗って風船アメリカへ
談論風発夜空に酔った大ジョッキ
詫びにゆく靴に鎖がついてある
甲子園の涙ハンカチなどいらぬ
詫びに来て角が一本折れている
ハンカチ落し好きな子のとこだけおとす
奇声あげギヤル大ジョッキ傾ける
シャワーの背ひんやり秋の風となり
すぐ詫びる人で反省していない
ビール腹かかえて膝の医者通い
異議なしとピアカーテンへ回れ右
宿題はまだかと覗く秋の風
ハンカチを振った別離の過去もあり
かんかん照りビール会社が天拝む
かけそばを読むハンカチはすぐに濡れ

凡子
絹子
みよ子
恭昌
すすむ
正雄
東雲
英一
さと美
佳秋
為子
宏子
照子
良江
楓葉
綾子
光子
みつ子
登志実
いつを
鬼遊

日川協副理事長に西尾氏

日本川柳協会は九月九日、常任理事会
を開き、先の総会における会則改定にも
とづく人事として西尾葉・磯野いさむ両
氏を副理事長に選任した。西尾氏は大会
委員長、磯野氏は出版委員長を兼ねる。

柳界展望

集録一敏・武庫坊

★小出智子句集『露の臺』
発刊記念句会は8月13日、
なにわ会館で開かれ、88人
が参加し、盛会であった。

当日の各題秀句は次のとお
り。

ウインドの帽子と旅に出
たくなる 河内 天笑
一日が終る辞典の背を揃
え 中尾 藻介

玄関で魔除けの札に覗ま
れる 堀畑 靖子
美味しかった美味しかつ
たと皆帰り 河内 天笑
昔から寺町に咲く百日紅

田中 隆二

★第13回茗人忌川柳大会が
8月27日、鳥取工業福祉会
館「鴻南閣」で開かれ、阿
萬萬の氏のおはなしに続い
て本社から参加した黒川紫
香・野村太茂津・辻白漢子

氏らから兼題入選句の披露
が行われた。当日の各題秀
句は次のとおり。

枯野から苦惱をこえた風
の音 乾 隆風

いつか芽の出る日へ助手
の靴みがく 森田 熊生

引つ張った手を継母と思
わせず 小池しげお

貧乏性で値札を先に見て
迷う 恒松 町紅

逆転の槍は真綿の中にあ
る 武田 帆雀

でで虫に隠し通した愛が
ある 奥山美智子

童謡と帰る夕焼け美しい
乾 隆風

なお、大阪方面から参加
した一行は、前日の26日、



うみなり川柳会の熊生氏ら
の案内で鳥取砂丘・仁風閣
などを観光した。

★第13回・茗人賞が決定、
8月27日の茗人忌川柳大会
席上で授賞式が行われた。

▽茗人賞
歯を白く磨いて好きな歌
うたう 西原 艶子

▽準賞
薄味の弁当これも愛だろ
う 高田 芳子

トップ記事平和と愛で埋
めたい 大西 隆風

なお、佳作は松永つや子
木村春枝・近藤春恵・武田
帆雀・黒田くに子の各氏。

★ふあうすと川柳社は創立
60年を機に新組織を発足し
た。

会長 去来川巨城
主幹 藤本静港子
副主幹 泉 比呂史

同 田中 好啓
同 安川 一酔

同 齊藤 俊夫
同 島本 泰

同 赤井 花城

同 川柳みどり会

★JR津山線弓削駅前にあ

る路郎句碑の周囲はこれま
で噴水が出ていたが、水洩
れがひどく、早くから整備
が急がれていた。今般、句
碑建立40周年を機に、久米
南町の今年度予算に改修費
が計上され、去る7月、駅
前地区有志の勤勞奉仕もあ
って立派に完成し、数十本
を植樹し、面目を一新した。
(浜野奇童氏報)

★川柳みどり会は、次の要
項で第7回誌上ハイライト
の作品を募集している。

課題Ⅰ「歌」雑詠
各題5句、計10句連記

選者・橋高薫風・須田尚美
大森風来子・前田美巳代・
渡辺和尾の5氏共選

応募方法Ⅱ未発表句をB5
程度の用紙に連記
参加料Ⅲ1口につき1000
0円、何口でも可、合点1
0単位、出句締切11月30日

発表Ⅳ平成2年3月緑紙上
出句先Ⅴ愛知県知多郡東浦
町森岡字下今池5-69

川柳みどり会

松森編集室へ。

ト(誌上全国大会)が次の
要項で行われる。

テーマⅠ「美」 選者は、
山田良行・大木俊秀・四枚
田正敏・森恵子(2次選)

岩田三和(1次選・集計)
応募作品Ⅱ句数制限なし・
既発表句可・自作に限る。

会費Ⅲ1000円、賞は最
優秀句1万円・優秀句50
00円・優句2000円等

締切Ⅳ平成2年1月20日
応募先Ⅴ鳥根県能義郡広瀬
町広瀬六三九 広瀬川柳愛
吟会事務局宛

★第18回かもしか誌上全国
川柳大会は次の要項で行わ
れる。かもしか川柳社主催
題Ⅰ「道」3句 未発表句
選者Ⅱ石井有人・佐藤良子
安藤亮介・奥山晴生・本庄
快哉・田中伯・北村泰章・
菊地俊太郎・宮本めぐみ・
千田和美

会費Ⅲ1組1000円
締切Ⅳ11月30日までに青森
市松森字佃240-10 吉
田州花方・かもしか川柳社
松森編集室へ。

★第8回川柳乙賞作品募集
自由吟30句を11組(未発表
句か本年発表作品に限る)

選考委員「細川不凍・大野
風柳・福島真澄・片柳哲郎
尾藤三柳・時実新子・橋高
薫風・寺尾俊平・森中恵美
子・杉野草兵

賞「大賞10万円・準賞1万
円・秀逸1000円

締切「平成2年1月31日
会費不要、出句専用紙を
事務局へ申し込むこと。

出句先「青森県下北郡川内
町浦町高田寄生木方・川柳
乙賞事務局

★岡山県芸術祭参加・第12
回ますかつと川柳大会が12
月3日午前10時から岡山市
中央公民館で開かれる。

兼題と選者(各題2句)
「山」 延永 忠美選
「港」 本田恵二朗選
「川」 寺尾 俊平選
「祈り」 西山茶花選
「船」 藤川 良子選

席題「当日2題
会費「1500円(昼食お
よび発表紙を含む)

★第25回川柳塔きやらばく
忘年句会が12月3日午前11
時から米子駅前米吾ビルで
開かれる。会費は3500円
(昼食・懇親宴・句会報
とも)選者は当日決定・各
題2句。宿題は次のとおり

「眉」「子感」「魚」「ハ
ミング」「堀」「逃げる」
「時間」「喉」「芸」「部
屋」「鳥」。各題呈賞。

■島根県川柳協会は、昭和
63年版島根県川柳作家年鑑
(第10集)を発刊。

■いずも川柳会は、尼録之
助忌を庵号にちなんで「遙
山亭忌」とし、来春、追善
句会を開催する。

■堺川柳会は8月10・16日
堺市高島屋で川柳を展示。

■高槻川柳サークル卯の花
は11月5・6両日、文化祭
に協賛して市民会館で川柳
の作品を展示。

■竹原川柳会は、竹原郵便
局ロビー改修記念事業の一
環として「郵政事業にちな
んだ川柳」を募集した入選
句を展示。

▼同人消息▲

■水粉千翁氏(倉敷市・参
事)は「山陽新聞」(9月5
日付)に「よつこらしよ」
と題して随想を執筆。

■橋高薫風副主幹は「かも
しか」8月号に乙賞選後評
として「若さ礼賛」を執筆

■塩満敏氏は8月19日、第
2回洋上「住宅まつり」で
川柳教室の講師を担当。

▼訂正▲
■9月号の水煙抄(49P)
の山口三千子さんの句を次
のとおり訂正します。

「考えがあつて昼寝をして
居ます」

■9月号の路郎賞・川柳塔
賞候補作中発表表(60P)
の都倉求芽氏の句を次のと
おり訂正いたします。

「鬼も蛇もみんな出といで
春ですよ」

■9月号・佳句地10選(87
P)の選者名は中西兼治郎
の誤植でした。

故金泉萬楽氏句碑 建立募金のお願い

このたび大阪川柳人クラブ初代会長故金泉萬楽氏が生前大阪は申すに及ばず全国的にも川柳に尽されましたご功績は誠に多大であり、その功績を永く顕彰するため、左記要領により句碑建立を計画いたしました。皆様の絶大なるご支援を賜りたくお願い申し上げます。

建立場所 大阪市阿倍野区北畠
阿部野神社境内

募金目標 一〇〇万円
一口20000円(何口でも可)

★払込先 郵便振替口座 大阪8-222906
米沢俊夫

現金小為替送り先 大阪市天王寺区真法院町2-16
木山雄幸 ☎(三三七)76663

主催 大阪川柳人クラブ

後援 番傘川柳本社 川柳瓦版の会

川柳塔社 川柳天守閣

川柳文学社

〈東京芸風書院・刊〉

現代川柳選集

(全5巻)

体装 四六判 上製本(ハードカバー)
約二〇八頁

このたび日本川柳協会のご協力を得て現代川柳選集(全5巻)を刊行いたしました。各地川柳家の代表作各90句および作者のことは収録しております。
全5巻をぜひあなたの書架へ

申込受付中!

特価 一冊 一、五〇〇円(送料共)
何巻を何冊とはがきでお申込みください。
〈申込先〉川柳塔社

吹田市民川柳大会

とき 10月22日(日) 開場午後1時
締切午後2時

ところ 吹田市立千里市民センター
(阪急南千里駅下車東すぐ)

お話し 鶴飼 蟻朗氏
「つなぐ」
西川 景子選

宿題 「気の毒」 志水浩一郎選
「おまへん」 永田 帆船選
「意地」 黒川 紫香選

席題 「テクニク」 森中恵美子選
当日1題 竹森 雀舎選

会費 1000円 粗品呈
各2句(投句拝辞)

主催 吹田市教育委員会
文化団体協議会
吹田川柳会
事務局 吹田市清和園3-18 園田文字
☎381-1437

89 ふれあいの祭典ひょうご 「川柳祭」発表大会

とき 10月29日(日) 11時開場

ところ 西宮市なるお文化ホール
西宮市古川町1丁目12
阪神鳴尾駅南へ徒歩10分

大会内容 入賞作品の講評・表彰式など

記念講演 「落語の中の川柳」 露の 五郎氏

当日句会 (各題2句・締切正午)

「森」 泉 比呂志選

「包む」 黒川 紫香選

「水」 池田 南岳選

「球」 広瀬 反省選

会費無料

主催 ふれあいの祭典実行委員会ほか

第1回 記念句会

摂津川柳「くすの木」

とき 11月2日(木) 正午開場

ところ 摂津市婦人労働会館
摂津市香露園1-3-2
☎07-261-3511 404
(JR千里丘駅下車東口から東南約200メートル)

お話し 亀山 恭太氏

宿題 「強 い」 高杉 鬼遊選
「ゆっくり」 中尾 藻介選

「時 事」 広瀬 反省選

「雑 詠」 森中恵美子選

各題2句・締切午後1時

席題なし 投句歓迎

会費 500円(投句も同じ 切手可)

投句締切 10月25日

投句先 〒566 摂津市南別府町九-三-180七
板谷 明子

主催 摂津市文化連盟「くすの木」
後援 摂津市教育委員会

10月各地句会案内

	日 / 時 および 題	会 場 と 投 句 先
尼 崎 いくしま	6日(金)午後1時から 情・快調・自由吟	サンシビック尼崎 阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市南清水11番1号 田淵定人 句会費 300円 投句料 62円切手3枚
川 柳 塔 まつえ	7日(土)午後1時半から 財布・誤算・憧れ	松江市和多見町 慈雲寺番神堂 〒690 松江市雉賀町1686 恒松町紅 句会費 500円 投句料 500円(62円切手可)
川 柳 塔 わかやま	8日(日)午後1時から 筒・詰める・突く	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒640 和歌山市駕町14 野村太茂津
西宮北口 川 柳 会	9日(月)午後1時から 漫画・不安・自由吟	西宮市中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代 句会費 300円 投句料 62円切手4枚
川 柳 ねやがわ	15日(日)午後1時から 団体・小説・おにぎり・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町6-9 高田博泉 句会費 500円 投句料 62円切手3枚
もくせい 川 柳 会	16日(月)午後1時から 竹・古典・頼る・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
南 大 阪 川 柳 会	19日(木)午後6時から 引く・実入り・芋・利	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋 句会費 500円 投句料 62円切手3枚
富 柳 会	19日(木)午後1時から 平凡・へんぴ・平気	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴町4-1 池 森子
高槻川柳 サークル 卯の花	19日(木)午後1時から 腕力・過ち・ムード・自由吟	高槻市民会館305号室 阪急高槻徒歩5分 〒569 高槻市宮田町3-8-8 川島颯云児 句会費 500円 投句料 62円切手3枚 各題2句
南 海 川 柳 会	20日(金)午後6時から 標準・構成・一致・簡単	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩3分 〒543 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
駒つなぎ 川 柳 会	23日(月)午後6時から 腹・例・本・策	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米 〒545 大阪市阿倍野区天王寺町北1-3-11 津守柳伸
※堺川柳会は15日(日)堺市民川柳の会(79頁参照) ※八尾市民川柳会は22日(日)第36回八尾市文化祭市民川柳大会(79頁参照) ※川柳東大阪は29日(日)第17回市民川柳大会(79頁参照)のため10月例会は休みます。		

★特に記載がない場合 句会費 500円、投句料 310円(62円切手5枚)、各題3句以内
 原稿送り先(締切・毎月20日 予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です)

〒597 貝塚市地藏堂53番地の5-1-401号 宮園射月芳

彰表會 本社10月句會

日時 10月1日(日) 午後6時
会場 大阪市立労働会館

(JR環状線または地下鉄中央線「森ノ宮」下車すぐ) 電話〇六(九四一)六三三二

路郎賞・川柳塔賞表彰

おはなし

兼題 「読む」
「郵便」

「メルヘン」
「澄む」

席題 2題 当日発表

会費 500円

吐田公一
春城 武庫坊
辻白溪子
小出智子
西尾 栗選
各題2句以内

★投句は柳箋(4cm×19cm)に1葉1句。
各業ごとに裏面に必ず氏名明記。
投句料310円(62円切手5枚)同封のこと。

本社11月句會 11月7日(火)

兼題 「表面」「引く」
「秘密」「塔」
川柳塔社

『夜市川柳』募集(3句)

第5回「歩」 題 選者 締切
但見石花菜 10月末

第6回「首」 山本 礫 11月末

第7回「打」 小出 智子 12月末

投句先 〒583 堺市堀上緑町2-9-2
河内天笑方

堺川柳會

12月号発表(10月15日締切)

● 川柳塔(10句) 西尾 栗選
水煙抄(10句) 黒川 紫香選
● 愛染帖(3句) 橘 高薫風選
● 茴香の花(3句・女性) 小出智子選
吟題(3句) 「ベル」 千原理瑛選
「幹事」 小砂白汀選
「終わる」 金井文秋選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

1月号発表(11月15日締切)

● 川柳塔(10句) 西尾 栗選
水煙抄(10句) 黒川 紫香選
● 愛染帖(3句) 橘 高薫風選
● 茴香の花(3句・女性) 小出智子選
吟題(3句) 「玉」 青枝鉄治選
「逢う」 宮崎シマ子選
「始まる」 藤井一二三選

★愛染帖・茴香の花・課題吟は同人・誌友に限らず、どなたでも投句できます。

定価 六百元(送料51円)

半年分三千八百円(送料共)
一年分七千五百円(送料共)

一九八九年九月二十五日印刷
一九八九年十月一日発行

編集兼 西尾 巖
印刷所 藤原童心社

〒545 大阪市阿倍野区三明町二一〇一六
ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話(三三九)六九一四番
振替口座大阪8-133326八番

編集後記

☆十月と言くと、今年も二賞発表の時期が来た。今年

の路郎賞には、宮崎シマ子さんの「さくらさくら今年も皆に逢えました」が選ばれた。平凡なようで人の温か味を感じる句で、この頃詩川柳と云って、筆先だけで作られているフィクション的な句の多い中で、私たちがへの戒めのようにも感じられた。

☆また、川柳塔賞は、池森子さんの「もたれ合う人と喧嘩をしています」に決着。何でもないようだが、喧嘩をしながらも明るい家庭がうかがえるほのぼのとした句であった。ともあれ二賞とも昨年に続いて女性に占められ、政界のマドンナ旋風の煽りを受けたようだった。

☆八月、鳥取市で開かれた第十三回茗人記念川柳大会に参加した。帰路、台風之余波で例の余部の鉄橋が不通となり、バスに切り換

えるなど、ひどい目に逢った。茗人と言えば丁度、前月号に東野大八先生が執筆されたのでご覧いただいたと思う。

☆書店を覗いていると、田辺聖子の『古川柳おちほひろい』という本が、文庫版になっているのを見つけた。そのあとがきに、「古川柳になじんでいると、人間を見る目のあたたかさを養われる気がします」とか、「川柳が卑俗平明にすぎ、精神への批判にまでたかめられていない、ということ

はよく言われることですが、果してそうでしょうか。江戸時代の酷烈な言論思想統制のもとで古川柳の作者たちは、告発の刃を人間の内部へ向けました。古川柳にみる鋭い人間凝視や客観性を私は興ふかく思います」と書いている。

☆「一見おかしみの皮をかぶっているため、卑俗陋劣と見做されやうの、雅のそれよりもすばやく、人間や人生をあばき、諷い諷するの

です」とある。私たちが教えられる所の多い言葉である。(萬)

▼ポストの近くの家に「不用品」と、大きく書いた紙が貼ってあった。うちの家より立派なので自転車を停めた。わが家は建てもう二十五年にもなり、途中改装などしたので当分住むのに何の不安もないが、年々本の数が増え整理どころ

でも捨てることに、瞬間的な自転車を走らせた。そうだ、今日は粗大ゴミ収集日で、不用品はすでに収集されてどんなゴミだったかわからない。玄關の貼紙だけが残っていて私を不思議な気持ちにさせたのである。

▼いくら豊かな日本であっても、街中の家を簡単に手離せるものではない。家ともかくとして、億の金も竹やぶやゴミ捨て場で発見されるのは異常である。と思うのが感覚のズレで、現代の常識も大分変化しているのかも知れない。リクルー

ト株で大金を手にした議員諸氏が、襟のバッジを外さないことも、時代の流れに

よむものらしい。

▼日常何の抵抗もなく使っている「わりばし」も、熱帯雨林の乱伐事情、地球の環境問題まで考え始めると問題が広がり過ぎて答が出せなくなる。「贅沢は敵だ」

戦時中の国策標語を信奉しているわけではないが、毎月の発送日に、仕分けて荷造りする紐は、印刷所からくくって来た紐を再利用している。生れか育ちか時代をおくれか。(き)

★最近、編集の仕事の関係で、かなりの量の医学に関する論文を読む機会がある。健康に関心があるの

は、これだけの専門用語をマスターしなければならぬことなれば大変だろう。

★日本の医学は、幕末ごろ和蘭方からとよばれたが、俗に「蘭方」とよばれたが、これらのことばの中には、緒方洪庵や杉田玄白らがオランダの医学書から訳出したものもあり、明治以後、医学の先進国であったドイツの用語から翻訳したものもまじっている。いずれにしても、彼らの漢文・漢字についても、彼ら豊富な知識・教養が、外国の学問・文化を学び、普及するのに役立ったのはまちがいない。

★それで思い出されるのは日本の軍隊用語である。ここでもことさらに漢語・漢音を多用して、義務教育を終えただけで入隊してくる新兵をまごつかせた。兵器の部品名では、ずいぶんむずかしいことばがあった。これは困った例だが、私たちの生活や文化に漢語や漢語が欠かせない以上、きちんと習得し、正確に使いた

いものである。(正)

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
 平成元年九月二十五日 印刷
 平成元年十月一日発行 (毎月一日発行)
 創刊大正十三年 通巻七四九号 川柳塔 十月号

NEW FORMAL COLLECTION



泣いて笑って……
 夜を通り過ぎたら
 また陽がのぼっていた。
 男のロマンと
 フォーマルと。

OSK JEFF
 ORIGINAL DESIGN

株式会社 **大エスケ**

〒540 大阪市東区南新町1-13
 ☎ 06(941)8015

ボリュームたっぷり スタミナ満点!!

豚饅・焼売・焼餃子



なんば戎橋筋本店
 その他有名百貨店でどうぞ



TEL641-0551

定価 六百元 (送料 五十二円)